569-142イ
1200501517672
569
142イ

改造文庫
第二部 第九十七篇

修禪寺物語

（他三篇）

岡本綺堂著

改造社出版

704

改造文庫

第二部 第九十七篇

修禪寺物語

（他三篇）

岡本綺堂著

改造社出版

569
142イ

目次

修禪寺物語（一幕）……五
佐々木高綱（一幕）……三五
相馬の金さん（三幕）……六一
崇禪寺馬場（四幕）……一三三

修禪寺物語（一幕）

明治四十二年三月作。

明治四十四年五月、明治座初演。

初演當時の主なる役割――夜叉王（市川左團次）娘かつら（市川壽美蔵）かへで（市川莚若）春彥（市川市十郎）源頼家（市村羽左衞門）下田五郎（中村又五郎）金窪兵衞尉（市川荒次郎）修禪寺の僧（市川左升）など。

（伊豆の修禪寺に頼家の面といふあり。作人も知れず、由來もしれず。木彫の假面にて、年を經たるまゝ面目分明ならねど、所謂古色蒼然たるもの、觀來つて一種の詩趣をおぼゆ。當時を追懐してこの稿成る。）

登場人物＝面作師夜叉王。夜叉王の娘かつら。かへで。かへでの婿春彥。源左金吾頼家。下田五郎景安。金窪兵衞尉行親。修禪寺の僧。行親の家來など。

一

伊豆の國狩野の庄、修禪寺村（今の修善寺）桂川のほとり、夜叉王の住家。藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面などをかけ、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素燒の土瓶などかけたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、そのうしろは畑を隔てゝ、塔の峰つゞきの山または丘などみゆ。元久元年七月十八日。

（二重の上手につゞける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる蒲簾をおろせり。庭さきには秋草の花咲きたる垣に沿うて荒むしろを敷き、姉娘桂、廿歲。妹娘楓、

十八歲。相對して紙砧を擣つてゐる。）

かつら　（やがて砧の手をやめる。）一晌餘りも擣ちつゞけたので、肩も腕も痺るゝやうな。もうよいほどにして止めうでないか。

かへで　とは云ふものゝ、きのふまでは盆休みであつたほどに、けふからは精出して働かうではござんせぬか。

かつら　働きたくばお前ひとりで働くがよい。父樣にも春彥どのにも褒められようぞ。わたしは嫌ぢや、嫌になつた。（投げ出すやうに砧を捨つ。）

かへで　貧の手業に姉妹が、年ごろ擣ちなれた紙砧を、兎かくに飽きた、嫌になつたと、むかしに變るお前がこの頃の素振は、どうしたことでござるか喃。

かつら　（あざ笑ふ。）いや、昔とは變らぬ。ちつとも變らぬ。わたしは昔からこのやうな事を好きではなかつた。父さまが鎌倉においでなされたら、わたし等も斯うはあるまいものを、名聞を好まれぬ職人氣質とて、この伊豆の山家に隱れ栖、親につれて子供までも鄙にそだち、詮事無しに今の身の上ぢや。さりとてこのまゝに朽ち果てようとは夢にも思はぬ。近いためしは今わたし等が擣つてゐる修禪寺紙、はじめは賤しい人の手につくられても、色好紙とよばれて世に出づれば、高貴のお方の手にも觸るゝ。女子とてもその通りぢや。たとひ賤しう育つても、色好紙の色よくば、關白大臣將軍家のおそばへも、召出されぬとは限るまいに、賤の女がなりはひの紙砧、いつまで擣ちおぼえたとて何となららうぞ。嫌になつたと云うたが無理か。

かへで　それはおまへが口癖に云ふことぢやが、人には人それ〴〵の分があるもの。將軍家のお側近う召さるゝなどと、夢のやうな事をたのみにして、心ばかり高う打ちあがり、末はなんとならうやら、わたしは案じられてなりませぬ。

かつら　お前とわたしとは心が違ふ。妹のおまへは今年十八で、春彥といふ郎を有つた。それに引きかへて姉のわたしは、二十歲といふ今日の今まで、夫もさだめずに過したは、あたら一生を草の家に、住み果つまいと思へばこそぢや。職人風情の妻となつて、滿足して暮すおまへ等に、わたしの心はわかるまい喃。（空嘯く。）

（楓の婿春彥、廿餘歲、奥より出づ。）

春彥　桂どの。職人風情と左も卑しい者のやうに云はれたが、職人あまたあるなかにも、面作師といへば、世に恥かしからぬ職であらうぞ。あらためて申すに及ばねど、わが日本開闢以來、はじめて舞樂のおもてを彫まれたは、勿體なくも聖德太子、つゞいて藤原淡海公、弘法大師、倉部の春日、この人々より傳へて今に至る、由緖正しき職人とは知られぬか。

かつら　それは職が尊いのでない。聖德太子や淡海公といふ、その人々が尊いのぢや。彼の人々も生業に、面作りはなされまいが……。

春彥　生業にしては卑しいか。さりとは異なことを聞くものぢやの。この春彥が明日にもあ

れ、稀代の面をつくり出して、天下一の名を取つても、お身は職人風情と侮るか。

かつら　云んでもないこと、天下一でも職人は職人ぢや、殿上人や弓取とは一つになろまい。

春　彦　殿上人や弓取がそれほどに尊いか。職人がそれほどに卑しいか。

かつら　はて、くどい。知れたことぢやに……。

（桂は顔をそむけて取合はず。春彦、むつとして詰めよるを、楓はあわてゝ押隔てる。）

かへで　あゝ、これ、一旦かうと云ひ出したら、飽までも云ひ募るが姉さまの氣質、逆らうては悪い。いさかひはもう止してくだされ。

春　彦　その氣質を知ればこそ、日ごろ堪忍してゐれど、あまりと云へば詞が過ぐる。女房の緣につながりて、姉と立つれば附け上り、やゝもすれば我を輕しむる面憎さ。仕儀によつては姉とは云はさぬ。

かつら　おゝ、姉と云はれずとも大事ござらぬ。職人風情を妹婿に有つたとて、姉の見得にも手柄にもなるまい。

春　彦　まだ云ふか。

（春彦は又つめ寄るを、楓は心配して制す。この時、細工場の簾のうちにて、父の聲。）

夜叉王　えゝ、騒がしい。鎭まらぬか。

（これを聽きて春彦は控へる。楓は起つて蒲簾をまけば、伊豆の夜叉王、五十餘歳、烏帽子、筒袖、小袴にて、鑿と槌とを持ち、木彫の假面を打つてゐる。膝のあたりには木の屑など取散らしたり。）

春　彦　由なきことを云ひ募つて、細工の御さまたげをも省みぬ不調法、なにとぞ御料簡くださりませ。

かへで　これもわたしが姉様に、意見がましいことなど云うたが基。姉様も春彦どのも必ず叱つて下さりまするな。

夜叉王　おゝ、なんで叱らう、叱りはせぬ。姉妹の喧嘩はまゝある事ぢや。珍らしうもあるまい。時に今日ももう暮るゝぞ。秋のゆふ風が身にしみるわ。そち達は奥へ行つて夕飯の支度、燈火の用意でもせい。

二　人　あい。

（桂と楓は起つて奥に入る。）

夜叉王　なう、春彦。妹とは違うて氣がさの姉ぢや。おなじ屋根の下に起き臥すれば、一年三百六十日、面白からぬ日も多からうが、何事もわしに免じて料簡せい。あれを產んだ母親は、そのむかし、都の公家衆に奉公したもの、緣あつてこの夜叉王と女夫になり、あづまへ流れ下つたが、そだちが育ちとて氣位高く、職人風情に連れ添うて、一生むなしく朽ち果るを悔みながらに世を終つた。その腹を分けた姉妹、おなじ胤とはいひながら、

姉は母の血をうけて公家氣質、妹は父の血をひいて職人氣質、子の心がちがへば親の愛も違うて、母は姉贔屓、父は妹贔屓、思ひ〳〵に子どもの贔屓爭ひから、埒もない女夫喧嘩などしたこともあつたよ。はゝゝゝゝ。

春彦　さう承れば桂どのが、日ごろ職人をいやしみ嫌ひ、世にきこえたる殿上人か弓取ならでは、夫に有たぬと誇らるゝも、母御の血筋をつたへし爲、血は爭はれぬものでござりまするな。

夜叉王　ぢやによつて、あれが何を云はうとも、滅多に腹は立てまいぞ、人を人とも思はず、氣位高う生れたは、母の子なれば是非がないのぢや。

（暮の鐘きこゆ。奥より楓は燈臺を持ちて出づ。）

春彦　おゝ取紛れて忘れてゐた。これから大仁の町まで行つて、このあひだ誂へて置いた鑿と小刀をうけ取つて來ねばなるまいか。

かへで　けふはもう暮れました。いつそ明日にしなされては……。

春彦　いや、いや、職人には大事の道具ぢや。一刻も早う取寄せて置かうぞ。

夜叉王　おゝ、職人はその心掛けがなうてはならぬ。更けぬ間に、ゆけ、行け。

春彦　夜とは申せど通ひなれた路、一晌ほどに戻つて來まする。

（春彦は出てゆく。楓は門にたちて見送る。修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、つゞいて源の頼家卿、廿三歳。あとより下田五郎景安、十七八歳、頼家の太刀をさゝげて出づ。）

僧　これ、これ、將軍家の御しのびぢや。粗相があつてはなりませぬぞ。

（楓ははッと平伏す。頼家主従すゝみ入れば、夜叉王も出で迎へる。）

夜叉王　思ひもよらぬお成とて、なんの設けもござりませぬが、先づあれへお通りくださりませ。

（頼家は縁に腰を掛ける。）

夜叉王　して、御用の趣は。

頼家　問はずとも大方は察して居らう。わが面體を後のかたみに殘さんと、さきに其方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を經るも出來せず。幾たびか延引を申立てゝ、今まで打過ぎしは何たることぢや。

五郎　多寡が面一つの細工、いかに丹精を凝すとも、百日とは費すまい。お細工仰せつけられしは當春の初め、其後已に半年をも過ぎたるに、いまだ獻上いたさぬとは餘りの懈怠、もはや猶豫は相成らぬと、上樣の御機嫌さん〴〵ぢやぞ。

頼家　予は生れついての性急ぢや。いつまで待てど埒あかず。あまりに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣はすこと無用と、予が直々に催促にまゐつた。おのれ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。

夜叉王　御立腹おそれ入りましてござりまする。勿體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を彫

めとあるは、職のほまれ、身の面目、いかでか等閑に存じませうや。御用うけたまはりて已に半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜晝となく打ちましても、意にかなふほどのもの一つも無く、さらに打ち替へ作り替へて、心ならずも延引に延引をかさねましたる次第、なにとぞお察しくださりませ。

頼家　えゝ、催促の都度におなじことを……。その申譯は聞き飽いたぞ。

五郎　この上は唯だ延引とのみでは相濟むまい。いつの頃までにはかならず出來するか、あらかじめ期日をさだめてお詫を申せ。

夜叉王　その期日は申上げられませぬ。左に鑿をもち、右に槌を持てば、面はたやすく成るものと思召すか。家をつくり、塔を組む、番匠なんどとは事變りて、これは生なき粗木を削り、男、女、天人、夜叉、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正のたましひを打ち込む面作師。五體にみなぎる精力が、兩の腕におのづから湊まる時、わがたましひは流るゝ如く彼に通ひて、はじめて面も作られまする。但しその時は半月の後か、一月の後か、あるひは一年二年の後か。われながら確とはわかりませぬ。

僧　これ、これ、夜叉王どの。上樣は御自身も仰せらるゝごとく、至つて御性急でおはします。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取止めのないことばかり申上げてゐるたら、御疳癖がいよ／＼募らうほどに、こなたも職人冥利、いつの頃までと日を限つて、しかと御返事を申すがよからうぞ。

夜叉王　ぢやと云うて、出來ぬものはならう。

僧　なんの、こなたの腕で出來ぬことがあらう。面作師も多くあるなかで、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉までも聞えた者ぢやに……。

夜叉王　さあ、それゆゑに出來ぬと云ふのぢや。わしも伊豆の夜叉王と云へば、人にも少しは知られたもの。たとひお咎め受けうとも、已が心に染まぬ細工を、世に殘すのはいかにも無念ぢや。

頼家　なに、無念ぢやと……。さらばいかなる祟りを受けうとも、早急には出來ぬといふか。

夜叉王　恐れながら早急には……。

頼家　むゝ、おのれ覺悟せい。

（疳癖募りし頼家は、五郎のさゝげたる太刀を引つ取つて、あはや拔かんとす。奥より桂、走り出づ。）

かつら　まあ、まあ、お待ちくださりませ。

頼家　えゝ、退け、のけ。

かつら　先づお鎭まりくださりませ。面は唯今獻上いたしまする。なう、父樣。

（夜叉王は默して答へず。）

五郎　なに、面は已に出來してをるか。

頼家　えゝ、おのれ。前後不揃ひのことを申立てゝ、予をあざむかうでな。

かつら　いえ、いえ、嘘いつはりではございませぬ。面はたしかに出來して居りまする。これ、父樣。もうこの上は是非がござんすまい。

かへで　ほんにさうぢや。ゆうべ漸く出來したと云ふあの面を、いつそ獻上なされては……。

僧　それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜からうが、命も惜からう。出來した面があるならば、早う上樣にさしあげて、お慈悲をねがふが上分別ぢやぞ。

夜叉王　命が惜いか、名が惜いか、こなた衆の知つたことでない。默つておゐやれ。

僧　さりとて、これが見てゐられうか。さあ、娘御。その面を持つて來て、兎もかくも御覽に入れたがよいぞ。早う、早う。

かへで　あい、あい。

（かへでは細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持ち出づ。桂はうけ取りて賴家の前にさゝぐ。賴家は無言にて桂の顏をうちまもり、心少しく解けたる體なり。）

かつら　いつはりならぬ證據、これ御覽くださりませ。

（賴家は假面を取りて打ながめ、思はず感歎の聲をあげる。）

賴家　おゝ、見事ぢや。よう打つたぞ。

五郎　上樣おん顏に生寫しぢや。

賴家　むゝ。（飽かず打戍る。）

僧　さればこそ云はぬことか。それほどの物が出來してゐながら、兎かう澁つて居られたは、夜叉王どのも氣の知れぬ男ぢや。はゝゝゝ。

夜叉王　（形をあらためる。）何分にもわが心にかなはぬ細工、人には見せじと存じましたが、かう相成つては致方もござりませぬ。方々にはその面をなんと御覽なされまする。

賴家　さすがは夜叉王、あつぱれの者ぢや。賴家も滿足したぞ。

夜叉王　あつぱれとの御賞美は憚りながらおめがね違ひ、それは夜叉王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んでをりまする。

五郎　面が死んでをるとは……。

夜叉王　年ごろあまた打つたる面は、生けるがごとしと人も云ひ、われも許して居りましたが、不思議やこのたびの面に限つて、幾たび打直しても生きたる色なく、たましひもなき死人の相……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎　そちは左樣に申しても、われらの眼には矢はり生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉王　いや、いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼に恨を宿し、何者をか呪ふがごとき、怨靈怪異なんどのたぐひ……。

僧　あ、これ、これ、そのやうな不吉のことは申さぬものぢや。御意にかなへばそれで重疊、ありがたくお禮を申されい。

頼　家　む、。兎にも角にもこの面は頼家の意にかなうた。持歸るぞ。
夜叉王　強て御所望とござりますれば……。
頼　家　おゝ、所望ぢや。それ。

（頼家は頤にて示せば、かつら心得て假面を箱に納め、すこしく媚を含みて頼家にさゝぐ。頼家は更にその顏をぢつと視る。）

頼　家　いや、綴かされて主人に所望がある。この娘を予が手許に召仕ひたう存ずるが、奉公さする心はないか。
夜叉王　ありがたい御意にござりまするが、これは本人の心まかせ、親の口から御返事は申上げられませぬ。

（桂は臆せず、すゝみ出づ。）

かつら　父樣。どうぞわたしに御奉公を……。
頼　家　うい奴ぢや。奉公をのぞむと申すか。
かつら　はい。
頼　家　さらばこれよりその面をさゝげて、頼家の供してまゐれ。
かつら　かしこまりました。

（頼家は起つ。五郎も起つ。桂もつゞいて起つ。楓は姉の袂をひかへて、心許なげに囁く。）

かへで　姉さま。おまへは御奉公に……。
かつら　おまへは先程、夢のやうな望みと笑うたが、夢のやうな望みが今叶うた。

（かつらは誇りがに見かへりて、庭に降り立つ。）

僧　やれ、やれ、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王どの、あす又逢ひませうぞ。

（頼家は行きかゝりて物につまづく。桂は走り寄りてその手を取る。）

頼　家　おゝ、いつの間にか暗うなつた。

（僧はすゝみ出でて、桂に燈籠を渡す。桂は假面の箱を僧にわたし、我は片手に燈籠を持ち、片手に頼家をひきて出づ。夜叉王はぢつと思案の體なり。）

かへで　父さま、お見送りを……。

（夜叉王は初めて心づきたる如く、娘と共に門口に送り出づ。）

五　郎　そちへの御褒美は、あらためて沙汰するぞ。

（頼家等は相善後して出でゆく。夜叉王は起ち上りて、しばらく默然としてゐたりしが、やがてつか〱と縁にあがり、細工場より槌を持ち來りて、壁にかけたる種種の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓はおどろきて取縋る。）

かへで　あゝ、これ、なんとなさる。おまへは物に狂はれたか。
夜叉王　せつぱ詰りて是非におよばず、拙き細工を獻上したは、悔んでも返らぬわが不運。あのやうな面が將軍家のおん手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と竇物帳にも記され

て、百千年の後までも笑ひをのこさば、一生の名折れ、末代の恥辱、所詮夜叉王の名は廢つた。職人もけふ限り、再び槌は持つまいぞ。

かへで　さりとは短氣でござりませう。いかなる名人上手でも細工の出來不出來は時の運。一生のうちに一度でも天晴れ名作が出來ようならば、それが即ち名人ではござりませぬか。

夜叉王　むゝ。

かへで　拙い細工を世に出したを、さほどに無念と思召さば、これからいよ〳〵精出して、世をも人をもおどろかすほどの立派な面を作り出し、恥を雪いでくださりませ。

（かへでは縋り泣く。夜叉王は答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。日暮れて笛の聲遠くきこゆ。）

二

おなじく桂川のほとり、虎溪橋の袂。川邊には柳幾本たちて、芒と蘆とみだれ生ひたり。橋を隔てて修禪寺の山門みゆ。同日の宵。

（下田五郎は賴家の太刀を持ち、僧は假面の箱をかゝへて出づ。）

五郎　上樣は桂どのと、川邊づたひにそゞろ歩き遊ばされ、お供の我々は一足先へまゐれとの御意であつたが、修禪寺の御座所もはや眼のまへぢや。この橋の袂にたゝずみて、お歸りを暫時相待たうか。

僧　いや、いや、それは宜しうござるまい。桂殿といふ婦女をお見出しあつて、浮れあるきに餘念もおはさぬところへ、我々のごとき邪魔外道が附き纏うては、却つて御機嫌を損ずるでござらうぞ。

五郎　なにさまなう。

（とは云ひながら、五郎は猶不安の體にてたゝずむ。）

僧　殊に愚僧はお風呂の役、早う戻つて支度をせねばなるまい。

五郎　お風呂とて自づと沸いて出づる湯ぢや。支度を急ぐこともあるまいに……。先づお待ちやれ。

僧　はて、お身にも似合はぬ不粹をいふぞ。若き男女がむつまじう語らうてゐるところに、法師や武士は禁物ぢやよ。はゝゝゝ。さあ、ござれ、ござれ。

（無理に袖をひく。五郎は心ならずも曳かるゝまゝに、打連れて橋を渡りゆく。月出づ。桂は燈籠を持ち、賴家の手をひきて出づ。）

賴家　おゝ、月が出た。川原づたひに夜ゆけば、芒にまじる蘆の根に、水の聲、蟲の聲、山家の秋はまた一入の風情ぢやなう。

かつら　馴れては左程にもおぼえませぬが、鎌倉山の星月夜とは事變りて、伊豆の山家の秋の夜は、さぞお寂しうござりませう。

（賴家はありあふ石に腰打ちかけ、桂は燈籠を持ちたるまゝ、橋の欄に凭りて立つ。）

（月明かにして蟲の聲きこゆ。）

頼家　鎌倉は天下の覇府、大小名の武家小路、甍をならべて綺羅を競へど、それはうはべの榮えにて、うらはおそろしき罪の巷、悪魔の巣ぞ。人間の住むべきところで無い。鎌倉などへは夢も通はぬ。（月を仰ぎて云ふ。）

かつら　鎌倉山に時めいておはしなば、日本一の將軍家、山家そだちの我々は下司にもお使ひなされまいに、御果報拙いがわたくしの果報よ。忘れもせぬこの三月、窟詣での下向路、桂谷の川上で、はじめて御目見得をいたしました。

頼家　おゝ、その時そちの名を問へば、川の名とおなじ桂と云うたな。

かつら　まだそればかりではござりませぬ。この窟のみなかみには、二本の桂の立木ありて、その根よりおのづから清水を噴き、末は修禪寺にながれて入れば、川の名を桂とよび、またその樹を女夫の桂と昔よりよび傳へてをりまするを、お答へ申上げましたれば、おまへ樣はなんと仰せられました。

頼家　非情の木にも女夫はある。人にも女夫はありさうな……と、つい戯れに申したなう。

かつら　お戯れかは存じませぬが、そのお詞が冥加にあまりて、この願かならず叶ふやうと、百日のあひだ人にも知らさず、窟へ日參いたせしに、女夫の桂のしるしありて、ゆくへも知れぬ川水も、嬉しき逢瀬にながれ合ひ、今月今宵おん側近う、召出されたる身の冥加……。

頼家　武運つたなき頼家の身近うまゐるがそれほどに嬉しいか。そちも大方は存じて居らう。予には比企の判官能員の娘、若狹といへる側女ありしが、能員ほろびし其砌に、不憫や若狹も世を去つた。今より後はそちが二代の側女、名もそのまゝに若狹と云へ。

かつら　あの、わたくしが若狹の局と……。えゝ、ありがたうござりまする。

頼家　あたゝかき湯の湧くところ、溫かき人の情も湧く。戀をうしなひし頼家は、こゝに新しき戀を得て、心の痛みもやうやく癒えた。今はもろ〳〵の煩惱を斷つて、安らけくこの地に生涯を送りたいものぢや。さりながら、月には雲の障りあり、その望みも果敢なく破れて、予に萬一のことあらば、そちの父に打たせる彼のおもてを形見と思へ、叔父の蒲殿は罪無うして、この修禪寺の土となられた。わが運命も遲かれ速かれ、おなじ道を辿らうも知れぬぞ。

（月かくれて暗し。籠手、臑當、腹卷したる軍兵二人、上下よりうかゞひ出でゝ、芒むらに潛む。蟲の聲俄にやむ。）

かつら　あたりにすだく蟲の聲、吹き消すやうに止みましたは……。

頼家　人やまゐりし。心をつけよ。

（金窪兵衛尉行親、三十餘歳。烏帽子、直垂、籠手、臑當にて出づ。）

行親　上、これに御座遊ばされましたか。

頼家　誰ぢや。

（桂は燈籠をかざす。賴家透しみる。）

行親　金窪行親でござりまする。

賴家　おゝ、兵衞か。鎌倉表より何としてまゐつた。

行親　北條殿のおん使に……。

賴家　なに、北條殿の使……。扨はこの賴家を討たうが爲な。

行親　これは存じも寄らぬこと。御機嫌伺ひとして行親參上、ほかに仔細もござりませぬ。

賴家　云ふな、兵衞。物の具に身をかためて夜中の參入は、察するところ、北條の密意をうけて予を不意撃にする巧みであらうが……。

行親　天下やうやく定まりしとは申せども、平家の殘黨ほろび殲さず。且は函根より西の山路に、盜賊ども徘徊する由きこえましたれば、路次の用心として斯樣にいかめしう扮裝ち申した。上に對したてまつりて、不意撃の狼藉なんど、いかで、いかで……。

賴家　たとひ如何やうに陳ずるとも、憎き北條の使なんどに對面無用ぢや。使の口上聞くにおよばぬ。歸れ、かへれ。

（行親は騷がず。しずかに桂をみかへる。）

行親　これにある女性は……。

賴家　予が召使ひの女子ぢやよ。

行親　おん謹しみの身を以て、素性も得知れぬ賤しの女子どもを、おん側近う召されしは……。

（桂は堪へず、すゝみ出づ。）

かつら　兵衞どのとやら、お身は卜者か人相見か。初見參のわらはに對して、素性賤しき女子なぞと、迂濶に物を申されな。妾は都のうまれ、母は殿上人にも仕へし者ぞ。まして今は將軍家のおそばに召されて、若狹の局とも名乘る身に、一應の會釋もせで無禮の雜言は、鎌倉武士といふにも似ぬ、さりとは作法をわきまへぬ者なう。

（冷笑はれて、行親は眉をひそめる。）

行親　なに。若狹の局……。して、それは誰が許された。

賴家　おゝ、予が許した。

行親　北條どのにも諜らせたまはず……。

賴家　北條がなんぢや。おのれ等は二口目には北條といふ。北條がそれほどに尊いか。時政も義時も予の家來ぢやぞ。

行親　さりとて、尼御臺もおはしますに……。

賴家　えゝ、くどい奴。おのれ等の云ふこと、聽くべき耳は持たぬぞ。退れ、すされ。

行親　さほどにおむづかり遊ばされては、行親申上ぐべきやうもござりませぬ。仰せに任せて今宵はこのまゝ退散、委細は明朝あらためて見參の上……。

賴家　いや、重ねて來ること相成らぬぞ。若狹、まゐれ。

（賴家は起ち上りて桂の手を取り、打連れて橋を渡り去る。行親はあとを見送る。芒のあひだに潜みし軍兵出づ。）

兵一　先刻より忍んで相待ち申したに、なんの合圖もございませねば……。

兵二　手を下すべき機もなく、空しく時を移し申した。

行親　北條殿の密旨を蒙り、近寄つて討ちたてまつらんと今宵ひそかに伺候したるが、流石は上樣、早くもそれと覺られて、われに油斷を見せたまはねば、無念ながらも仕損じた。この上は修禪寺の御座所へ寄かけ、多人數一度にこみ入つて本意を遂げうぞ。上樣は早業の達人、近習の者どもにも手だれあり。小勢の敵と侮りて不覺を取るな。場所は狹し、夜いくさぢや。うろたへて同士擊すな。

兵　はつ。

行親　一人はこれより川下へ走せ向うて、村の出口に控へたる者どもに、即刻かゝれと下知を傳へい。

兵一　心得申した。

（一人は下手へ走り去る。行親は一人を具して上手に入る。木かげより春彥、うかがひ出づ。）

春彥　大仁の町から戻る路々に、物の具したる軍兵が、こゝに五人、かしこに十人屯して、出入りのものを一々詮議するは、合點がゆかぬと思うたが、さては鎌倉の下知によつて、

上樣を失ひたてまつる結構な。さりとは大事ぢや。

（遠近にて宿鳥のおどろき起つ聲。下田五郎は橋を渡りて出づ。）

五郎　常はさびしき山里の、今宵は何とやらん物さわがしく、事ありげにも覺ゆるぞ。念のために川の上下を、一わたり見廻らうか。

春彥　五郎どのではおはさぬか。

五郎　おゝ、春彥か。

（春彥は近きてさゝやく。）

五郎　や、なんと云ふ。金窪の參入は……。上樣を……。確と左樣か。むゝ。

（五郞はあわたゞしく引返してゆかんとする時、橋の上より軍兵一人、長卷をたづさへて出で、無言にて擊つてかゝる。五郞は拔きあはせて、忽ち斬つて捨つ。軍兵數人、上下より出で、五郞を押つ取りまく。）

五郎　やあ、春彥。こゝはそれがしが受け取つた。そちは御座所へ走せ參じて、この趣を注進せい。

春彥　はつ。

（春彥は橋をわたりて走り去る。五郞は左右に敵を引き受けて奮鬪す。）

三

もとの夜叉王の住家。夜叉王は門にたちて望む。修禪寺にて早鐘を撞く音きこゆ。

かへで　父様。夜討ぢや。

（向ぅより楓は走り出づ。）

夜叉王　おゝ、むすめ、見て戻つたか。

かへで　敵は誰やらわからぬが、人數はおよそ二三百人、修禪寺の御座所へ夜討をかけましたぞ。

夜叉王　俄にきこゆる人馬の物音は、何事かと思うたに、修禪寺へ夜討とは……。平家の殘黨か、鎌倉の討手か。こりや容易ならぬ大變ぢやなう。

かへで　生憎に春彦どのはありあはさず、なんとしたことでござりませうな。

夜叉王　我々がうろ〳〵立騷いだとて、なんの役にも立つまい。たゞその成行を觀てゐるばかりぢや。まさかの時には父子が手をひいて立退くまでのこと、平家が勝たうが、源氏が勝たうが、北條が勝たうが、われ〳〵にはかゝりあひのないことぢや。

かへで　それぢやと云うて不意のいくさに、姉様はなんとなされうか、もし逃惑うて過失でも……。

夜叉王　いや、それも時の運ぢや、是非もない。姉にはまた姉の覺悟があらうよ。

（寺鐘と陣鐘とまじりてきこゆ。楓は起ちつ居つ、幾たびか門に出でゝ心痛の體、向ぅより春彦走り出づ。）

かへで　おゝ、春彦どの。待ちかねました。

春彦　寄手は鎌倉の北條方、しかも夜討の相談を、測らず木かげて立聽きして、其由を御注進申上げうと、修禪寺までは駈け付けたが、前後の門はみな圍まれ、翼なければ入ることかなはず、殘念ながらおめ〳〵戻つた。

かへで　では、姉様の安否も知れませぬか。

春彦　姉はさて措いて、上様の御安否さへもまだ判らぬ。小勢ながらも近習の衆が、火花をちらして追つ返しつ、今が合戰最中ぢや。

夜叉王　なにを云ふにも多勢に無勢、御所方とても鬼神ではあるまいに、勝負は大方知れてある。とても逃れぬ御運の末ぢや。蒲殿といひ、上様と云ひ、いかなる因緣かこの修禪寺には、土の底まで源氏の血が沁みるなう。

（寺鐘烈しくきこゆ。春彦夫婦は再び表をうかゞひ見る。）

かへで　おゝ、おびたゞしい人の足音……。鎬を削る太刀の音……。

春彦　こゝへも次第に近いてくるわ。

（桂は賴家の假面を持ちて額には髮をふりかけ、直垂を着て長卷を持ち、手負の體にて走り出で、門口に來りて倒る。）

春彦　や、誰やら表に……。

（夫婦は走り寄りて扶け起し、庭さきに伴ひ入るれば、桂は又倒れる。）

春　彦　これ、傷は淺うござりまするぞ。心を確に持たせられい。

かつら　（息もたゆげに。）おゝ妹……。春彦どの……。父様はどこにぢや。

夜叉王　や、なんと……。

（夜叉王は怪みて立ちよる。桂は顔をあげる。みな〳〵驚く。）

春　彦　や、春彦や侍衆とおもひの外……。

夜叉王　おゝ、娘か。

かへで　姉さまか。

春　彦　して、この體は……。

かつら　上様お風呂を召さるゝ折から、鎌倉勢が不意の夜討……。味方は小人數、必死にたゝかふ。女でこそあれこの桂も、御奉公はじめの御奉公納めに、この面をつけてお身がはりと、早速の分別……。月の暗きを幸ひに打物とつて庭におり立ち、左金吾頼家これにありと、呼はり呼はり走せ出づれば、むらがる敵は夜目遠目に、まことの上様ぞと心得て、うち洩さじと追つかくる。

夜叉王　さては上様お身替りと相成つて、この面にて敵をあざむき、こゝまで斬抜けてまゐつたか。（血に染みたる假面を取りてぢつと視る。）

春　彦　我々すらも侍衆と見あやまつた程なれば、敵のあざむかれたも無理ではあるまい。

かへで　とは云ふものゝ、淺ましいこのお姿……。姉様死んで下さりまするな。（取縋りて泣く。）

かつら　いや、いや。死んでも憾みはない。賤が伏屋でいたづらに、百年千年生きたとて何とならう。たとひ半晌一晌でも、將軍家のおそばに召出され、若狹の局といふ名をも給はるからは、これで出世の望もかなうた。死んでもわたしは本望ぢや。

（云ひかけて弱るを、春彦夫婦は介抱す。夜叉王は假面をみつめて物云はず。以前の修禪寺の僧、頭より袈裟をかぶりて逃げ來る。）

僧　大變ぢや、大變ぢや。かくまうて下され、隱まうてくだされ。（内に駈入りて、桂を見て又おどろく。）やあ、こゝにも手負が……。おゝ、桂殿……。こなたもか。

かつら　して、上様は……。

僧　お悼はしや、御最期ぢや。

かつら　えゝ。（這ひ起きて屹と視る。）

僧　上様ばかりか、御家來衆も大方は斬死……。わし等も傍杖の怪我せぬうちと、命からがら逃げて來たのぢや。

春　彦　では、お身がはりの効もなく……。

かへで　遂にやみ〳〵御最期か。

（桂は失望してまた倒る。楓は取付きて叫ぶ。）

かへで　これ、姉さま。心を確に……。なう、父様。姉さまが死にまするぞ。

（今まで一心に假面をみつめたる夜叉王、はじめて見かへる。）

夜叉王　おゝ、姉は死ぬるか。姉もさだめて本望であらう。父もまた本望ぢや。

かへで　えゝ。

夜叉王　幾たび打ち直してもこの面に、死相のあり／＼と見えたるは、われ拙きにあらず。鈍きにあらず、源氏の將軍頼家卿が斯く相成るべき御運とは、今といふ今、はじめて覺つた。神ならでは知しめされぬ人の運命、先づわが作にあらはれしは、自然の感應、自然の妙、技藝神に入るとはこの事よ。伊豆の夜叉王、われながら天晴れ天下一ぢやなう。（快げに笑ふ。）はゝゝゝゝ。

かつら　（おなじく笑ふ。）わたしも天晴れお局樣ぢや。死んでも思ひ置くことない。些とも早う上樣のおあとを慕うて、冥土のおん供……。

夜叉王　やれ、娘、わかき女子が斷末魔の面、後の手本に寫しておきたい。苦痛を堪へてしばらく待て。春彦、筆と紙を……。

春　彦　はつ。

（春彦は細工場に走り入りて、筆と紙などを持ち來る。夜叉王は筆を執る。）

夜叉王　娘、顏をみせい。

かつら　あい。

（桂は春彦夫婦に扶けられて這ひよる。夜叉王は筆を執りて、その顏を模寫せんとす。僧は口のうちにて念佛す。）

——幕——

佐々木高綱（一幕）

大正二年十一月作。

大大三年十月。新富座初演。

初演當時の主なる役割——佐々木高綱（市川左團次）娘薄衣（市川松蔦）佐々木定重（市川新之助）馬飼子之介（市川壽美藏）姉おみの（阪東秀調）僧智山（市川左升）など。

登場人物——佐々木四郎高綱。その娘薄衣。佐々木小太郎定重。馬飼子之介。その姉おみの。高野の僧智山。鹿島與一。甲賀六郎。侍女小萬。佐々木の家來など。

江州佐々木の庄、佐々木高綱の屋敷。建久元年十二月の午後、晴れたる日。中央より下のかたにかけて、大いなる廐あり。但し舞臺に面せる方はその裏手と知るべし。中央よりすこしく上のかたには梅の大樹ありて、花は白く咲きみだれたり。奥の方には木立のひまに屋敷の建物みゆ。

（佐々木四郎高綱、三十七八歳、梅の樹の下に立ちて馬の洗足するを見てゐる。家來鹿島與一、四十餘歳。甲賀六郎、二十五六歳。おなじく馬の左右に立ちて見る。馬かひ子之介、二十歳前後の律義なる若者。名馬生月を廐のうしろに牽き出して洗足さしてゐる。）

高綱　けふはよい日和になつたなう。比良のいたゞきに雪はみえても時候は俄に春めいて來たやうぢや。をちこちで小鳥が樂しさうに囀づるわ。

與一　鎌倉どのが初めて御上洛に、かやうな日和つゞきと申すはまことにおめでたい儀でござりまするな。

六　郎　お先觸れの同勢はもはや尾州の熱田まで到着したとか申すことでござりまする。

（高綱は聞かざるもの丶如く、馬のそばに進みてその平首を輕く叩きなどする。）

高　綱　子之介、よう働くな。

子之介　はあ。（無言にて洗足さしてゐる。）

高　綱　そちが蔭ひなたなく働らいて、あさゆふ心をつけて養うてくる丶ほどに……。（家來を見かへる。）これ、見い、一時はすこしく衰へた馬も、このごろは再びすこやかに生ひ立つて、毛澤もひとしほ美しうなつたわ。

子之介　（惚々と馬をみる。）よい御馬でござりますなう。

與　一　よい筈ぢや。これは鎌倉どのが御祕藏の名馬で、世にもきこえたる生月ぢや。そちも定めて存じて居らう。かの宇治川の合戰に、梶原の磨墨に乘り勝つて、殿が先陣の功名させられたも、一つにはこの生月の働きぢやぞ。

六　郎　あの折のありさまは思ひ出しても勇ましい。名に負ふ宇治の大河には、雪解の水が滔々とみなぎり落ちて來る。川の向ひには木曾の人數およそ五百餘騎、楯をならべて待ち受けてゐたわ。

與　一　まして河の底には亂杭を打つて、大綱小綱を張りわたし、馬の足をさ丶へんと巧んである。なみ／＼の者ではよも渡すまじと見てあるところへ、殿は生月、梶原は磨墨、黑馬二匹が轡をならべて、平等院の坤、たちばなの小島が崎よりざんぶ／＼と乘り入つた。

高　綱　（遮る。）え丶、珍らしうもない。おけ、おけ。（馬にむかひて。）なう、生月。彼の宇治川を初めとして、つゞいて一の谷、八島、壇の浦、高綱と生死を共にして、そちも隨分働いたなう。が、それも今はむかしの夢で、そちも高綱も再び功名をあぐる時節はあるまい。あたら名馬も飼殺しぢや。（嘆息しつ丶子之介にむかひ。）けふは二日、そちが亡父の命日ぢやぞ。もうよいほどにして身を清め、佛前に回向いたせ。

子之介　はあ。

高　綱　もうそれでよい。廐へ牽いて繋いでおけ。

子之介　はあ。（馬をひかんとすれど動かず。）え丶、なにが氣に入らないで拗るのぢや。さあ、行け、ゆけ。叱つ、叱つ。

（馬はなほ動かず。與一と六郎も立寄る。）

與　一　え丶、どうしたものぢや。叱つ、叱つ。

六　郎　さあ、行け、ゆけ。

（三人は無理に牽かんとすれば、馬は狂ひて蹴散らさんとす。六郎倒る。與一等はうろたへ騒ぐ。馬は狂ひて走りゆかんとするを、高綱は遮りてその轡を取る。）

高　綱　え丶、なにを狂ふぞ。そちにも氣に入らぬことがあるとみゆるな。高綱も狂ひたいは山山ぢやが、狂うたとて藻掻いたとて所詮は無駄な世のなかぢや。まあ、鎭まれ、鎭まれ。（馬にむかつて諭すやうに云ふ。）

与一　（馬にむかつて罵るやうに。）この横着ものめが……。殿様が直々にお手をかけられたら、この通り、おとなしくなつてしまふたわ。

（高綱は馬の口をとりて、子之介に渡す。子之介うけ取りて庭のうしろへ牽いてゆく。六郎は馬盥など片附ける。高綱の娘薄衣、十六七歳。侍女小萬を連れて、下のかたより出づ。）

薄衣　父上様、これにお出でなされましたか。

高綱　日和がよければ庭に出て、馬に洗足さするを見てゐたのぢや。

薄衣　石山寺參詣のかへり途に、ついそこで旅の御出家様にお逢ひ申しましたれば、お連れ申してまゐりました。

小萬　お見受け申したところが、ありがたさうな御出家様。路をいそぐと一旦はお斷りなされましたを、無理にねがうて御案内申しました。

高綱　今日はこゝろざす佛の命日。よくぞそこに心が注いた。して、その御坊は……。

薄衣　（小萬を見かへりて。）早うこれへお通し申しや。

小萬　はい、はい。（引返して去る。）

高綱　（六郎を見かへる。）女子ばかりの出迎ひは無禮であらう。そちもまゐつて御案内申せ。

六郎　はあ。（去る。）

高綱　薄衣と与一は奥へまゐつて、齋をまゐらする用意などいたせ。

薄衣　かしこまりました。

（薄衣と与一は奥へ去る。六郎と小萬は高野の僧智山を案内して出づ。智山は四十餘歳、旅すがたにて笠と杖とを持つ。）

高綱　（會釋して。）聖にはゆく手を急がせらるゝとか承はつたに、ようぞお立寄りくだされた。毎月二日はほとけの命日でござれば、誰にかぎらず、門前をすぐる出家をよび止めて、回向を頼みまゐらするが家例でござる。

智山　唯今御息女よりも右様の儀をうけたまはつたが、さりとは御奇特のことに存じまする。してお身が佐々木殿でござるよな。

高綱　申しおくれたれど、それがしは佐々木四郎高綱、なにとぞ御見知り置きくだされい。

智山　拙僧は高野の山にすむ智山と申す者、諸國修行のために陸奥へ下り、歸り途には鎌倉より伊豆をめぐりて、これより歸山の道中でござる。

高綱　では、東海道を上られたか。

智山　あたかも鎌倉の將軍が上洛の道筋とて、宿々は以てのほかの混雜、われ等のやうな瘦法師はこゝでもかしこでも追ひ散され、いやさん〲の目に逢ひ申したよ。はゝゝゝ。

高綱　（打笑む。）それは定めて御迷惑のことゝお察し申した。（六郎を見かへりて。）床几を持て。

六郎　はあ。

（六郎と小萬は奥に入る。）

高綱　して、鎌倉の同勢にはどこらあたりでお逢ひなされた。

智山　熱田の手前で一つになりましたが、かの同勢は二三日そこに逗留とか承はつたれば、その間にわれ等は通りぬけて、一足先に發足いたした。が、その行列の華やかさ、實に眼をおどろかすばかりでござつた。（高綱は耳をかたむけて聽く。）先づその人數は四五千騎もござつたか。

（六郎と小萬は床几を持ち來る。高綱は頤にて智山にすゝめよと命じ、おのれも亦床几に腰をおろす。六郎と小萬は一禮して去る。）

智山　（床几に腰をおろして語りつゞく。）將軍はいづこにおはすか存ぜぬが、先供には北條、梶原、三浦、畠山、あとおさへには土肥、安達……なほ數々の大小名が平家の殘黨に備ふる用心もござらう、諸國に威を示すためでもござらう、いづれも甲冑爽かに扮裝つて、家々の紋打つたる旗をたてさせ、小春日和の海道筋を長々と練りゆくありさまは、勇ましいとも美々しいとも譬へて申すべきやうはござらぬ。まことに前代未聞との取沙汰、われ等もこの年になるまでに、かやうな目ざましい上洛は初めて見申したわ。われ等出家の身で、うき世のことを兎から申すではなけれども、頼朝といふ御人は果報めでたくおはすよなう。

高綱　（ひとり言のやうに。）それも皆この高綱故ぢや。恩知らずめが……。（罵る。）

智山　恩知らずとは……。（聞き咎める。）

高綱　（苦笑ひして。）いや、これはお聞かせしても詮ないことぢや。先づそれよりも、高綱の懺悔を一通りお聞きくだされぬか。今日御回向をたのみまゐらする佛と申すは、わが身寄りでも無し、敵でもなし、味方でも無し、罪なくして相果てたる紀之介といふ馬士でござる。

（高綱は眉を皺めて、空をあふぎつゝ起つて徘徊す。珠數を爪繰りながら聽く。庭のかげより子之介忍び出でておなじく聽く。）

高綱　（しばらくして。）かぞふれば十年以前、治承四年の秋のはじめ、蛭ヶ小島に於て頼朝が旗をあぐるといふ噂、ひそかに都へもきこえたれば、われ眞先に見參に入り申さんと、忍んで伊豆へ下りしが、浪人のかなしさには馬も有たず。徒歩にておぼつかなくも辿り辿りて、八月二日のあかつきに野洲の河原にさしかゝると、まだ明けやらぬ朝霧のあひだより、雜鞍置いたる馬を追うて來る者がござつた。これ幸ひとよび止めて馬を借受け、むかうの岸までは渡りしが……。これより遠き旅をゆくに、馬の足を假らでは不便なり、ぬすみて逃げんと馬をはやめて、二三町ばかり駈けぬくれば、馬士はおどろき追ひ來りて馬盜人よと罵りさわぐ。かくては是非も無し、馬をかへさば大事の間に合ふまじと……。こゝろを鬼にして……。

智山　（思はず叫ぶ。）あら、無慚……。由なき殺生をせられたよな。

高綱　馬を返さんとあざむいて、油斷を見すまし……。（突く眞似をする。しばしの沈默。）斯くしてやう〳〵馬を得たれば、無事に伊豆まで乘りつけて、おなじ月の十七日には八牧の屋形を攻めほろぼし、源氏再興の基をひらく。その後のことは申すまでもござらぬ。が、たゞ不憫なるは彼の馬士にて、その名を紀之介と申す由、かれの口より聞きたるを手がかりに、平家沒落の後この國中を隈なく詮議したるも容易に相分らず、このごろに至りて栗田の里に子之介といふ若者あり。（廐のかたを見る。子之介あわてゝ隱れる。）これぞ彼の紀之介の忘れがたみと知れたれば、呼び取りてあつく扶持せんと存ぜしに、彼はほかに望み無し、おのがなりはひは馬士なれば、奉公せんと申すによつて、その云ふがまゝに廐の小者として召仕ひ、けふまで屋敷に置きまするが、これだけにて高綱の罪が消えませうか。せめては亡人の菩提を弔ふために、月の二日を命日とさだめ、供養をおこたらず營んで居ります。

智山　（うなづきて。）して、その子之介と申すはいつの頃より當家に身を寄することゝ相成りましたな。

高綱　三月ほど以前でござらうか。

智山　恨みを捨てゝかたきに奉公し、勤めぶりに如才はござらぬか。

高綱　かげひなたなく正直に立働いて居ります。

智山　それもまた奇特のことでござる。み佛は恩怨無二と說かせられた。

高綱　恩怨無二……。（かんがへる。）佛の敎を學べばそのやうに悟られまするか。

智山　ほとけの敎を學ばずとも、悟らるゝものには悟らるゝ道理ぢや。現にの彼子之介とやらも、お身をかたきと恨んでは居らぬと申すではござらぬか。

高綱　子之介が高綱を恨まぬは、心からその罪を謝するといふ人のまことに感じたのではござるまいか。至誠は神を動かすとかうけたまはる。もし我に心のまことがなくば、かれも飽まで我を恨みませうぞ。天下の人に皆まことがあらば、高綱にも不足はござるまいに……。

智山　佐々木殿ほどの勇士にも、なにかこの世に御不足がござるかな。

高綱　勇士なればこそ悶ゆる胸をおさへて、かやうに生きても居られまする。弱いものなら疾うの昔に、狂ひ死でもして居りませうわ。（衝と立つ。）御坊、なぜこの世の中にはまことなき奴儕がはびこつて、正しきものが虐げられるのでござらうな。

智山　（騷がず。）正法千年、像法千年の世はすぎて、今は末法の世でござる。それを救はんがために、われ等も努めて居るとは知られぬか。

（高綱はかんがへてゐる。奥より與一出づ。）

與一　御用意整うて居ります。

高綱　（うなづきて。）さらば、御坊。

與一　どうぞお通りくださりませ。

智山　（起ちあがりて。）御案内おたのみ申す。

（奧一は智山を案内して奧に入る。）

高綱　（廐を見かへりて。）子之介は居らぬか。子之介、子之介。

（廐のかげより子之介は着物を着かへて出づ。）

高綱　御坊を佛間へ招じたれば、やがて讀經も始まるであらう。そちも參つて回向いたせ。

子之介　はあ。

（高綱は奧に入る。子之介もつゞいて入らんとする時、下のかたより佐々木小太郎定重、廿餘歳、出づ。）

定重　こりや馬飼のもの、叔父上はお宿にござるか。

子之介　はい。唯今高野の御出家がお越しなされて、御佛間へ御案内なされました。

定重　おゝ、左樣であつたか。御佛事の場所へみだりに推參も如何。兎もかくも定重まゐりしと申上げてくりやれ。

子之介　かしこまりました。（奧に入る。）

定重　（ひとり言。）合點のゆかぬはこの頃の叔父上のありさまぢや。鎌倉殿上洛の人數も早や美濃路まで進まれたと聞くに、御出迎ひの用意もなく、そしらぬ顔して日を送らるゝは、抑もいかなる次第であらうか。（奧にて鉦の音きこゆ。）おゝ、讀經ももはや始まつたと見ゆるな。

（奧より薄衣出づ。）

薄衣　小太郎どの、お越しなされましたか。

定重　おゝ、薄衣どの。叔父上は佛間にござるさうな。

薄衣　はい。先づ奧へお通りなされませ。

定重　いや、けふは少しく心もせけば、こゝにて暫時相待ち申さう。

薄衣　では、それへお掛けくださりませ。

（定重は上のかたの床几にかゝる。薄衣は梅の樹に倚りて立つ。）

定重　叔父上の御機嫌はこのごろ何うでござるな。

薄衣　別にかうといふこともござりませぬが、兎かくにお氣が暴々しくなつて……。瑣細なことにもおむづかりなされて……。そばにゐる者もはら／＼するやうな。

定重　御病氣ともみえませぬか。

薄衣　御病氣のやうでもござりませぬが……。（眉をひそむ。）

定重　はてなう。（かんがへてゐる。）

高綱　（奧より出づ。）小太郎、まゐつたか。

定重　……。

（定重は起つて床几をゆづる。高綱は床几に腰をかける。定重は薄衣にすゝめられて、下のかたの床几にかゝる。）

定重　早速でござりまするが、將軍御上洛の同勢はもはや美濃路まで到着とうけたまはる。や

がては當國へ進ませらるゝ御日取でござれば、叔父上にも御出迎ひの御用意いかゞでござりまするな。（高綱答へず。定重はその氣色をうかゞひて。）父は昨夜すでに出發いたしてござる。（高綱はなほ答へず。）その砌、父が申しまするには、其方は叔父上のおん供して、今夕刻よりつゞいて出發いたせと……。

高綱　（不興げに。）兄上が左樣申し殘されたか。

定重　はあ。

高綱　其方は父の指圖にまかせて、ゆきたくば勝手にゆけ。叔父は忌ぢや。（定重おどろく。）高綱は行かぬぞ。

薄衣　このあひだからお勸め申して居りまするに、なぜお出迎ひはなされませぬ。將軍の御上洛には途中までお出迎ひ申すが武家の習。なう、小太郎どの。

定重　鎌倉の將軍賴朝公がはじめての御上洛、武藏相模は申すにおよばず、海道の大小名はすべておん供に加はるなかに、叔父上ばかりが御不承知とは……。

高綱　おゝ、不承知ぢやよ。鎌倉の將軍がなんぢや。賴朝がなんぢや。あの大がたりの大嘘つきめが……。

薄衣　あ、もし、うか〳〵とそのやうなこと……。

定重　萬一餘人の耳に入りましたら……。

高綱　おそろしいと申すのか。（あざ笑ふ。）嘘つきなればこそ嘘つきと云うたがなぜ惡い。と

りやよう聞け。石橋山のたゝかひ敗れて、賴朝めは散々の體たらく。噛合ひに負けた痩犬のやうに、尻尾をまいて這々の體で逃げまはる。暗さは暗し、雨はふる。木の根や岩角につまづいて顚つまろびつ、泥まぶれになつて這ひあるくそのざまは……。わはゝゝ。さりとてわれに取つては譜代の主君ぢや。命を捨てゝもその難儀を救はねばならぬと、高綱かけ付けて扶け起し、それがしおん名をたまはりて防ぎ戰ふあひだ、君には疾く〳〵落ちさせたまへと云へば、賴朝めは拜まぬばかりに嬉しよろこんで、おゝ、わが身がはりに立つてくるゝか、佐々木は日本一の大忠臣ぢや。われもし生きて天下を取らんには、その恩賞として日本の半分をわかち取らすぞと、諸人の聞く前でたしかに誓うた。

定重　右樣の儀はかねて父よりもうけたまはつて居りまする。そのをりに叔父上がおん身代りに相立たずば、賴朝公の御運も危かつたかとも存じられまする。

高綱　高綱が源賴朝と名乘つて……おもへば馬鹿な。大童となつて必死にたゝかふ間に、賴朝めは杉山まで逃げ込んだ。高綱も幸ひに命をまつたうした。つゞいては宇治川先陣の功名、それだけでも二ヶ國三ヶ國の値はあらう。さて賴朝めは思ひのまゝに世をとつて、天下の大將軍と仰がれながら、命の親の高綱にはなにほどの恩賞をくれたと思ふぞ。日本の半分は云ふもおろか、四半分の又その四半分にも足らむ捨扶持をくれたばかりで、おのれはあつぱれ主人顏ぢや。征夷大將軍、源氏の棟梁とか勿體らしく名乘るものが、

恩をわすれ、約束を破つてすむと思ふか。

定重　御もつともではござりまするが……。（返事に困つてゐる。）

高綱　勿論、高綱もだまつては居らぬ。石橋山の御約束はもはやお忘れなされたかと、たびたび催促に及ぶといへども、四の五の云うて埒があかぬ。それにまた土肥の、安達の、三浦のといふ腰拔どもが、かしこ振つた面をして、そのやうなことは申すは第一に不忠ぢやの、やれ君命には背くなの、長いものには卷かれろのと、理を非にまげて意見をし居る。（定重をみて。）其方の父なども同じくその腰ぬけ仲間ぢや。主人は約束にそむく大嘘つき、まはりの奴儕はへつらひ武士や臆病者、右を見ても左をみても、癇に障ることばかりが疊まつて來るわ。

（高綱は立つて梅の枝をねぢ折り、落花微塵に引きちぎつて地に投げ付ける。）

定重　われ〳〵若輩者が押して申上げましたら、定めてお叱りもござりませうが、今もむかしも道理ばかりでは濟まぬ世の中でござりまする。たとひ叔父上に十分の道理がござりませうとも、いまさら鎌倉の將軍を相手取つて、理非を爭ふなどとは及ばぬこと。どのやうな御不足がござりませうとも、堪忍あそばすがお家の爲、このたびは何とぞそれがしをお供に連れられて、まげて國境まで御出迎ひを……。

高綱　最善も申した通り、ゆきたくば其方ひとりで行く。

定重　くどうも申すやうなれど、お家を大事と思召されて……。

高綱　えゝ、面倒な。家がなんぢや。高綱がけふ限りで家を捨てたらなんとする。

薄衣　え、もし、父上樣……。（思はず縋らんとす。）

高綱　（ぢつと娘の顏をみたるが、又つき退ける。）こんな馬鹿々々しい世のなかに、生きてゐる奴の氣が知れぬわ。

定重　では、どうあつても御出迎ひには……。

高綱　まだわからぬか。くどい奴ぢやなう。

（高綱は奥に入る。あとにふたりは顏を見あはせる。）

薄衣　今更ならねど父上のはげしい御氣性、一旦かうと云ひ出されたら、容易に思ひ返しはなされまい。困つたことでござりまするなう。

定重　このたびの將軍御上洛には海道筋の大小名、いづれも人數をひき連れて、路次の警固をつかまつれとあるに、叔父上のみ御不參とこれあつては後日の御咎は逃れまい。まして將軍のお側には、日ごろより佐々木一家とは仲違ひの梶原父子もひかへて居れば、この機に乘じていかなる讒言を申立んも測られず、油斷せば家の大事……。（思案して。）兎もかくも一旦は立歸り、出發の用意をとゝのへて、再びお迎ひにまゐるでござらう。

薄衣　もし父上が飽までも御不承知と仰せられたら……。

定重　是非に及ばず、それがし一人にてまゐるまでぢや。萬一叔父上が御不興を蒙るとも、それがし父子が申しなだめて、無事を計るが一族のよしみ……。（詞優しく。）かならず御

薄衣　心配あるな。

定重　なにとぞ宜しくたのみまする。

薄衣　さらば重ねて……薄衣どの。

定重　御出發の折には今一度御立寄り下さりませ。

　無駄とは思へどお誘ひにまゐらう。

（ふたりは會釋して、定重は下のかたに入る。薄衣はあとを見送りて思案顔にたゝずみしが、これと思ひ直して奥に入る。下のかたより子之介の姉おみの、廿二三歳の農家の娘、旅姿にて出づ。）

おみの　（あたりを窺ひて。）子之介は庵にゐると御門で敎へられたが、はて何處へ行つたことであらう。

（奥より子之介出づ。）

おみの　お﹅、弟……。

子之介　姉樣か。（なつかしげに寄る。）ようたづねて來てくだされた。

おみの　このごろは時候もおひ〳〵に寒うなつて來たが、別に變ることもないかや。

子之介　はい。幸ひに達者で暮してをりまする。

おみの　それでわたしも安心しました。

子之介　けふは月こそ違へ、父樣の御命日で、今まで奥で御回向をして來ました。

おみの　奥で……。（かんがへて。）そなたひとりで御回向をしてゐやつたのか。

子之介　殿さまと御一緒に……。

おみの　殿樣も御一緒に……。人間ひとりを慘たらしう殺して置いて、回向さへすれば、罪が消ゆるかなう。（冷笑ふ。）

子之介　（愍はしげに。）姉樣。

おみの　（左右を見まはす。）これ、そこらに人はゐぬか。（子之介うなづく。）恨むが無理か、積つてもみやれ。父樣は正直律義のお生れで、日ごろから露ほども曲つたことはせられなんだに、よい人にも惡い報いが來て、十年以前野洲の河原で何者にか斬り殺され、牽いてゐた馬はぬすまれた。その時わたしはまだ十三、そなたは十一で碌々に物心もつかず、唯おろ〳〵と途方にくれて、姉弟手を取つて泣いてゐた。（なみだを拭ふ。子之介もうつむいて聽く。）かたきは誰か知らねども、見つけ次第に唯は置くまいと、歎きのなかにも胸に刻んで今まで月日を送るうちに、神佛のひきあはせか、かたきは知れた……。（再び左右をうかゞひて。）かたきは佐々木高綱とおのれの口から名乘つて來た。

子之介　十年以前野洲の河原で馬士を殺したはわが仕業と、あからさまに名乘つて出て、ゆかりのものを探し求め、むかしの罪を償ふために、あつく扶持して取らせると、御領主樣からお觸れが出たときには、夢かとばかりに驚きました。

おみの　おどろきと悲みと喜びとが一つになつて、一旦は思案にも惑うたが、かたきが我から名

乗つて出たこそ幸ひ、その屋敷へ入り込んで、隙もあらば恨みの刃をかたきの胸に刺し透さうと、約束したを忘れはせまい。こゝへ奉公住みして足かけ三月のあひだに、討つべき隙はなかつたか。そのたよりが聞きたさに、けふはわざ／＼尋ねて來ました。

子之介　隙もあらばかたきを討たうと、刃を呑んで住み込みましたが、あくまでも前非を悔いた佐々木どの、この子之介のまへに両手を突いて、ゆるしてくれとお詫びなされた。そのまごゝろが面にあらはれて……。

おみの　討つべきこゝろも鈍つたか。えゝ、云ひ甲斐のない卑怯者、臆病者……。最前もいふ通り、罪もない人間ひとりを殺して置いて、わびて濟まうか。回向して濟まうか。それで堪忍がなるほどなら、けふまで泣いて暮らしはせぬ。廿歳を越しても歯を染めぬ姉の覺悟をなんと見た。姉弟が心をひとつにして、馬盗人のかたきの奴めを……。

子之介　もし。（聲高しと制する。）

おみの　そなたは疾うからこゝに住み込んで、屋敷の案内も知つてゐやう。今夜にも姉を手びきして……。これ、默つてゐるは不承知か、但しは今更おくれが出たか。

子之介　むかしの罪を後悔して、毎月二日を命日に、佛事供養をかゝさず營んでくださる殿様を、いまさら執念く恨むのは……。もし、姉様。父様の死んだは是非もない災難ぢやと……。

おみの　なに。（屹となる。）

子之介　どうぞ諦めてくださりませ。

（おみのは呆れた體にて弟の顏をぢつと眺めてゐたりしが、やがてわつと地に泣き伏す。）

子之介　もし、姉様。（立寄つて取縋る。）

おみの　（狂ふがごとくに突き退ける。）えゝ、寄るな、寄るな。現在の親のかたきを眼の前に置きながら、おめ／＼と見てゐるやうな不幸ものに、姉と呼ばるゝおぼえはない。

子之介　たとひ佐々木殿を討つたとて、死んだ父さまが返りませうか。よしない罪を作らうよりも……。

おみの　えゝ、卑怯者……不孝者……。もうこの上はそなたは頼まぬ。なんの相手が武士ぢやとて怖ろしいことがあらうか。かたきは妾ひとりで見事に討つてみせう。

（おみのはかゝへる絲楯をときて、山刀をとりだす。子之介おどろきておさへんとす。）

おみの　（振拂ひて。）えゝ、邪魔するな。放しや、放しや。

（おみのは突退けて奥へ駈けゆかんとするを、子之介はあわてゝ遮る。）

子之介　いかにお急きなされても、女ひとりで奥へ踏み込まうなどとは狂氣の沙汰……。もし仕損じたらなんとなさる。まあ、お待ちなされませ。

おみの　とめるな、放しや。

子之介　でも、このまゝに遣ることは……。

（おみのは又ふり切つて行かんとするを、子之介は必死となりて縋りとめ、無理に庇のかげへ連込む。下のかたより佐々木小太郎定重、花やかなる鎧をつけて弓を持ち、家來數人を引連れて出づ。）

定重　（家來を見かへりて。）先刻の樣子では、叔父上にもまだ御支度はなされまい。それがし參つておすゝめ申す間、其方どもはこれに控へてをれ。

家來　はあ。

（定重は奥へゆかんとする時、奥より佐々木高綱は頭髮を切りたる有髮の僧形、直垂の袴をくゝりて脛巾をはきたる旅姿にて笠を持ち出づ。あとより薄衣、輿一、六郎、小萬等は打濕れて送り出づ。）

定重　（おどろく。）や、叔父上には……。

高綱　弓矢は折つた。太刀も捨てた。熊谷蓮生坊の二の舞ぢや。（笑ふ。）

定重　これは又思ひもよらぬこと、佐々木四郎高綱と日本中にきこえたる弓取が、にはかに浮世を捨てられたは……。

高綱　戀しい浮世ならばなんで捨てよう。いつはり者が上にたつ世の中、へつらひ武士がはびこる世の中、けがれた世の中、面白からぬ世の中、このやうな世の中は高綱の住むべきところでない。

定重　では、この世の中を見限つて……。

高綱　（罵るやうに。）おゝ、この世の中に愛想がつきたわ。

薄衣　幾たびおとゞめ申しても、お聞き入れがないばかりか、高野の聖のおん供して、これからすぐにお立ちとは、情ないことでござりまする。

定重　これからすぐ高野へ山入りとな。

輿一　折も折とて高野の聖が、こゝへお立寄りなされたので、にはかに出家の思召、まことに夢のやうに思はれまする。

六郎　さなきだに世の中が面白からぬと仰せられてゐたところへ、恰も將軍の御上洛、その御出迎ひを強ひらるゝ蒼蠅さに、いつそ武士を捨つるとのお詞でござりまする。

高綱　委細は今聞く通りぢや。かならず騷ぐな、おどろくな。兄上に逢うたらばそのおもむきを確と申傳へてくりやれ。

（定重茫然。奥より智山出づ。）

智山　方々のおどろきも嘆きももつともぢや。われ等も一應は頭をかたむけたが、勇猛直前は勇士の本意、たとへば風を剪つて飛ぶ矢のごとくで、おのれが向はんとするところへ向ふよりほかはござるまい。（風の香して梅の花散る。）おゝ、花がちる。佐々木どのにはこれをなんと見らるゝ。

高綱　（うち笑む。）西行のやうな涙もろい男なら、無常を感じて泣くでござらう。

智山　おん身の悟は……。

高綱　高綱に悟はござらぬ。

定重　悟らずして世を捨てらるゝは……。

高綱　こんな世の中にうろ〳〵してゐるのが、忌々しいからぢや。

智山　それも一種の悟であらうよ。はゝゝゝ。

高綱　はゝゝゝゝ。（厩にむかひて。）生月をこれへひけ。

（子之助は生月を牽いて出づ。）

子之介　殿樣、委細はあれで伺ひました。

高綱　聞いたとあらば重ねて云ふまい。これより聖のおん供して、高野へまゐる。頭をそり毀てば高綱も法師ぢや。其方が父紀之介の後生安樂を禱るであらうぞ。

子之介　ありがたうござりまする。（馬の口を取る。）さあ、お召しなされませ。

高綱　いや、今からは聖の御弟子ぢや。（智山にむかひ。）師の御坊には鞍に召しませ。われ等が車匿童子となり申さう。

智山　鎌倉の將軍にも頭をさげぬ佐々木殿が瘦法師の馬の口を取らるゝか。さりとは面白い。しからば御免。（馬に乘る。）

（高綱は馬の口をとりに行かんとす。薄衣、小冬、與一、六郞、左右より走せ寄り、無言にて袂にすがる。）

高綱　薄衣は小太郎といひなづけの仲ぢや。やがては祝言して睦じう暮せ。與一そのほかも堅固であれ。やあ、小太郎。

定重　はあ。（進み寄る。）

高綱　高綱一家のあとをたのむぞ。

定重　委細承知つかまつりました。

高綱　よし。（取られし袂をふりきつて。）さらば……。

（行かんとする時、厩のかげよりおみのは山刀をぬき持ちて走り出づ。）

おみの　父樣のかたき……。（切つてかゝる。）

高綱　（身をかはしてその手をとらへ。）誰ぢや（顏をみて。）おゝ、子之介の姉か。（微笑みながら突きはなす。おみの倒れる。）こゝにも悟られぬ人があるなう。

智山　多の日のくれぬうちに大津の宿まで。

高綱　はあ。

（高綱は馬の口を取りてゆく。皆々あとを見送る。おみのは又起ちあがりて行かんとするを、子之介は抱きとめる。三井寺の鐘の音きこゆ。）

――幕――

相馬の金さん（三幕）

昭和二年六月作。

昭和二年十一月、歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——相馬金次郎（左團次）相馬半三郎（壽美藏）石澤寅之助（吉右衛門）常盤津文字若（松蔦）など。

登場人物——徳川の御家人相馬金次郎。金次郎の弟半三郎。おなじく御家人石澤寅之助。伊勢屋千右衛門。伊勢屋の番頭長兵衛。おなじく若い者富八、久七。常盤津文字若。文字若の母おとく。稽古の娘およし。ほかに職人。長屋の女房、子供。料理屋の女中。料理番。青山の僧。上野の僧。農家の娘、子供。質屋の小僧。燈籠賣。町家の女房、娘、女中、若い者、小僧。車力。荷持の男。中間。官軍の兵士など。

第一幕

江戸の末期。慶應三年、七月初旬の午後。

神田明神下の質屋、伊勢屋の店先。正面の上のかたは戸棚。まん中は奥への出入口。下のかたの壁には質帳を澤山にかけてあり、店の上の方には土藏の白壁。下のかたには格子戸。店の外は忍び返しの附きたる板塀にて、木戸あり、用水桶あり。表は往來の體にて、町家つゞきと知るべし。

（店の帳場格子の中には番頭長兵衛が帳面を繰つてゐる。若い者富八は帳面を前に

して十露盤を彈いてゐる。職人岩吉は店の上の方に腰をかけて煙草をのんでゐる。下のかたには長屋の女房おくまが赤兒を脊負ひ、小さい女の兒を連れて腰をかけ、若い者久七を口說いてゐる。塀の外には小僧が水をまいてゐる。角兵衛獅子の太鼓の音きこゆ。）

おくま　ねえ、お前さん。後生だから、もう一度よく見て、百五十ばかり附けてお吳んなさいよ。（女帶を突き付ける。）

久七　（帶をひろげて見る。）幾度見ても同じことで、四百と云つたら關の山で、その上は文久一つも附けられませんよ。

おくま　文久一つも附けられない。（呆れたやうに。）お前さんも若いくせに、隨分邪慳な人だねえ。まあ、おとなしく云ふことを肯いてくださいよ。不斷の月とは違ふんですからさ。

久七　盆でも暮でも、こんなに耳の切れた帶で五百も六百も貸せるものですか。そりやおかみさんが無理ですよ。

おくま　なに、あたしが無理をいふものか。お前さんの方がよつぽど無理だよ。

久七　いゝえ、おかみさんが無理ですよ。

おくま　いゝえ、おまへの方が無理だ、無理だ。（泣聲になる。）女だと思つて馬鹿にするんだよ。

女の兒　おつかあ、もう歸らうよ。

おくま　どうして歸れるものか。今こゝに大事の用があるんだよ。

女の兒　歸らうよう。（泣く。）

おくま　えゝ、强情な餓鬼だねえ。（女の兒はわつと泣き出す。脊中の赤兒も火の付くやうに泣き出す。）

おくま　どいつもうるさいねえ。（おくまは起つて赤兒をいぶり付ける。赤兒はいよ〳〵泣く。女の兒も泣く。よき頃に水をまき終りて、小僧は木戸に入る。）

岩吉　いや、どうも大變だな。この暑いのにぎやあ〳〵泣き立てられちやあ、そばにゐる者までが逆上せあがつてしまふぜ。おい、久さん。なんとかして遣らねえか。

久七　だつて、お前さん。こんな帶で五百も六百も貸せるわけが無いぢやありませんか。

おくま　こんな帶といふけれども、このお正月に一分二朱で買つたんだよ。

久七　冗談云つちやあいけません。こんな帶が一分二朱で……。

おくま　二口目にはこんな帶、こんな帶と、あんまり馬鹿におしでないよ。

女の兒　（又泣く。）おつかあ、歸らうよう。

おくま　又泣きやあがる。（再び撲つ。）

長兵衛　（見かねて。）どうも困るな。（帳場から出る。）まあ、おかみさん。靜かにしてください。これ、久七。おかみさんが折角あゝ云つて口說きなさるのだ。もう百も附けてあげ

るがよからう。

久七　ぢやあ、おかみさん。きつちり五百といふところで我慢してください。

おくも　（舌打ちして。）仕様がないねえ。ぢやあ、まあ、それで我慢して歸りませうよ。

長兵衞　（帳場から緡の錢を持つて來る。）さあ、これが一本、ほかに百ありますよ。

（長兵衞は四百文の緡のほかに、廿文十五文などの錢を取りまぜて渡せば、おくまは數へて受取る。）

女の兒　歸らうよう。（泣く。）

おくま　あゝ、歸るよ、歸るよ。なんといふ泣蟲だらう。皆さん、どうもおやかましうございました。

（脊中の赤兒は又泣く。おくまはそれをいぶりながら、女の兒をつれて下の方へ立去る。）

岩吉　やれ、やれ、これで世の中がおだやかになつた。

長兵衞　子供や赤ん坊や、色々の責め道具で嚇かされちやあ全くこつちが降參してしまひますよ。

岩吉　それぢやあ、おれもこれから責め道具を用意して來るかな。そこで、富さん。おいらの方はどうだね。

富八　岩さんの利分は二朱と六十四分になります。

岩吉　二朱と六十四文……。めつぽう高いぜ。間違つてゐやあしねえかえ。

富八　二度も彈いてみたのですから大丈夫です。

岩吉　六十四文なんていふ端下は面倒だ。それ、二朱置いて行くぜ。

富八　あとは此の次に頂きます。

岩吉　それはまあ其時のことだ。なにしろ利上げをしたのだから流しちやあいけねえよ。

長兵衞　わたしも承知してゐますから、決して流すやうなことは致しません。

久七　岩さんは景氣がいゝとみえますね。

岩吉　景氣が好ければ受けに來るが、泣きの涙で利上げをして、やう／＼流れを拖ひ止める始末だ。

長兵衞　横濱へ仕事に行つて、大層儲けなすつたといふぢやありませんか。

岩吉　横濱へ行きや金でも轉がつてゐるやうに云ふが、さて踏み出してみると噂の半分にも行かねえ。往きと復りの路用を差引くと、江戸で稼ぐのも大した違ひはねえのさ。ぢやあ、番頭さん、頼んだぜ。

長兵衞　はい、はい。

（岩吉は下のかたへ去る。）

富八　あんなことを云つてゐるが、岩さんも横濱へ行つて隨分かせいで來たさうだ。

長兵衞　稼ぐには稼いだらうが、あの人のことだから神奈川あたりでみんな吐き出して來たらう

よ。それでも利あげに來ただけが見つけものだ。

（長兵衞は笑ひながら帳場に戻る。下の方より盆燈籠の荷をかつぎたる商人出づ。）

燈籠屋　燈籠や、燈籠……。（呼びながら向うえ立去る。）

久七　（表をみる。）あゝ、燈籠を賣りに來た。お盆ももう目の前だな。

富八　盆前にしちやあ不思議なくらゐに商賣が暇だぜ。

久七　それもやつぱり不景氣のせゐだ。なにしろ世間がさう／＼しいからね。

長兵衞　世間のさう／＼しいのが何より困る。かういふ物騒な時節には、こゝらの家なぞは猶さら氣をつけなければならない。日が暮れたら大戸をしつかり卸して、商賣を休んでしまへ。

富八　このごろは斬取りや押込みが無暗に流行るといふから、まつたく險呑でならない。

久七　番頭さんのいふ通り、かういふときには質屋なんぞが一番先に眼をつけられるから氣味がわるい。

長兵衞　商賣がひまな上に、押込みや押借りにお見舞ひ申されては泣つ面に蜂だ。くれ／＼も用心しなければならないぞ。

二人　あい、あい。

（向うより相馬金次郎、廿七八歲、道樂肌の御家人にて、風呂敷につゝみたる刀箱をかゝへて出づ。）

金次郎　（格子をあける。）どうだ、番公。べらぼうに暑いな。

富八　（よんどころなく。）これは相馬の旦那樣、いらつしやいまし。

金次郎　（笑ふ。）こゝの家で正直に相馬の旦那樣と云つてくれるのはお前ばかりだ。あとの奴等はみんな相馬の金さんと云つて、人を友達扱ひにしてゐやがる。おい、番公、忌に他人らしく顏を背けるなよ。お友達の金さんが來たんぢやあねえか。

長兵衞　（帳場を出る。）これは金さん。どうも嚴しい殘暑でございます。

金次郎　世のなかに連れて、陽氣もなんだか番狂はせになつて來やあがつた。六月は馬鹿に冷々して袷を着るやうな始末だつたが、七月になつてから殘暑が滅法界にひどくなつて、この二三日はまるで釜うでだ。お前達はよく無事に生きてゐるな。石川五右衞門よりよつぽど强いぞ。あゝ、暑い、あつい。（扇を使つてゐる。）

長兵衞　（奥にむかつて。）小僧や、お茶を持つて來な。

小僧　（奥にて。）あい、あい。

長兵衞　この暑いのにどこへお出かけでございました。

金次郎　おまへ達も知つてゐる通り、おれの先祖は相馬の小次郎將門だから、月に一度はかならず神田明神へ參詣に來る。けふも明神へ參詣して、型のごとくに武運長久をお祈り申した上で、それからこつちへ出かけて來たのだ。

長兵衞　あなたの御先祖が將門樣といふことは豫てうけたまはつて居りますが、よく每月かゝさ

ずに御參詣をなさいますね。

金次郎　先祖の將門は神に祭られてゐるが、その子孫の相馬の金さんは百俵取りの貧乏御家人だ。あんまり格式が違ひ過ぎるので、先祖に對しても申譯のない次第だが、なんと云つても先祖は先祖だ。月に一度ぐらゐはお參りをして置かなければ、人間の義理が濟むめえぢやねえか。（富八と久七を見かへる。）やい、やい。おれが將門を云ふと、いつでも笑やあがる。うそだと思ふならおれの家へ來て、系圖の一卷をしらべてみろ。

（奥より小僧は茶を汲んで出づ。）

小　僧　お茶をおあがりなさいまし。

金次郎　（小僧に。）どうだ、此頃は少しは白雲が癒つたか。用がなければ表へ出て、ちつと水でもまけ。幾らか涼しくなるだらう。

小　僧　水はもう撒きました。

金次郎　骨惜みをするなよ。もう一度、撒け、撒け。

小　僧　あい。あい。（奥に入る。）

金次郎　ことしは本祭の筈だが、神田は景氣よく出來さうかえ。

富　八　ことしは御神輿が渡るだけで、なんにも催しはないと云ふことでございます。

金次郎　本祭に山車も踊家臺も出さねえのか。神田つ子も意氣地がねえな。

久　七　御時節柄で御遠慮申すのださうでございます。

長兵衞　御承知の通り、一昨年の本祭に山車や踊家臺をひき出してお叱りを受けましたので、ことしは一切遠慮といふことになりました。

金次郎　ちげえねえ。公方様上洛のお留守中にどんちやん騷ぎ立てたといふので、一昨年はひどく叱られたつけな。今年も叱られる積りで威勢よく遣ればいゝに……。それだから意氣地がねえといふのだ。いや、神田つ子ばかりぢやあねえ、一體に江戸つ子と云ふものゝ意氣が無くなつた。なあ、番公、さうぢやあねえか。

長左衞　へえ。

金次郎　だが、おれはおめえが大好きだよ。

長兵衞　（煙にまかれて。）へえ。

金次郎　おめえの名は長兵衞といふぢやあねえか。長兵衞はいゝな。いかにも江戸つ子らしい名前だぜ。おれは實に嬉しくつてならねえ。

長兵衞　まことに有難うございますと申したいのですが、金さんにあんまり油をかけられると、いつでもあとが怖ろしうございますからね。

金次郎　なにも怖がることはねえ。長兵衞は長兵衞らしくすればいゝのだ。

長兵衞　いや、その長兵衞といふ名は親が附けましたので……。

金次郎　親が附けても公方様が附けても、長兵衞は長兵衞だ。そこで、長兵衞さん。この權八が些と折入つて頼みがあるから、一番大親分の氣前をみせて呉れねえか。

長兵衛　大方そんなことだらうと思ひました。

（長兵衛は他の二人と顔をみあはせて、いよ〳〵うんざりする。）

金次郎　（笑ひながら。）と云つて、別にむづかしいことを頼むわけでもねえ。貧乏の方ぢやあ金箔附きの金さんも、この盆前はどうにも斯うにも凌ぎが付かねえ。なにぶん義理のわるい借金があるので、うか〳〵してゐると御身分にもかゝはると云ふ一大事だ。くどいことは云はねえから、ぐつと一番呑み込んで、長兵衛をおたのみ申すよ。

長兵衛　（迷惑さうに。）申すまでもなく、あなたのお屋敷は青山でございますから、御近所にお顔なじみの同商賣も澤山ございませうに、兎角わたくし共の店へ來て、なにか御無理をおつしやるのは……。

金次郎　はゝ、野暮をいふなよ。近所で用が足りるくらゐなら、この暑いのに重い物をかゝへてわざわざこゝまで繰出して來やあしねえ。近所の麻布や赤坂ではあんまり顔が賣れ過ぎて、金さんの睨みも利かなくなつたから、そこでおめえを口說きに來たのだ。いつもながら無理ばかり云つて濟まねえが、けふばかりは眞劍におれの話をきいて貰ひたいな。

長兵衛　では、まあ、折角でございますから、どんなお話か伺ふだけは伺つてみようぢやございませんか。

金次郎　さう來なければ長兵衛ぢやあねえ。（風呂敷をあけて箱を出す。）けふ持つて來たのはこの一品だ。

長兵衛　（のぞく。）お腰の物でございますか。

金次郎　むゝ。刀には相違ねえが、おれたちが腰にさしてゐるやうなガタ光ぢやあねえ。由來をはなせば長くなるが、おれの家に先祖の將門から傳はつてゐる北辰丸といふ名刀は卽ちこれだ。これは相馬の家の當主が相續したときに、家例として中身を一度あらためてみる。併しわが物とは云ひながら、一代に二度とは見ないことに決まつてゐるので、おれも十年前に一度見たぎりだ。さういふ因緣つきの寶物だから、今までどんなに困つたことがあつても、身に替へ、家にかへて大切にしまつて置いて、お前のところは勿論、どこの質屋の暖簾もまだ潜らせたことはなかつたが、今もいふ通り、今度といふ今度ばかりはどうにも仕樣のない瀨戸際にせりつめたので、思ひ切つて抱へ出して來たといふわけだ。そこを察して、たんとの無心ぢやあねえ。十兩ばかり用立てゝ呉れゝばいゝのだ。

長兵衛　あの、十兩でございますか。

金次郎　十兩でいゝのだ。ほかの品と違つて、家重代の寶物だから、なんぼおれのやうな人間でも、こればかりは決して流すやうなことはしねえ。そんなことをしたら相馬の家にも瑕が付くことだ。遲くも一月ばかりのうちには屹と受出しに來るから、どうかそれまでの所を融通してくれ。それも大金ぢやあねえ、指一本でいゝのだ。これだ、これだ。（指をみせる。）

長兵衛　どう致しまして、指一本とおつしやるが、十兩と申せば大金でございます。どんなお品

か兎も角も拜見いたした上で……。

（長兵衞は刀箱に手をかけようとするを、金次郎はあわてゝ遮る。）

金次郎　いや、いけねえ、いけねえ。むやみに箱を明けられちやあ大變だ。

長兵衞　なにが大變でございます。

金次郎　それには少し譯があるのだ。おれがこれほどに賴むのだから、中身を見ねえで此のまゝ受取つて貰ひたいな。

長兵衞　それはいよ／＼御無理といふもので……。手前共も商賣のことでございますから、お品を拜見いたした上ならば相當の御相談も致しますが、いくら大切な御寶物でも、中身をなんにも拜見いたしませずに、たとひ一分でも御用立て申しますのは、質屋の法に缺けたことで、わたくし共が主人に叱られます。

金次郎　それはいかにも尤もだが、そこを偏にお願ひ申すのだ。まあ、なんにも云はずに受取つてくれ。

長兵衞　たとひ何とおつしやつても、品物をあらためずにお貸し申すことは……。

金次　どうしても出來ねえといふのか。

長兵衞　いくら金さんのお賴みでも、それは堅くお斷り申します。

金次郎　どうも困つたな。それだからおれが手を下げないばかりに賴むのだよ。

富八　もし、相馬の旦那樣。番頭が申すのに決して無理はございません。お品を拜見しないで

御用立て申すなどと云ふのは、商賣の法に無いことでございます。

久七　さう云ふことは何から何までよく御承知でありながら、けふに限つてなぜそんな御無理をおつしやるのでございます。

金次郎　みんなにさう云はれると、まつたく困る。おれも滿更の木然人でもねえから、無理は萬々知つてゐるのだが……。こいつはどうも困つたな。

（金次郎はかんがへてゐる。）

長兵衞　たゞ困る困るとおつしやつてゐないで、鳥渡あけて見せて下さるわけには參らないのでせうか。

金次郎　勿論見せればいゝのだが……。どうも困つたな。

長兵衞　わたくし共も商賣柄で、これまでにも方々のお屋敷樣から御大切のお品をおあづかり申したこともございますが、どちら樣でもみんな其のお品を一度は見せて下さるのに、あなたに限つてどうしても見せないと仰しやると、わたくしの方にも何だか疑ひが起ります。よもやそんな事もございますまいが、萬一その箱のなかに大切のお品が無いと致しますと……。

金次郎　馬鹿をいへ。なんぼおれでもそんな騙りのやうなことをするものか。かうなつたら見せて遣りたいのは山々だが、當主のおれでさへ一代に二度は見ないことになつてゐるのだからな。（又かんがへる。）併しさう云つてゐたら果しがねえ。いつそ思ひ切つて明けて

見せるかな。（箱に手をかけようとして又躊躇する。）いや、いけねえ。どうも悪さうだ。

長兵衛　（笑ふ。）金さん。いつまでも焦らしてゐちやあいけません。あなたはいつでも駈引がうまいので、こつちが困つてしまひますよ。

金次郎　けふばかりは駈引も糸瓜もねえ、おれは本氣で云つてゐるのだが、おめえ達には呑み込めねえのかな。ぢやあ仕方がねえ。ほかへ行つて頼んでみるとしようか。

（金次郎は箱を手早く風呂敷につゝんで引抱へ、二足ばかり行きかけて立ちどまる。）

金次郎　これから汗をふきながら、又方々をかけ摺りまはるのも難儀だ。やつぱりこゝの家へ荷をおろすより外はねえ。（引返して再び腰をかける。）おい、番公。一生に一度のお願ひだ。なんとか達引いてくれねえか。どうしても肯かれねえのかよ。

長兵衛　どうしても肯かないと云ふわけぢやあございませんが、幾度云つても同じことで、何分にも中身を拜見しませんでは……。

金次郎　それを素直に見せられるくらゐなら、こんなに口を酸つぱくして頼みやしねえと云ふのに……。

長兵衛　でも、拜見しませんでは……。

金次郎　どうもお前も因業だな。

長兵衛　わたくしよりもあなたが無理でございますよ。

（ふたりは同じことを押合つてゐる内に、下のかたより石澤寅之助、廿五六歳、これも道樂肌の御家人にて出で、内を鳥渡のぞいて用水桶のかげに隱れる。奥より伊勢屋の亭主千右衛門出づ。）

千右衛門　これは金さん、お暑いことでございます。あらましのお話は奥で伺ひましたが、これは番頭が申します通り、お品を拜見いたしませんでは、とても金子を御用立てるといふわけには參りません。併し折角お出でになりましたものを、唯お歸し申すといふのも失禮でございますから、なんとか別に御相談の致し方はございますまいか。

金次郎　これ、御亭主。なんだか忌なことを云ふぢやあねえか。別に御相談の致し方といふのはどういふことだ。痩せても枯れても御家人の相馬金次郎だ。出來ない相談の無理を云つて、一分や二分の煙草錢をいたぶりに來たのぢやあねえぜ。この通り、歷然とした質物を持參して金を借りようといふのだ。

千右衛門　では、その歷然とした質物を一應拜見させて頂きたいもので……。

金次郎　又か。（舌打ちして。）さつきから諄く云ふ通りのわけで、おれでさへも一代に二度とは見ない大事な寶物だ。まして相馬の家の血筋でない者がむやみに箱をあけてみると、刀は蛇になつてしまふといふ云ひ傳へになつてゐる。

長兵衛　刀か蛇になる……。本當でございますか。

金次郎　それは昔からの云ひ傳へで、ほんたうに蛇になるか、ならないか、おれも確かには知ら

ねえ。併し他人には見せるな、他人が見れば蛇になるといふ堅い戒めがある以上は、めつたな事も出來ねえので、おれも實はさつきから澁つてゐたのだ。さあ、これだけの仔細を正直に打ち明けたら、おめえの方でも疑ひを晴らして、この箱のまゝで預かつて吳れてもよからうぢやあねえか。

（金次郞は再び風呂敷をあけて、刀箱を亭主の前に出す。）

千右衞　（笑ふ。）人が見たら蛙になれとか云ふことは聞いて居りますが、人が見たら蛇になる……とは少々恐れ入りますね。わたくし共も多年この商賣をいたして居りますが、箱のそとから中身の見透しは出來ません。質物としておあづかり申す以上は、どうしても中身を拜見いたさなければなりません。後日に何かの間違ひがございますと、わたくし共ばかりでなく、あなたの御迷惑にも相成ります。兎もかくも念のために鳥渡覗かせて頂きませんでは……。（箱をひき寄せる。）

金次郞　いけねえな。おめえはどうしても見たいのかえ。

千右衞　拜見いたしませんでは、何分御相談が出來ません。

（千右衞門は箱に手をかけるを、金次郞はだまつて見てゐる。刀箱はけんどん蓋になつてゐるを、千右衞門は引きあけると、箱の中からは眞黑な蛇が出る。千右衞門もおどろいて箱を落せば、長兵衞、富八、久七もびつくりして騷ぐ。そのうちに蛇は這ひ出して緣の下に入る。）

富八　ほんたうに蛇が出た。

久七　蛇が出た。

（金次郞は店へ飛びあがりて、千右衞門を蹴倒す。）

金次郞　それだから云はねえことぢやあねえ。こんなことになりやしねえかと思ふから、あれだけに譯を話したのだ。かうなつちやあ金を借りる、借りねえの論ぢやあねえ。おれの家の寶物は云ひつたへの通りに蛇になつてしまつたぞ。

千右衞　どうも飛んだことで……。

金次郞　えゝ、貴樣たちが好んで飛んだことを仕出來したのぢやねえか。たとひ質に置いたところで無事に受け出せば濟むことだが、蛇になつてしまつてはもう取返しが付かねえ。さあ、亭主。家重代の刀を元の通りにして返してくれ。

千右衞　まことに恐れ入りましてございます。

金次郞　たゞ恐れ入つて濟むと思ふか。おれの刀をどうして吳れるのだよ。

（この時、表に窺ひゐたる石澤寅之助はわざと忙がはしく格子をあけて入る。）

寅之助　おゝ、相馬。こゝにゐたか。

金次郞　石澤か。なにしに來た。

寅之助　さつきお前の家へたづねて行くと、弟が頻りに心配してゐる。どうしたのだと聞いてみると、兄きが盆前の遣り繰りに困つて、家重代の北辰丸をかゝへ出して、明神下の質屋

へ持ち込んだと云ふのだ。

金次郎　弟め、飛んだことをしやべりやあがつたな。

寅之助　それを聞いておれも驚いた。いかに融通に困るからと云つて、重代の寶を質入れするなどとは以ての外のことで、そんなことが世間へきこえると、おまへばかりか組中の外聞にもかゝはると思つたので、早速に金の都合をしてお前のあとを追つて來たのだ。弟の話では、十兩あればいゝと云ふことだが、本當にさうか。

金次郎　まあ、さうだ。

寅之助　（ふところから金包みを出す。）その金はこの通り都合して來たから、質入れはまあ止めにしろ。

（金次郎はだまつてゐる。）

寅之助　おまへだつて好んで質に置くわけでもあるまい。十兩の金の都合さへ出來れば、それでいゝのだらう。さあ、これを受取つてくれ。（金を渡さうとする。）

金次郎　（力なげに拂ひのける。）折角だが、その金はもう要らねえ。

寅之助　なぜ要らない。

金次郎　なぜと云つて……。おれも途方に暮れてしまつた。（溜息をつく。）

寅之助　（不思議さうに。）それは一體どうしたのだ。

（金次郎は再び默つてゐる。）

寅之助　どうも可笑いな。（人々をみまはして。）こゝで何事か起つたのか。

（長兵衞等も默つてゐる。）

寅之助　そこに刀箱がはふり出してあるやうだ。なんだか變だな。おい、番頭。どうしたのだと云ふのに……。はつきり云へ。

長兵衞　實はその、お刀が紛失いたしましたので……。

寅之助　刀が紛失した……。

長兵衞　箱の蓋をあけますと、お刀が蛇になりまして……。

寅之助　刀が蛇になつた。（かんがへて。）誰が箱をあけたのだ。

千右衞　中身を一應拜見いたさうと存じて、わたくしが明けましたのでございます。

寅之助　相馬の家の北辰丸は、當主でも一代に一度しか見ることは出來ない。その血筋でない者がめつたに箱をあけると、刀は蛇になるといふ云ひ傳へがある。おれもよもやと思つてゐたが、やつぱりそれが本當であつたのか。これ、金次郎。おまへは飛んでもないことをしたな。

金次郎　（再び嘆息する。）まつたく飛んでもない事をしてしまつた。先祖に對しても重々相濟まない。みんなおれが悪いからだ。

寅之助　そこで、お前はどうする。

金次郎　今さら誰を怨んでも仕方がない。家重代の寶物をうか〳〵持ち出して來たのが、おれの

不覺だ。不斷からおれの身持が悪いので、先祖の罰が中つたのだらう。かうなつては、もう世間に顔向けも出來ない。相馬金次郎、百俵取りの小身でも武士の端くれだ。これからもう一度神田明神へ參詣して、身のあやまりを詫びた上で、鳥居の前で潔よく切腹する覺悟だ。

寅之助　むゝ、これはさうなくては成らないところだ。家重代の寶をうしなつて、お前もおめおめと生きてはゐられまい。先祖への申譯、世間への申譯に、尋常に切腹しろ。朋輩のよしみにおれが介錯してやるぞ。

（長兵衛等は顔をみあはせる。）

金次郎　友達のよしみに介錯してくれるか。

寅之助　併し金次郎。おまへは今、百俵取りの小身でも武士の端くれだと云つたな。武士ならば武士らしく、當のかたきを仕留めた上で、お前も切腹するがいゝではないか。

金次郎　成程さういふのも尤もだが、それも無益の殺生だ。元の起りはみんなおれが悪いのだから、何事も不運とあきらめて、おれ一人が自滅すればいゝのだ。

（人々は又おどろく。）

寅之助　いや、お前がおとなしくあきらめても、おれが勘辨出來ない。先づ第一にこの亭主の首を取つて、それを明神の前に供へて、それから切腹するのが武士の法ではないか。

金次郎　その武士ももう廢つたのだ。

寅之助　えゝ、意氣地のない奴だ。さあ、おれが證人になつてやるから、立派に相手を成敗しろ。亭主は勿論だが、何奴も這奴もみんな係り合ひだ。（長兵衛等を睨みまはして。）そこらに轉がつてゐる唐茄子野郎も、片つ端からばた〳〵斬つてしまへ。

（人々いよ〳〵驚く。）

金次郎　まあ、さう云ふなよ。こゝで五人や三人斬つてみた所で、おれの面目が立つといふわけでもない。却つて恥の上塗りだ。

寅之助　なにが恥の上塗りだ。町人のために身をほろぼし、家を亡ぼされて、たゞ默つてゐられると思ふか。さあ、金次郎。刀をぬけ。えゝ、何をぐづ〳〵してゐるのだ。そんな腑甲斐ない根性だから、こんな大事も出來するのだ。さあ、早く拔け。早く斬れ。

千右衛門　あ、もし、もし、暫く御待ち下さいまし。大切なお刀を紛失させましたのは、わたくし共が重々の不調法、なんともお詫の申上げ樣もございません。併しこゝで相馬の旦那樣が御切腹なされましては、却つてお上に對して申譯のないことになりは致しますまいかと存じられますが……。

寅之助　えゝ、餘計なことをいふな。貴樣たちに武士のこゝろが判るか。第一、これが世間へきこえたら何うするのだ。

千右衛門　世間へきこえると仰しやつても、これを知つてゐるのはあなた樣ばかり。なんとか御内分にして置いて頂く工夫はございますまいか。

寅之助　だまれ、默れ。さあ、金次郎。早く斬れ、斬つてしまへ。(じれる。)え丶、齒がゆい奴だ。貴樣が斬らなければ、おれが斬つてやるぞ。さあ、亭主、そこへ直れ。

(寅之助は刀に手をかけて店へあがらうとするを、金次郎は支へる。)

金次郎　まあ、はやまるな。待つてくれ、待つてくれ。

(寅之助は肯かずに店へ押上らうとするを、長兵衛、富八、久七も怖々ながらに支へる。)

二

青山、長者が丸。上のかたに寄せて、小さい古寺の門。左右は頽れかゝりたる練塀。門前に松の大樹。路ばたには秋草など茂りて、下のかたには田畑がつゞいて見ゆ。すべて今日の青山邊とは全く違ひて、江戸の場末の蕭條たる景色。

寺内にて木魚の音。そこらにて蟬の聲もきこゆ。

(下のかたより農家の子供ふたり、一人は竿に附けたる袋を持ち、ひとりは黐竿を持ちて出で、蟬の聲をたづねながら松の下にあつまる。上のかたより若い僧ひとり出づ。)

子供一　坊さん。蟬が高いところに止まつてゐて、竿がとゞかないんだ。

子供二　後生だから捕つておくれよ。

僧　(迷惑さうに。)ほかの事と違つて、蟬捕りの手傳ひはどうも困る。誰かほかの人に頼むがよからう。(云ひ捨てゝ下のかたへ去る。)

子供一　意地の惡い坊主だなあ。

子供二　そんなことを云つてゐるうちに、蟬は逃げてしまつた。

子供一　仕方がない。ほかへ行かう。

(二人は竿をかついで上のかたへ去る。入れちがひに農家の娘ひとりが手拭をかぶり、大きい風呂敷包みを背負ひ出で　下の方へゆき過ぎる。向より相馬金次郎と石澤寅之助が話しながら出づ。)

金次郎　質屋の奴等も驚きやあがつたな。

寅之助　なにしろ民谷伊右衞門が二人づれで、辨天小僧を極めたのだから、奴等のおどろくのも無理はねえのさ。

金次郎　こつちの手妻は向うでも大抵察してゐたらうが、あゝなつちやあ何うにも動きが取れねえ。おれに十兩、おめえに口どめの五兩、〆めて十五兩で目出たく納まりやあ、向うも仕合せといふものだ。相手が惡けりやあどんなことになるか判るものか。

寅之助　(笑ふ。)おれ達よりも惡い相手があるかな。

金次郎　廣い世間だもの、どんな奴がねえとも限らねえ。おれ達なんぞはまだ〳〵善人の部だよ。

寅之助　その積りで、もう少し修業を積むかな。それにしても刀箱から蛇を出すとは考へものだぜ。

金次郎　刀箱から蛇が出るのも不思議はねえ。灰吹からは大蛇が出るといふぢやあねえか。

寅之助　ちげえねえ。あはゝゝゝゝ。

金次郎　はゝゝゝゝ。

（ふたりは笑ひながら舞臺に來かゝると、寺の門内より常盤津の師匠文字若、廿歳ぐらゐ、寺まゐりに來りし姿にて、日傘を持ちて出づ。）

文字若　おや、お二人さん。お揃ひですね。

金次郎　やあ、赤坂の師匠。なんだつてこんな所をうろ付いてゐるのだ。晝日中、狐に化かされたわけでもあるめえ。

文字若　このお寺へ來たんですよ。

寅之助　この寺へ來た……。こゝにやあ吉三さんといふお小姓でもゐるのかえ。

文字若　冗談ぢやあない、こゝはあたしの家のお寺なんですよ。お盆が來るから、ちよいとお參りに……。

寅之助　やれ、やれ、お若いのに御奇特のことだな。

（このあひだに金次郎は傍を向いて、小判一枚を出す。）

金次郎　そりやあ全く御奇特のことだ。常盤津の師匠の文字若さんが親の寺參りをしようとは思ひも付かなかつた。御褒美をやるから手を出しねえ。

文字若　なにをお呉んなさるの。

（不安心らしく手を出せば、金次郎はそつと小判を握らせる。）

文字若　（びつくりして。）あら、小判ぢやありませんか。なんだか氣味が悪いねえ。

金次郎　氣味が悪いは御挨拶だ。それはおれと石澤の二人がお盆のおしるしだよ。

文字若　まあ。（再び小判をながめる。）これこそほんたうに狐に化かされてゐるんぢやないかしら。

寅之助　狐でも狸でも金をくれゝば有難えぢやあねえか。うつかりしてゐないで、禮をいへ、禮を云へ。

文字若　ほんたうに頂いてもいゝんですか。どうも有難うございます。金さん、この頃は忙がしいんですかえ。

金次郎　忙がしくもねえが、閑でもねえ。まあ、中ぶらりんの所だ。近いうちに遊びに行くから、おつかあにも宜しく云つてくれ。

文字若　きつと來て下さいよ。おまへさんはこの頃、品川へ凝つて行くといふぢやありませんか。

金次郎　うそをつけ。おれはそんな道樂者ぢやあねえ。

文字若　道樂を看板にかけてゐる癖に、隨分勝手なことを云ふねえ。

金次郎　さういふお前こそ浮氣を看板にかけてゐるぢやあねえか。

文字若　あたしがいつ浮氣をしましたえ。

寅之助　おい、おい、往來のなかで好加減にしろ。金さんひとりぢやねえ。傍には寅さんといふ立派なお武家樣が附いてゐるのを知らねえか。失禮のないうちに早く行け、行け。

文字若　まつぴら御免なさい。どうも子供でございますから。（笑ふ。）それぢやあ寅さんもお近いうちに……。

寅之助　知らねえ、知らねえ。（わきを向く。）

金次郎　（笑ひながら。）なんでもいゝから早くお歸りよ。

文字若　（おなじく笑ひながら。）はい、はい。

（文字若は金次郎に眼で挨拶して、向うへ去る。）

寅之助　（笑ひながら。）おい、こゝらは晝間でもさびしい所だ。町家のあるところまで送つて遣つちやあどうだね。

金次郎　へん、それほど鈍くもねえ積りだ。

寅之助　自分は鈍くねえ積りでも……。

金次郎　えゝ、よしてくれ。男にかゝはらあ。

（ふたりは笑ひながら上のかたへ行きかゝれば、荷持の男ひとり、長い紺かんばんに木綿の帶をしめて出づ。）

男　（叮嚀に。）皆さん、お暑うござります。

金次郎　やあ、御苦勞。（かんがへて。）あしたはおれの當番だな。

男　左樣でござります。

金次郎　さうすると、いつもの通り、本多さんへ行つてな。毎々御無心ながら、明日もまた裃を拜借いたしますと賴んで置いてくれ。

男　かしこまりました。どなたも御免ください。（會釋して下のかたへ去る。）

寅之助　いつも〳〵人の物を借りるのも幅が利かねえ。裃なんぞは一つ拵へて置けばいゝぢやあねえか。

金次郎　おまへは感心に持つてゐるな。

寅之助　持つてゐるとも……。裃はおれたちの商賣道具だ。それがなけりやあお勤めが出來ねえ。

金次郎　なに、誰かのを借りて置けば濟むことだ。かうして懷ろに金を持つてゐても、どうも裃なんぞをこしらへる氣にやなれねえ。

寅之助　いゝ心がけのお侍だ。拙者ほと〳〵感心いたしてござるか。あはゝゝゝ。

（下のかたより金次郎の弟半三郎、廿一二歲、講部所風の髮、竹刀と劍術道具をかついで出づ。）

半三郎　兄さん。今お歸りでございますか。石澤さんも御一緒でどこへお出でになりました。

金次郎　なに、ちよいと其處まで行つて來たのよ。

寅之助　けふも講武所か。なか〳〵勉强だな。どうだ、此頃はよつぽど上達したか。
半三郎　まあ、どうにか人並みには働けさうでございます。
寅之助　人なみの働きが出來れば結構だ。（金次郎に。）若い者が汗水を垂らしてヤットウの稽古をしてゐるのだ。お前の倅は兎も角も、弟には麻の羽織の一枚もこしらへて遣れよ。可哀さうぢやあねえか。
金次郎　まあ、そんなことは家へ歸つてからのことだ。さあ、早く歸つて、涼みながら一杯遣らうぜ。
寅之助　家で飲むのは詰まらねえぢやあねえか。
金次郎　いや、それは又あとの相談だ。どうでこゝまで引揚げて來たのだから、兎もかくも一度は家へ來いよ。
半三郎　（苦々しさうに。）又お酒でございますか。
金次郎　いくら飲んでも、けふはおまへの袴を剝ぐやうなことはしねえ。この通り懷ろは大丈夫だ。

（金次郎は懷ろを叩いて、寅之助と共に笑ひながら行きかゝる。半三郎は困つた顏をしながら附いてゆく。）

――幕――

第二幕

一

第一幕の翌年、慶應四年四月なかばの夕刻。

赤坂、田町、若松といふ小料理屋の前。まん中には短い暖簾をかけたる入口、そのなかは沓脱ぎのこゝろ。上のかたは板塀、その中に小庭のあるところにて、見越しの松など見ゆ。入口にも柳の立木あり。下のかたは出窓にて、内には簾がおろしてあり。家の下のかたには、溜池を隔てゝ山王の山が若葉がくれに見ゆ。

（上のかたには色々の荷物を積みたる荷車を卸して、車力ひとりが休んでゐる。町家の若い者と小僧も一緒に休んでゐる。小僧は風呂敷を脊負ひて、灯の無い弓張提灯を持つてゐる。）

車力　これから中野まで行つた日にやあ、夜になつてしまひますぜ。
若い者　勿論、夜になるのは覺悟の前だ。
車力　この頃は日が暮れると物騷ですからね。
若い者　江戸のまん中にゐると猶物騷だ。ちつとも早く逃げる方が無事だよ。（下のかたを見か

へる。）それにしても、おかみさん達は遲いことだな。（小僧に。）お前、引返して見て來い。

小僧　あい、あい。

（小僧は引返して行かうとする時、下のかたより町家の女房と娘は荷物をかゝへ、女中は風呂敷づつみを脊負ひ、ぶら提灯を持ちて出づ。）

女房　お前さん達はよつぽど待つたかえ。

若い者　あんまり遲いので案じてゐました。

娘　なにしろこんな荷物をかゝへてゐるので、なか〳〵捗取らないのよ。

女中　中野まではまだ隨分遠いのでせうね。

女房　ちつとぐらゐ遠くても、まあ我慢して行つておくれよ。辻斬や押込みは毎晩のやうに流行るし、なん時どこで軍が始まるか判らないんだもの。江戸にうか〳〵してゐられるものかね。

車力　まつたく困つたものですよ。さあ、日の暮れないうちに早く出かけませう。

若い者　行きませう、行きませう。

（車力は車をひき出せば、若い者と小僧はあと押しをして上のかたへ去る。）

娘　暗くなると怖いねえ。

女房　それだから早くおいでよ。

（女房、娘、女中も急いで車のあとを追つてゆく。それと入れ違ひに、上のかたより錦切れを附けたる隊長一人が先きに立ちて兵士七八人を引き連れ、市中を見廻りの體にて出で來る。兵士は銃を荷つてゐる。隊長は下のかたに來りて、どつちへ行かうかと鳥渡思案したるが、兵士をみかへりて向うへ行けと指圖し、そのまゝ向うへ立去る。料理屋の暖簾をくゞりて、相馬金次郎が酒に醉つて出づ。金次郎は當時隱居の身の上なれば、武士とも見えぬ風俗、額に月代を生やして、唐棧の袷に半纏をかさね、何か文句を云つてゐるのを、女中がなだめながら送つて出づ。）

金次郎　えゝ、人を馬鹿にしやあがるな。まともに勘定を拂へば大切なお客様だ。なんで無暗に追ひ出しやあがるのだ。

女中　追ひ出すといふわけぢやございませんが、何分このごろは物騷でございますから、夜は商賣を休むことに致して居りますので……。

金次郎　だからよ。まだ本當に日が暮れねえぢやあねえか。

女中　それでも今頃から火を落すことに致して居りますので……。

金次郎　何をつべこべ云やあがるのだ。

（金次郎は女中の横つらを毆り倒す。暖簾のうちより文字若が折詰をさげて出づ。）

文字若　あれ、金さん。そんな亂暴なことをしちやあいけないぢやあないか。

金次郎　えゝ、引込んでゐろ。此頃はむしやくしやしてならねえから、せめて自棄酒でも鱈腹の

んで遣らうと思へば、もう日が暮れますの何のと云つて、無暗に人を追ひ出しやあがる。料理茶屋は夜が商賣だのに、何だつて日が暮れると休みやあがるのだ。

文字若　そんな理窟を云つたつて、かう云ふ御時節だから仕方がないぢやありませんか。

金次郎　その御時節が癪に障つてならねえ。こんな御時節に誰がしたのだ。田舍侍が泥草鞋を穿いてお江戸のまん中へ乘込んで來やあがつて、錦切れを嵩にきて野方圖もなく威張り散らしやあがるから、こんな不景氣な世の中にもなつて來るのだ。

文字若　（左右をみかへりながら。）往來でそんな大きい聲をして、人に聞えるといけないからさ。

金次郎　だれに聞えたつて構ふものか。おれは本當のことを云つてゐるのだ。

文字若　まあ、いゝと云ふのに……。（女中に。）姐さん、まことに濟みませんでしたね。どうぞ堪忍して遣つてくださいよ。

（文字若は女中にむかひて、こゝはわたしが引受けたと知らせれば、女中は會釋して內に入る。金次郎はだん／＼に醉がまはりて、柳の木に倚りかゝる。）

文字若　さあ、おまへさん。早く行きませうよ。（空を見る。）日が暮れるの、暮れないのと押問答をしてゐるうちに、ほんたうに薄暗くなつて來たぢやありませんか。

金次郎　暗くなりやどうするのだ。化物でも出るといふのか。化物は江戸中一杯で、百鬼夜行どころか、このごろは夜も晝も見境ひはありやしねえ。化物が怖くつて、一日でも生きて

ゐられるものか。ばか／＼しい。

文字若　なんでもいゝからさ。まあ兎もかくも家まで歸つてくださいよ。おつかさんが寂しがつて待つてゐるからさ。（折詰をみせる。）

金次郎　そんな物はどうでもいゝ。犬にでも遣つてしまへ。

文字若　だつて、勿體ないぢやありませんか。

金次郎　なに、勿體ねえことがあるものか。（內をみかへる。）こゝの家もこの頃は急に惡くしやがつた。一つだつて碌に食へる物はありやしねえ。そんな物をおつかあに遣るのは口よごしだ。犬にやれ、犬にやれ、犬に遣れ。（折詰を取らうとする。）

文字若　あれ、いけないと云ふのに……。

金次郎　（無理に折詰を取る。）吝なことを云ふな。犬に遣らなけりやあ、そこらの溝へでも捨ててしまへ。（折詰を持つて、よろ／＼しながら下のかたを見る。）おゝ、來た、來た。はは、こりや捨てるより優しだ。

（下のかたより錦切れを附けたる兵士二人出づ。金次郎は進み出で、その前に突つ立つ。）

金次郎　もし、もし、錦切れの旦那。失禮ながらこれを獻上しませう。（折詰を二人の鼻の先へぶら付かせる。）

兵士甲　えゝ、無禮なことをするな。

金次郎　失禮は初めから斷つてゐるぢやあねえか。お前さん方に江戸の料理といふのは何ういふ物だか、一つ喰べさせて上げたいから、獻上しようといふのだ。

兵士乙　貴樣はよほど醉つてゐるな。

兵士甲　醉つてゐるから免しておくのだ。重ねて無禮を働くと、助けて置かんぞ。

金次郎　なんで助けて置かねえのだ。物を遣つた上に殺されてたまるものか。かうなりやあ意地づくだ。さあ、邪が非でもこの料理を貰つてくれ。

文字若　（はら／＼しながら。）もし、おまへん。好加減におしなさいよ。（兵士に。）旦那樣、この通り醉つて居りますから、幾重にも御勘辨をねがひます。

（暖簾のうちより以前の女中と料理番らしい男ふたりが覗いてゐる。）

兵士乙　醉つてゐる者は介抱して、早く連れて歸れ。

文字若　はい、はい。

兵士甲　この時節に他愛なく醉つてゐるとは、町人とは云ひながら不心得な奴だな。

金次郎　（呶鳴る。）おらあ町人ぢやあねえ。

文字若　（一生懸命に。）まあ、默つておいでなさいよ。

兵士乙　なに、町人でない。（金次郎を見て笑ふ。）丸腰で半纒をきて、いくら江戸でもそんな侍はあるまい。

金次郎　ところが、あるから不思議だ。貴樣達のやうな田舍者にはわかるめえ。

文字若　（泣聲になつて。）あれさ、およしと云ふのに……。

兵士甲　なにが田舍者だ。もう一度云つてみろ。

金次郎　田舍者だから田舍者だといふのよ。鎭守樣のお祭ぢやあこんな旨いものは食へねえ。話の種に江戸のお料理を食つてみろと、おれが親切に云つて遣るのだ。さあ、遣るよ。貰つて行け。

（金次郎は折詰を突き付ければ、兵士は堪へかねて叩き落す。）

金次郎　えゝ、なにをするのだ。

（金次郎は詰め寄らうとするを、兵士は突き倒し、鐵扇にてその額を打つ。金次郎は飛び起きるを、文字若は獅嚙み付いて押へる。暖簾のうちよりも男二人と女中が駈け出して、これも金次郎を抱きすくめる。）

兵士甲　はゝ、馬鹿な奴め。

兵士乙　江戸にはこんな奴が多いので困るな。

（兵士二人は笑ひながら上のかたへ立去る。金次郎は跳ね起きて、そのあとを追はうとするを、人々はおさへ付けてゐる。）

男　一　この節がら錦切れなんぞに係り合ふと、飛んだ目に逢ひます。

男　二　およしなさい、およしなさい。

文字若　それだから、云はないことぢやあない。あら、額から……。

（文字若は紙を出して、金次郎の額の血をふいてやる。金次郎もやうやく鎭まりて、紙にしみたる血の色をぢつと見る。）

金次郎　いゝよ。いゝよ。大したことはねえ。もうおとなしくするから、みんなあつちへ行つて呉んねえ。

女中　なにか血どめのお藥を持つてまゐりませうか。

文字若　たび／＼お騒がせ申して、お氣の毒ですね。

女中　ぢやあ、お靜かに……。

（女中と男共は內に入る。）

文字若　おまへさん。痛くはないかえ。

金次郎　なに、それほどに痛くもねえが……。（かんがへて。）おい、師匠。後生だから幾らか都合してくれねえか。

文字若　どのくらゐさ。

金次郎　さあ、一兩でも、二兩でも、三兩でも……。まあ、幾らでもいゝや。

文字若　此頃はどこの質屋も休み同樣だから、あんまり無理を肯いてもくれまいが、頭の物や他所行きを持ち込んだら、ちつとは融通してくれるかも知れない。さうして、そのお金をどうするの。

金次郎　どうするか、それはあとで云つて聞かせるから、その金の都合が出來たら、すぐにおれの家へとゞけてくれ。

文字若　あたしの家へ一緒に來るんぢやあないの。

金次郎　むゝ、これから眞直に歸ることにするから、屹と賴むぜ。

文字若　なんだか可笑しいわね。なぜ眞直に家へ歸るの。

金次郎　まあ、兎も角もおれの云ふ通りにしてくれ。金の一件はなるたけ早いがいゝな。

文字若　（不審ながら。）あゝ、承知しました。お金の出來次第、すぐ屆けに行きますよ。

金次郎　早く行け、早く行け。

文字若　あいよ。

（文字若は足早に下のかたへ去る。それを見送りて、金次郎は上のかたへ行かうとする時、上のかたより中間一人が酒に醉ひて出で、金次郎と摺れちがひゆく。）

中間　また降りさうになつて來たか。空までが公方樣のやうに泣きつ面をしてゐやがる。あゝ、忌だ、忌だ。（唄ふ。）槍は錆びても名はさびぬ、昔ながらの落し指、ヨイ／＼ヨイヨイ、よいやさ。はゝゝゝ。

（中間はよろけながら向うへ去る。金次郎は立ちどまりて耳をかたむけ、やがて足早に上のかたへ去る。）

二

青山、長者が丸。相馬金次郎の家。武士の屋敷とは名ばかりにて、殆ど空家かと思はれるほどに住み荒らしたる體。正面の床の間には掛物もなく、壁の破れたのが見えるばかりといふ有樣。奥へ出入りの襖も無論に破れてゐる。他は推して知るべし。それでも下のかたには式臺附きの玄關あり。門は二本の丸太を立てたばかりにて、左右には疎らなる竹垣が頽れかゝり、そこには卯の花が咲いてゐる。庭も荒れ果てゝ、上のかたには竹藪、ほかに樹木や雑草も繁つてゐる。家の外には田畑がつゞいて見ゆ。

（第一場と同じ日の宵。内には薄暗い行燈をとぼし、相馬半三郎は緣先で蚊いぶしを煽いでゐる。遠く題目太鼓の音、蛙の聲きこゆ。下の方より石澤寅之助は小倉の袴をはきて大小をさし、覆面用の黒い巾を持ちて出づ。）

寅之助　（案内も無しに庭口へ通る。）やあ、蚊いぶしか。毎年のことだが、藪つ蚊には泣かされるな。

半三郎　今年は閏があつたので、取分けて早いやうです。

寅之助　（緣に腰をかける。）なにしろこゝらは寺と畑と竹藪に取りまかれてゐるのだから、蚊の棲家だか人間の棲家だか判つたものぢやあねえ。よくも先祖以來こんなところに住んでゐられたものだ。

半三郎　それでも先祖代々住み馴れた組屋敷だと思ふと、やつぱり離れる氣にはなれないものですね。

寅之助　離れたくないと云つても、どうで長くはゐられめえ。今度はちつと場所を擇んで、藪つ蚊や蛇の出ねえ村に住むことだ。

半三郎　長くはこゝにゐられますまいか。

寅之助　朝臣にでもなつたら格別だが、さうでなけりや遲かれ早かれ追つ拂ひを食ふだらう。安政の地震よりもどえらい大地震がゆり出して、德川の大家臺が一堪りも無しにぶつ潰されてしまつたのだから、その庇の下に住んでゐたおれ達が路頭に迷ふのは當り前さ。

半三郎　殘念なことですね。

寅之助　今さら愚痴を云つても始まらねえ。お互ひに今までは、たとひ小身でも百俵といふ先祖代々の祿が附いてゐたから、貧乏ながらも顎の干上る苦勞はなかつたが、もうこれからは俄浪人でうか〳〵しちやあゐられねえ。

半三郎　こつちの組には朝臣になつた人もあるさうですね。

寅之助　あるさうだどころぢやあねえ。半分ぐらゐは朝臣になつたやうだ。朝臣になれば家屋敷は勿論、家祿も今まで通りに呉れるさうだから、おとなしく降參して朝臣になるのが悧口かも知れねえが、それもあんまり意氣地がねえ。（上の方を指さす。）現に隣の山口も朝臣になつたと云ふぢやあねえか。

半三郎　（苦々しげに。）さうですか。隣にゐながら些とも知りませんでした。

寅之助　流石に世間の手前もあるから、なるべく内所にしてゐるのだらう。と云つて、われ〳〵のやうに、脫走も出來ず、朝臣にもならず、唯いつまでも恭順で小さくなつてゐるのでは、差當り食ふことが出來めえぢやあねえか。そこで少し相談に來たのだが、今夜も兄きは留守かえ。

牛三郎　ゆうべから出たぎりで歸つて來ないので、わたしも內々案じてゐるのですが……。

寅之助　兄きには赤坂の師匠が附いてゐるから、この御時節に悠々と、長火鉢の前にでも脂下つてゐるのだらう。まことに天下泰平のことだ。かうなると情婦のひとりも拵へて置かねえ奴は慘めだな。（少しかんがへる。）それぢやあ今夜も歸るかどうだか判らねえ。おい、牛さん。兄きの名代に、おめえ少し手傳つてくれねえか。

牛三郎　どんなお手傳ひを致すのです。

寅之助　さう眞面目に聞かれると返事に困るが……。實はこれだ、これだ。

（寅之助は覆面を見せ、刀の柄を叩いて見せる。）

牛三郎　（首をかしげる。）それがどうしたと云ふのです。

寅之助　兄きとは大違ひで、ふだんから野暮堅え男だから、かういふ時には早わかりがしねえで困るな。先づかういふ風にして……。（覆面をして、腕捲りをしてみせる。）金のありさうな町人の家へ押込むのだ。

牛三郎　え、町人の家へ押込む……。强盜に這入るのですか。

寅之助　人の家へ押込むにやあ限らねえ。途中でも金のありさうな奴をみつけたら、取つ捉まへて嚇しつけるのよ。

牛三郎　（驚きと怒りを取りまぜて。）飛んでもないことを……。

寅之助　なにが飛んでもねえ。斬取り强盜は武士の習と云ふぢやあねえか。

牛三郎　いゝえ、いゝえ、斬取り强盜などは武士にあるまじきことです。まして此の御時節に左樣な不埒を働きましては、恭順の御趣意に背くではありませんか。

寅之助　いや、この御時節だから斬取り强盜もしなけりやあならねえ。今もいふ通り、家代々の祿に離れては、おたがひに食ふことが出來ねえぢやあねえか。さあ、惡いことは云はねえから、おれと一緖に來てくれ。さすがに面をむき出しぢやあ拙いから、手拭か風呂敷でおれのやうに覆面をするのだ。

牛三郎　（腹立たしげに。）そんなことは出來ません。

寅之助　出來ねえことがあるものか。軍用金を出せとか何とか、凄味の臺詞はおれが好いやうに列べ立てるから、おめえはたゞ默つてだんびらを引つこ拔いて、おどしに振りまはして見せればいゝのだ。

（牛三郎はだまつてゐる。）

寅之助　うまく行けば一晩に五十兩や百兩はなんでもねえ。それで當分は寢て暮すのよ。こんな洒落れたことはねえぢやねえか。

半三郎　なんでもお前さん一人で勝手にお遣りなさい。そんな仲間入りは眞平御免です。

寅之助　どうしても忌かえ。

半三郎　知れ切つたことです。

寅之助　（舌打ちして。）どうも話せねえ男だな。ぢやあ、又出直して來るとしようか。

（寅之助は下の方へ立去る。半三郎は返事もせずに顔をそむけてゐたるが、やがて起つてあとを見送る。）

半三郎　ほんたうに呆れた男だな。いくら兄さんだつて、まさかそんな仲間入りはしないだらう。

（半三郎は再び蚊いぶしを燻ぐ。蛙の聲、題目太鼓の音、さびしく聞ゆ。向うより相馬金次郎は貧乏徳利をさげて足早に出づ。）

金次郎　（空を見る。）なんだかぼろついて來やあがつた。今年はどうも雨が多いな。（云ひながら内に入る。）

半三郎　お歸りなさいまし。

金次郎　また蚊いぶしか。日が暮れると、毎晩それが一と仕事だつたが、もうこれで年明きだらう。

半三郎　そこらで石澤さんに逢ひませんでしたか。

金次郎　いや、逢はなかつた。あいつに四五日逢はねえが、どうしてゐるかな。

半三郎　（兄の顔を見て。）おや、兄さんは顔をどうなすつた。

金次郎　（顔をおさへる。）錦切れの奴等がなぐりやあがつた。

半三郎　喧嘩でもなすつたのですか。

金次郎　喧嘩といふほどでもねえ、ちよいと戯つて遣つたのよ。おい、茶碗を持つて來てくれ。

半三郎　はい、はい。（半三郎は奥に入りて、茶碗を盆に乘せて來る。）

金次郎　（手酌で一杯のむ。）そこで、半三郎。今夜のうちに支度をして、おれと一緒に行け。

半三郎　え。では、あなたも石澤さんと同じやうに……。

金次郎　石澤がどうした。

半三郎　兄さん。そればかりはわたくしが堅く御意見申します。家代々の祿に離れて、たとひ浪浪いたしましても……。

金次郎　なんだ、なんだ、なにを判らねえことを云ふのだ。

半三郎　いゝえ、判らないことはありません。斬取り强盜は武士の習などとは飛んでもないことです。

金次郎　えゝ、おれの云ふことをよくも聞かねえで、何を云つてゐやあがるのだ。おれがいつ斬取り强盜をすると云つた。おれの云ふのはそんなことぢやあねえ。おまへと一緒に上野へ行くのだ。

半三郎　上野へ……。（意外らしく兄の顔をみつめる。）あの彰義隊へ這るのでございますか。

金次郎　さうだ。さうだ。

半三郎　兄さんはほんたうに上野へお出でになりますか。

金次郎　本當よ。なぜ不思議さうにおれの面をながめてゐるのだ。おれは醉つて云ふのぢやあねえ。本氣で云つてゐるのだ。

（金次郎は重ねて飲む。半三郎はかんがへてゐる。）

金次郎　上野へ行くのは忌かよ。

半三郎　いえ、行きたいのは山々ですが……。

金次郎　それだから一緒に行けといふのだ。

半三郎　さあ。（まだ考へてゐる。）

金次郎　（あざ笑ふ。）命が惜しいか。

半三郎　（屹となつて。）いえ、命が惜しいなどとは思ひません。併し公方様は飽までも恭順の思召で、家來一統にも恭順を守るやうにと堅く申渡されて居ります。この場合みだりに立騷ぐものは、主人のからだに刄をあてるも同様だとも仰せられました。

金次郎　（又飲む。）それがどうした。

半三郎　われ／＼家來の分として、善悪ともに御主君の仰せを守らなければなりません。御主君が戰へとおつしやれば、何時でも戰ひます。上野に楯籠れとおつしやれば、何時でも參

ります。しかし御主君が恭順せよと仰せ出されてゐる場合に、われ／＼が勝手に徒黨を組んで、上野のお山に楯籠るなどとは、甚だおだやかならぬ事と存じられます。兄さんは誰に誘はれて俄に彰義隊へ這入ることになさいました。

金次郎　だれに誘はれたわけでもねえ、自分ひとりで思ひ立つたのだ。おまへは二口目には御主君といふが、その御主君はどこにゐるのだよ。

半三郎　あらためて申すまでもなく、一旦は上野の大慈院に御逼息あそばされましたが、當月十一日、更に水戸へ御立退きに相成りました。

金次郎　それ見ろ。おれたちの主人といふ公方様は家來どもを置去りにして、自分ひとりで逃げて行つてしまつたぢやあねえか。そんな主人にいつまでも忠義立てをするのは、馬鹿の骨頂だ。天下茶屋の芝居ぢやあねえが、もう斯うなりや主でねえ、家來でねえ、一本立の安達元右衛門様だ。恭順を守らうが守るめえが俺達の勝手次第で、だれの指圖を受けることもねえ筈だ。

半三郎　でも、兄さん……。

金次郎　えゝ、だまつて聞け。おれがこれから上野へ駈け込まうといふのは、主人の爲でもねえ、忠義の爲でもねえ、この金さんの腹の蟲が納まらねえからだ。田舎侍が錦切れを嵩にきて、大手をふつてお江戸のまん中へ乘込んで來やあがつて、わが物顔にのさばり返つてゐる。それぢやあ江戸つ子が納まらねえ、第一にこの金さんが納まらねえ。べらぼ

うめ、錦切れが何だ。錦切れが怖くつて、五月人形をひやかしに行かれるか。おれは去年神田の質屋へ行つて、蛇を種にして十兩まき上げて來た一件から、役向きの方もたうとう不首尾になつて、まだ若えくせに隱居を申付けられ、弟のおまへが家督を相續することになつた。隱居といへば隱れた身分だから、引込んで小さくなつてゐればいゝやうなものだが、江戸つ子の面を泥草鞋で踏みにじられちやあ、隱居のおれでも我慢が出來ねえ。相馬の金さんはチヤキ〳〵の江戸の子だぞ。

半三郎　では、御主君の仰せに背いても、あなたは上野へ行くと仰しやるのですか。

金次郎　まだわからねえか。おれ達にはもう御主君なんて云ふものはねえといふのに……。江戸つ子のおれたちが田舍者を相手に喧嘩をする、唯それだけのことよ。

半三郎　それでは却つて御主君に不忠となりはしますまいか。

金次郎　いつまで同じことを云つてゐやあがるのだ。（じれて呶鳴る。）忌なら止せ、勝手にしやがれ。江戸つ子の面汚しめ。

（金次郎は手酌でぐい〳〵飲んでゐる。半三郎は又かんがへてゐる。薄く雨の音。向うより常磐津文字若は雨傘を半開きにして足早に出づ。）

文字若　（内に入る。）たうとう降り出しましたね。

（金次郎はだまつて飲んでゐる。）

文字若　あら、みんなだんまりでどうかしたんですかえ。

金次郎　だれだ、誰だ。（透し視る。）おゝ、師匠か。大層早かつたな。

文字若　だつて、なるたけ早く屆けてくれと云ふから、大急ぎで駈け付けて來ましたのさ。貞女といふのは、まあこんなものさね。（笑ひながら緣に上る。）半さん、今晩は……。

金次郎　そんな奴に口をきくなよ。まあ、息つきに一杯のめ。（茶碗をさす。）

文字若　これで飲むのかえ。

金次郎　亭主のいふことを肯くのが貞女だ。飲め、飲め。

文字若　いくら貞女でも茶碗ぢやあ遣切れない。小さいお猪口はないのかえ。

金次郎　いくぢのねえ女だな。おい、半三郎。猪口を持つて來い。

（半三郎は無言で奧に入る。）

文字若　おまへさん。兄弟喧嘩でもしたんぢやあないかえ。あんなおとなしい人をいぢめるのはお止しなさいよ。

金次郎　あんな馬鹿野郎を相手に、喧嘩をする張合もねえや。（奧に向ひて。）やい、やい、早く持つて來い。何をぐづ〳〵してゐやあがるのだ。

文字若　およしなさいよ。可哀さうぢやありませんか。（金次郎の額をみて。）おまへさん、額の傷はもう好いんですかえ。

金次郎　なに、もう何でもねえ。（額をなでる。）飛んだ仁木彈正だ。

（奧より半三郎は猪口を持つて出で、文字若の前に置く。）

文字若　どうも憚りさま。

金次郎　そこで早速だが、金の工面は出來たか。

文字若　御時節柄だから、どこでもなか〳〵無理をきいてくれないのさ。やう〳〵のことで二兩と一分、それでまあ我慢しておくんなさいよ。

金次郎　いや、大出來、大出來。それだけありやあ大願成就だ。

文字若　それにしても、そのお金を一體どうするのさ。その入り道を聞かないうちは、うつかり渡すことは出來ませんよ。

金次郎　そりやあ聞かねえでも話さなけりやあならねえ。さあ、注いでやるよ。

（文字若は猪口を取れば、金次郎は酌をしてやる。蛙の聲。）

金次郎　それが別れの杯だ。ぐつと飲んでくれ。

文字若　別れのさかづき……。（笑ひ出す。）あたしは手切れのお金を持つて來たんぢやありませんよ。

金次郎　いや、冗談ぢやあねえ。本當にわかれの杯だと思つてくれ。おれは今夜のうちに支度をして、上野の彰義隊へ這入るのだ。

文字若　（びつくりして。）お前さん、本氣で云ふのかえ。

金次郎　むゝ、本氣だ、本氣だ。こんな自墮落な人間でも、相馬の金さんは江戸つ子だ。いつまで小さくなつて恭順してゐられるわけのものぢやあねえ。

文字若　彰義隊なんぞ這入つて勝てるかしら。

金次郎　勝つか負けるか判らねえが、先づ十に九つはむづかしいな。

文字若　そんな危ないところへ飛び込むことは無いぢやありませんか。誰から御褒美をくれるわけでも無し、負ければ死に損、こんな詰らないことはないと思つてゐるのに、お前さんもその仲間入りをする氣かえ。

金次郎　そりやあお前のいふ通り、いくら働いたところで誰から褒美をくれると云ふ譯でも無し、負ければ死に損、こんな割に合はねえ話はねえ。それは萬々わかつてゐるが、おれの性分でもう我慢が出來ねえから、今さら未練らしく止めてくれるな。おまへに都合して貰つた二兩一分の金で、質でも受け出して身拵へをして、上野の山へ楯籠るのだ。

文字若　半さんも一緒ですかえ。

（金次郎はだまつてゐる。）

文字若　（向き直る。）もし、半さん。おまへさんも一緒に行くんでせうね。

（半三郎もだまつて考へてゐる。）

文字若　ぢやあ、おまへさんは行かないんですかえ。ねえ、半さん。はつきりと返事をして下さいよ。兄さんと違つて、お前さんは不斷から講武所で勉强して、劍術が大變によく出來ると云ふのに、そのお前さんが小さくなつてゐて、兄さんが彰義隊へ行くんぢやあ、まるであべこべぢやありませんか。

丑三郎　（顏を上げる。）まつたくあべこべかも知れません。ふだんは武士の道を說いて、兄の放蕩を意見してゐたわたしが、この場合に引込んでゐて、兄が彰義隊の仲間入りをする……。どつちが好いのか、悪いのか、わたしにも判らなくなつて來ました。

金次郎　おい、師匠。そんな奴にはかまはねえで、早く金を渡してくれ。このなりぢやあ軍は出來ねえ。第一に幅が利かねえから、すぐに質屋へかけ付けて、色々の物をう出けして來るのだ。昔ならば忍びの緒を切つて、兜に名香を焚かうといふ所だ。

文字若　どうしてもお前さんは行くのかえ。

金次郎　だれが何と云つても、もういけねえ。さあ、早く金をくれと云ふのに……。

文字若　（仕方なしに金を出す。）かうと知つたら、お金の工面なんぞして來るんぢやあなかつたねえ。

金次郎　（紙に包みし金をあけて見る。）む丶、二兩と一分……。ありがてえ、ありがてえ。これで金さんの死花が咲くといふものだ。

文字若　あ丶、こんな貞女にやあなりたくないねえ。（ほろりとする。）

金次郎　お前、泣くのか。

文字若　涙も出るぢやあありませんか。（眼をふいて。）ぢやあ、もう、あたしも覺悟しましたから、一生のお別れに、思ひ切つて大きいもので飲ませて下さいよ。

金次郎　ぢやあ、これを遣らう。（茶碗を出す。）

文字若　ちよいと待つて……。

（文字若は起つて、行燈をそばへ持ち來り、かんざしで燈心をかき立てる。）

文字若　おまへさん、よく顏をみせて下さいよ。

金次郎　え丶、芝居のやうなことを云ふなよ。飛んだ三の切だ。

（金次郎は茶碗を文字若にわたして、酌をしてやる。薄く雨の音、蛙の聲。文字若は飲み終りて金次郎に茶碗を戻し、酌をしてやる。）

金次郎　（酒をのみながら。）おつかあを大事にしろよ。

文字若　おまへさんが彰義隊へ這入るなんて、まるで夢のやうな話だから、阿母さんもさぞびつくりするだらうねえ。

金次郎　（茶碗を下に置いて。）さあ、夜の更けねえうちに、早く質屋を叩き起して來なけりやあならねえ。（起ちあがる。）

丑三郎　（俄に進み出る。）兄さん。わたしも一緒にお連れ下さい。

金次郎　おれは質屋へ行くのだよ。

丑三郎　その質屋へ一緒にまゐつて、わたしの物も少し受出して頂きたいのです。

金次郎　この野郎、蟲の好いことをいふな。貴様の物なんぞを受けて遣るやうな金ぢやあねえ。

丑三郎　いえ、質屋ばかりではありません。上野へも一緒にまゐります。

文字若。おまへさんも彰義隊へ這入るのかえ。

半三郎　もう斯うなつたら理窟を云つてはゐられません。わたしも兄さんに附いて行つて、死ぬときには一緒に死にます。

金次郎　む〻。判つた、わかつた。（文字若をかへりみて笑ふ。）おい、師匠。這奴もやつぱり江戸つ子だ。

文字若　ほんたうに頼もしいねえ。（半三郎のそばに摺りよる。）おまへさん、なるたけ兄さんのそばに附いてゐて、世話をして遣つてくださいよ。

半三郎　それは確に引受けました。

金次郎　ぢやあ、行かう。（縁を降りかゝる。）

文字若　（縁に出て空をみる。）まだ少し降つてゐるやうだ。そこにあたしの傘がありますよ。

金次郎　それほどのことはあるめえ。

文字若　まあ、持つておいでなさいよ。（傘を把つて渡す。）

（金次郎は傘をうけ取り、半三郎もそのあとに附いて出ようとする時、下のかたより石澤寅之助再び出づ。）

寅之助　（出逢ひがしらに。）おい。兄弟揃つてどこへ行く。

金次郎　やあ、い〻所へ來た。（寅之助の腕をつかむ。）おい、おれ達と一緒に行かねえか。

寅之助　どこへ行くのだ。

金次郎　これから支度をして上野へ駈け込むのよ。

寅之助　上野へ駈け込む……。

金次郎　彰義隊よ。

寅之助　（意外らしく。）む〻、彰義隊か。そいつは少し考へなけりやあならねえ。

金次郎　おれの歸るまでに考へて置いてくれ。

（金次郎はつかみし手を放し、傘をさして向うへ行きかゝる。半三郎も續いてゆく。寅之助は不思議さうにあとを見送る。文字若も縁に立つて見送る。雨の音、蛙の聲。）

——幕——

第三幕

一

おなじく五月十五日の朝。

赤坂、新町、常磐津文字若の家。正面の上のかたに緣喜棚。その下は地袋。まん中には奥へ出入りの葭戸二枚。つゞいて茶壁。それに三味線がかけてあり。上のかたは竹窓、下の方は格子戸にて御神燈がかけてあり。表は町家つゞきにて、隣の家の横手が見える。雨の音きこゆ。

（内には文字若の母おとくが稽古の娘およしと稽古用の本箱を挾んで向ひ合つてゐる。おとくは三味線を前に置き、およしは彈き語りにて小夜衣千太郎の道行を唄つてゐる。）

およし　（唄ふ。）――ぬるゝ袂の露ならで、こゝろ置く身は雨空に、みだれて渡る雁さへも、もし追手かと驚かれ、ふるふ足もと音を忍ぶ、秋の蛙の聲かれて、田川の水のあさき緣、死ぬる覺悟も積ゆゑに、あゆみ兼ねてぞ立ちやすらひ――

（この淨瑠璃のうちに、下のかたより文字若は湯歸りの體にて、手拭や糠袋などを持ち、傘をさして早足に出づ。）

文字若　（あわたゞしく内に入る。）阿母さん、大變だよ。

おとく　なんだねえ、さう〳〵しい。おまへの留守におよつちやんが來たから、小夜衣千太郎を浚はせてゐるんだよ。

文字若　小夜衣千太郎どころぢやない。阿母さん、お聽きよ。上野でいよ〳〵軍が始まるとさ。

おとく　上野で……。いよ〳〵軍が始まるのかえ。

文字若　官軍の方ぢやあ夜の明けないうちから繰り出して、下谷と本鄕から攻めるんだとさ。酒屋の松さんが見て來たといふので、そこらでもみんなが騷いでゐるのよ。

おとく　成程そりやあ大變だ。それぢやお稽古どころぢやあない。およつちやんも早くお歸りなさいよ。

およし　ぢやあ、御めんなさい。左様なら。

（およしは三味線を片附けて、早々に歸つてゆく。）

おとく　（表をみる。）上野あたりの軍なら、まさかにこゝらが何うなると云ふこともあるまいけれど、さあと云つちあ間に合はないから、今のうちに些と荷ごしらへでもして置かうねえ。

（文字若はだまつて考へてゐる。おとくは引返して文字若のそばに來る。）

おとく　（小聲で。）ねえ、お前。金さんが彰義隊に這入つてゐるなんて云ふことを、誰にも話しやあしまいね。

文字若　そんなことを誰にいふものかね。

おとく　若しもそれが官軍の耳にでも這入ると、あたし達もどんな係り合ひになるかも知れないから、內所にして置かないといけないよ。

文字若　おつかさん。濟まないけれど、清婦湯を煎じて頂戴な。（額をおさへる。）

おとく　また頭痛がするのかえ。そんなときに朝湯に這入らなければいゝのにさ。今すぐに煎じてあげるよ。

（おとくは奥に入る。文字若は額をおさへて俯向いてゐる。雨の音。小銃の音遠く聞ゆ。）

文字若　（額をあげる。）あ、始まつたよ。

（文字若は俄に起つて門口に出る。小銃の音。向うより近所の若い者三人、あるひは菅笠をかぶり、或は頭から桐油をかぶり、跣足又は草鞋ばきにて走り出で、下のかたへ行きかゝる。）

文字若　（呼ぶ。）ちよいと、鐵砲の音がきこえるやうですねえ。

若者甲　むゝ、戰爭だ、戰爭だ。

若者乙　どうせ上野までは行かれまいが、行かれるところまで行つてみる積りさ。

文字若　一緒に連れて行つてくれないかねえ。

若者丙　冗談云つちやあいけねえ。女なんぞにうつかり行かれるものか。

若者甲　おまけにこんなに雨が降るぢやあねえか。歸つて來て話して聞かせるよ。

若者乙　さあ、行かう、行かう。

（三人は下のかたへ走り去る。雨の音いよ〳〵強くなる。）

文字若　（空をみる。）あゝ、あいにくに雨が強くなつて來たねえ。

（向うより石澤寅之助は町人の姿、頰かむり、尻端折り、はだしにて、番傘をさして急ぎ出で、あとを見かへりながら格子の前に來る。）

寅之助　師匠。よく降るな。

文字若　おゝ、石澤さんですか。

（寅之助は頰かむりを取り、からだや足を拭きながら内に入る。文字若も引返して

入る。）

文字若　いくさが始まつたさうですね。

寅之助　到頭ぽん〳〵撃ち出したやうだ。（表をみかへる。）おい、師匠。ちよいと奥を貸してくれ。誰が來ても、おれはゐないと云ふのだぜ。いゝかえ。

（云ひすてゝ寅之助は早々奥に入る。文字若は不安らしく見送る。雨の音、小銃の音。向うより市中見廻りの兵二人出で、あたりを見まはしながら格子をあける。）

兵士甲　これ、これ。

文字若　はい、はい。（出る。）

兵士甲　今この家へ町人風の男が入り込みはしなかつたか。

文字若　いゝえ。

兵士乙　本當に來なかつたか。

文字若　だれも參りません。

兵士甲　（御神燈をみて。）おまへは遊藝の師匠か。

文字若　はい。常磐津の師匠をいたして居ります。

兵士乙　（甲と顏をみあはせる。）それではほかを探してみようか。

（兵士二人はそのまゝ下のかたへ立去る。文字若は門口から見送る。奥より寅之助は文字若の着物を羽織りて窺ひ出づ。）

寅之助　師匠、これだ。(片手で拜む眞似をする。)助かつた。助かつた。

文字若　あなた、どうしたんですよ。

寅之助　此頃のどさくさ紛れに、ちつと荒つぽい仕事を遣つたので、市中見まはりの奴等に眼を附けられて、油斷をしちやあゐられなくなつた。

文字若　ぢやあ、何か悪いことでもしたんですかえ。

寅之助　むゝ。あまり好い事もしなかつたのよ。町人の店を四五軒あらして、往來の奴を四五人おどかしたが、一昨日の晩は新町の酒屋へ押込んで、亭主と番頭を斬つたので、それから詮議が急にきびしくなつて來たらしい。もう斯うなつちあ仕方がねえ。いつそ上野へでも駈け込まうかと思つてゐると、到頭いくさが始まつてしまつた。

文字若　ねえ、石澤さん。金さんの兄弟は今頃どうしてゐるんでせうねえ。

寅之助　まさかに逃げも隱れもしめえ。今ごろは一生懸命に働いてゐるだらうよ。

文字若　さうでせうね。(又起つて表をみる。)金さんは劍術は出來ないんでせう。

寅之助　そりやあ侍のことだから、刀の持ち樣ぐらゐは知つてゐるが、あの通りの人間だから勿論上手の方ぢやあねえ。

文字若　劍術なんぞは下手でも構はない。おれは江戸つ子の魂で鬪ふのだと云つてゐましたが、いくら江戸つ子でも劍術が下手ぢや駄目でせうねえ。

寅之助　この節の戰ひは鐵砲といふものもあるから、劍術の出來るばかりが能でもねえが……。

その鐵砲の撃ち方もよくは知るめえな。

文字若　あなたは劍術が出來るんでせう。

寅之助　おれも出來る方ぢやあねえ。まあ金公に些と優しぐらゐのところだ。

文字若　ちつとぐらゐ優しでも、かういふ時には大變に力になるでせう。(考へながら寅之助のそばに戻る。)ねえ、石澤さん。あなた、後生ですからあたしを連れて行つてくださいな。

寅之助　連れて行つてくれ。(文字若の顔をぢつと見る。)よもや上野へ行く積りぢやあるめえな。

文字若　いゝえ、上野へ行くんですよ。さつきから見物に行く人があるぢやありませんか。

寅之助　物ずきの奴は出かけるやうだが、男は格別、女の行かれる場所ぢやあねえ。芝居の立廻りとは譯が違つて、眞劍勝負の斬合ひだ。おまけに鐵砲は飛んで來る。どんな傍杖を食はねえとも限らねえ。

文字若　そりやあ、あたしだつて知つてゐますけれど、なんだか行つて見たくつてならないんですよ。

寅之助　そんなにも行つて見てえか。情があるな。

文字若　情の有る無しは別として、どうもぢつとしてゐられないやうな氣がするんですよ。

寅之助　行つたところで、逢へやあしめえぜ。

文字若　大かた逢へないだらうとは思つてゐますけれど、なんだか其近所まで行つてみたいんですよ。

寅之助　おれも體の置き場に困つちやあゐるが……。（かんがへる。）軍をみかけて飛び込むのは、ちつと氣がねえな。

文字若　あなたは男のくせに弱いのねえ。

（奥よりおとくは藥茶碗を盆にのせて出づ。）

おとく　さあ、お藥が出來たよ。

文字若　どうも有難う。（茶碗をうけ取りて飲む。）

おとく　（寅之助に。）どうもおさう〳〵しいことでございますね。

（寅之助はだまつて考へてゐる。小銃の音又きこゆ。）

おとく　（門口に出る。）鐵砲の音がだん〳〵烈しくなるやうですね。こゝは大丈夫でせうか。

寅之助　こゝらは大丈夫だらうが……。（これも起つて表をのぞく。）おゝ、降る、降る。雨のふる方が彰義隊には都合がよからう。この軍が夜まで續くと、面白いことになるかも知れねえな。

おとく　どうして面白くなるのでございます。

寅之助　暗くなればどんな彌次馬が飛び出さねえとも限らねえ。さうなると、寄手もちつと難儀だらう。

おとく　さうでせうかねえ。

寅之助　（俄に下のかたを見る。）あ、又來やあがつた。おい、おつかあ。おれのゐる事をしやべつちやあいけねえぜ。

（寅之助は再び奥に隱れる。おとくはきよと〳〵してゐる。下のかたより以前の兵士二人が先に立ち、あとより更に二人附添ひに出づ。）

兵士甲　どうもこゝらへ逃げ込んだらしいが……。

兵士乙　もう一度、こゝの家を詮議してみようか。

兵士甲　遊藝の師匠のうちに隱れてゐることもあるまい。はて、どこへ行つたかな。

（四人はあたりを見まはしながら向うへ立去る。おとくと文字若は内より窺つてゐる。）

おとく　ねえ、あの人たちは石澤さんを探してゐるんぢやあないかね。

文字若　あれ、靜かにおしなさいよ。

（奥より寅之助は葭戸をほそ目にあけて窺ふ。）

文字若　（小聲で。）もう大丈夫ですよ。（あつちへ行つてしまつたと手眞似で知らせる。）

寅之助　（出る。）これぢやあいよ〳〵油斷は出來ねえ。おれも逃げ道を考へなければならねえな。

（寅之助は不安らしく表をのぞく。雨の音にまぢりて小銃の音いよ〳〵烈しく聞ゆ。）

これにて幕をおろし　すぐ再び幕をあける。）

二

おなじ日の午後。雨降りしきる。上のかたに不動堂。それにつゞいて御行の松の大樹、その幹には注連を張る。上のかたには上野の森近く、青葉がくれに火の手あがりて見ゆ。

（上野の僧二人と小坊主一人、あるひは荷を抱へ、或は經卷をかゝへて、素足に草鞋をはき、笠をかぶりて出づ。）

僧一　どう辛抱しようにも、あの火の粉ではとても堪らぬ。

僧二　吉祥閣が燒かれたので、それからそれへと火になつてしまつた。

小坊主　これからどこへ行くのでござります。

僧一　どこへ行くといふ的もないが、兎もかくも北の方角へ立退くとしよう。

僧二　われ〳〵は出家ぢや。誰に逢つても咎められることはあるまい。

僧一　（空を見る。）あいにく強く降ることぢやな。

（三人は急いで下のかたへ立去る。雨の音、小銃の音。上のかたより相馬半三郎はうしろ鉢卷、筒袖に撃劍の胴をつけて陣羽織をかさね、小袴、脚絆、草鞋にて、鎗切れの兵士二人と拔刀にて鬪ひながら出づ。半三郎は奮鬪し、兵士等は下のかたへ引いてゆくを、半三郎は追つてゆく。上のかたより相馬金次郎は手負の體にて散らし髪、麻のかたびらに小袴、脚絆、草鞋にて大小をさし、櫻の枝を杖にして出づ。小銃の音つゞけて聞ゆ。金次郎は杖に縋りてあゆみ來り、半三郎のあとを見送りながら、不動堂の前に來てたゝずむ。下のかたより半三郎は引返して出づ。）

半三郎　兄さん、歩かれませんか。

金次郎　どうも意氣地がねえ。

（半三郎は金次郎を介抱して、堂の縁に腰かけさせる。）

金次郎　半三郎。おれはもういけねえよ。

半三郎　氣の弱いことを云つてはいけません。大丈夫です、大丈夫です。

金次郎　氣休めをいふな。なにしろ肩と股とへ二發も彈を食らつたのだから遣り切れねえ。

半三郎　なに、二發や三發の彈に撃たれても、急所さへ除けてゐれば大丈夫です。氣を落してはいけません。

金次郎　今の奴等はどうした。

半三郎　ひとりは斬り倒しましたが、一人は逃がしてしまひました。

金次郎　相手は二人、お前はひとり、加勢をして遣らうにも、おれはこの通りだ。どうなることかと案じてゐたら、ひとりを斬り倒して、ひとりを追拂つてしまつた。おまへはやつぱ

り強いな。彰義隊もおまへのやうな人間ばかりだつたら、もう少し持ち堪へたかも知れねえ。

半三郎　なにしろ敵は大勢ですから、殘念ながら何うにもなりません。せめて夜まで持ち堪へられたら、加勢が出て來るかも知れなかつたのですが……。（上のかたを見る。）兄さん、あの通り燃えてゐます。

金次郎　敵の奴め、むやみに大砲なんぞを撃ちやがつて、卑怯な奴等だ。

半三郎　火の粉と烟をかぶらなければ、もう少し防げたのですが……。まつたく殘念です。

金次郎　ほんたうだ。手前たちの方が大勢の上に、燒撃のやうな目に逢はせやあがる。（上のかたを見返りて罵る。）それで勝つたつて何の手柄になるものか。馬鹿野郎め。

半三郎　併しこんな所にぐづ〳〵してはゐられません。早く行きませう。

金次郎　こゝはどこだ。

半三郎　こゝは根岸……。御行の松です。

金次郎　なるほど御行の松か。（松をみる。）眼が眩んでゐるとみえて、どこだか見當が付かなかつた。（考へる。）それぢやあ丁度いゝ。おれはこゝで腹を切るから、おまへは早く逃げてしまへ。

半三郎　腹を切る……。それは飛んでもないことです。逃げられるだけ一緒に逃げませう。上野が負けても、力を落すことはありません。越後か出羽奥州はみんな德川方ですから、そこらまで落ちて行つて、もう一度戰ひませう。

金次郎　それだからお前は早く落ちろといふのだ。（苦しい息をつく。）おれはもういけねえ。この松の下で腹を切るから介錯してくれ。

半三郎　そんな弱いことではいけません。さあ、行きませう。おいでなさい。

（半三郎は介抱して連れて行かうとするのを、金次郎拂ひ退ける。）

金次郎　いや、いけねえ。權現樣は逃げるが勝だと敎へたさうだが、逃げられねえものを逃げたつて仕樣がねえ。江戸つ子は思ひ切りが肝腎だ。おれはもう歩かれねえ、逃げられねえ。さあ、こゝですつぱりと遣つてくれ。

（金次郎は大小を取りて緣に置き、肌をくつろげると、胸から腹へかけて經文をまいてゐる。）

半三郎　（困つて。）もし、兄さん、死ぬのはいつでも死なれますから、もう少し我慢して行つてください。

金次郎　いやだ、いやだ。ぐづ〳〵してゐて敵にでも生捕られてみろ。どんな恥をかくか判るものか。

半三郎　いえ、わたしが附いてゐるから大丈夫です。

金次郎　いくらお前が强がつても、敵が大勢なら仕樣があるめえ。それ、見ろ。今さら未練らしいことを云はねえで、素直におれのいふことを肯け。（脇指に手をかける。）

半三郎　まあ、兄さん……。（脇指に取付く。）
金次郎　この野郎。強情に邪魔をすると承知しねえぞ。（無理に半三郎を突き放し、櫻の枝をふりあげて無暗に打つ。）もう遣切れねえといふのに、判らねえか。いつまでおれを苦しませて置くのだ。
半三郎　（決心して枝にすがる。）では、もう仕方がありません。こゝで立派に立腹をなさいまし。わたしが御介錯をいたします。
金次郎　さうか。（うなづきながら緣にぐつたりとなるを、半三郎は介抱する。）なあ、半三郎。おれも御行の松の下で腹を切りやあ立派なものだ。
半三郎　（涙ぐんで。）左樣でございます。
金次郎　（肌をくつろげる。）みんなの眞似をして、そこらにあるお經をまき付けて來たが、かういふ時に役に立つた。これを取つてくれ。

（半三郎は手傳つて、金次郎の腹にまき付けたる經文をほどく。雨の音、小銃の音。向うより石澤寅之助は米俵をかぶり、文字若は赤合羽をきて手拭をかぶり、竹の子笠をかざして走り出づ。）

寅之助　もうこゝらより先へは行かれさうもねえ。山はあの通り燃えてゐるぜ。
文字若　もう行かれませんかねえ。

（二人はうろ／＼しながら上のかたへ行きかゝりて、文字若は不圖みかへる。）

文字若　あら、金さんが……。金さん、金さん。
寅之助　やあ、居た、居た。

（二人はよろこんで駈けよる。）

金次郎　おゝ、師匠と石澤……。どうして來たのだ。
文字若　あんまり心配だから、いくさの樣子を見に來たんですよ。
半三郎　よくこゝらまで來られましたね。
寅之助　半分は夢中で、どこをどう廻つて來たか自分にもわからねえが、なにしろこゝでめぐり合つたのは有難てえ。師匠、折角出て來た甲斐があつたぜ。
文字若　ほんたうに無事でようござんしたねえ。
金次郎　なに、無事なものか。おれはもう定九郎だ。
文字若　定九郎……。
金次郎　二つ玉を食らつて半死半生だよ。
半三郎　兄はもう歩かれないから、どうしてもこゝで腹を切るといふのです。
文字若　腹を切る……。まあ、どうしたらよからうねえ。
寅之助　むゝ。（額をしかめながら訊く。）もういけねえか。
金次郎　いけねえ、いけねえ。神田の質屋を嚇した時とは譯が違つて、今度こそは本當に切腹だ。

寅之助　どうしても切腹か。(半三郎に。) おめえは死ぬのぢやあるめえな。

半三郎　わたしは兄の死骸を片附けて、これから會津か越後へ脫走する積りです。

寅之助　おれも江戸にやゐられねえ體になつてしまつたから、それぢやあお前と一緒に行かうか。

金次郎　みんな行け、行け。會津でも越後でも構はねえ。どこへでも行つて、おれの代りに威勢よく遣つてくれ。

文字若　おまへさんも一緒に行けばいゝぢやありませんか。

金次郎　それが行かれねえのだから、仕方がねえ。蹴合に負けた軍鶏ぢやあるめいし、いつまでじたばたしてゐられるものか。相馬の金さんはもうこれでおさらばだ。(脇指をぬいて經文をまきつける。) おい、師匠。今までのよしみだ。今年の新盆には迎ひ火を焚いてくれ。

文字若　情ないことになつたねえ。(泣く。)

半三郎　石澤さん。兄はわたしに介錯しろといふのですが、丁度あなたがお出でになりましたから……。

寅之助　おれに介錯をしろといふのか。(少し躊躇して。) まあ、仕方がねえ。これも友達の役だ。(金次郎の刀を取る。)

金次郎　おめえが介錯してくれるか。おれは腹の切り様が下手だらうから、そつちで手際好くぽんと遣つてくれ。

寅之助　手際好くは些とむづかしいが、まあ一世一代の積りで遣つてみようよ。

金次郎　おれも一世一代だ。しつかり頼むぜ。

(金次郎は脇指を腹に突立てる。寅之助は刀をぬいてうしろへ廻る。半三郎と文字若は手をあはせる。雨の音、小銃の音。)

——幕——

崇禪寺馬場（四幕）

昭和十三年三月作。

昭和十四年十月。東京劇場初演。

初演當時の重なる配役——生田傳八郎（左團次）遠藤治左衞門（猿之助）遠藤喜八郎（莚升）遠藤惣左衞門（段四郎）矢崎甚五郎（壽美藏）住職良然（訥子）つぶらの銀次（勘彌）母おいの（仁左衞門）矢崎の娘お菊（訥升）お玉（芝鶴）

登場人物——生田傳八郎。遠藤治左衞門。遠藤喜八郎。遠藤惣左衞門。矢崎甚五郎。猪飼孫七。山本大吉。杉野勝彌。中川五郎次。福田新太郎。浅井伴吾。米津三平。大原軍藏。僧良然。納所良啓。中間佐助。中間千太。つぶらの銀次。堺の岩松。寺男勘作。村の男彌十。遠藤の母おいの。矢崎の娘お菊。近江屋の娘お玉。揚屋の娘おみよ。乳母お六。ほかに崇禪寺の僧。茶店の娘。生田家の女中。參詣の男女。小兒。村の男女。小兒。旅人。旅僧など。

第一幕

一

正德五年五月なかばの宵。

大和國、郡山の城下。常稱寺の横手。正面は練塀にて、下のかたへ折りまはしたる塀の内には竹藪おひ茂る。塀の外には小川が流れ、下のかたには田畑が遠く見ゆ。雨あがりの水の音。蛙の聲きこゆ。

（上のかたより寺男勘作は番傘をさし、貧乏德利をさげて出づ。下のかたより村の男彌十は簑を着て手拭をかぶり、提灯を持ちて出づ。）

彌十　おゝ、勘作どんぢやあねえか。

勘作　おゝ、彌十か。どこへ行く。

彌十　これからおめえのお寺へ行くのだ。隣のお仙婆さんが頓死したので、和尚樣を迎ひに來たのだ。

勘作　お仙婆さんが死んだ……。ふだんは丈夫であつたのに、やれ、やれ、氣の毒な。人間の壽命はわからねえものだな。

彌十　まつたく判らねえものだよ。

勘作　夕方から御家中の生田傳八郎殿が見えて、お住持と碁を打つてござるが、それでは直ぐに知らせて來よう。

彌十　おめえは何處へか行くのぢやあねえか。

勘作　（德利をみせる。）實は寢酒をかひに行くのだが、そんな事はどうでもいゝ。おれもお仙婆さんとは久しい馴染だから、お住持さまのお供をして行くとしよう。

彌十　ぢやあ、賴んだぜ。

勘作　承知だ、承知だ。

（彌十は引返して去る。）

勘作　（空をみる。）おゝ、好い鹽梅に雨も止んで、薄月が出さうだ。

（勘作は傘をすぼめて引返さうとする時、上のかたより藩中の若侍遠藤喜八郎、廿

歲。その弟惣左衞門、十七歲。いづれも夜釣に出でたる體にて簑笠、素足に草鞋をはき、釣竿と魚籠を持ちて出づ。勘作は暗いので誰とも氣が付かず、そのまゝ摺違ひて上のかたへ立去る。蛙の聲。薄月のひかり。喜八郎は舞臺のまん中に立ちどまりて見かへる。）

喜八郎　惣左。何をぐづ／＼してゐるのだ。早く步かないか。

（惣左衞門は不興らしく默つてゐる。）

喜八郎　（笑ふ。）はゝ、今夜は釣れないので機嫌が惡いな。

惣左衞　兄さんは鯉一匹と大鯰二匹……。それだのにおれは……。今夜にかぎつて一匹も釣れないのが殘念だ。

喜八郎　おなじ場所に竿をおろしても、釣れる時もあれば釣れない時もある。そこに又、釣の面白味もあるのだ。

惣左衞　いや、面白くない。兄さんに負けたのが口惜しい。おれはもう一度引返して釣つて來る。

喜八郎　（やはり笑ひながら。）よせ、よせ。釣は今夜に限つたことでは無い。又あした出直して行け。

惣左衞　忌だ、忌だ。一匹も釣らずに歸るのは殘念だ。

喜八郎　おまへは相變らず强情だな。

惣左衞　兄さんは早く歸つて自慢をするがいゝ。おれは夜の明けるまでも釣つてゐるのだ。

喜八郎　どうしても云ふことを肯かないのか。

惣左衞　(意地になつて。) 肯かない、肯かない。

喜八郎　(これも少しくむつとして。) それがお前の悪い癖だ。そんなら何うとも勝手にしろ。

(云ひ捨てゝ喜八郎は下のかたへ足早に立去る。月はいよ〳〵明るくなる。)

惣左衞　なんの、兄きに負けて堪るものか。もつと大きい奴を釣つて歸つて、みんなをびつくりさせて遣るのだ。

(惣左衞門は上のかたへ引返さうとする時、上のかたより生田傳八郎、廿八歳。羽織袴にて足駄をはき、傘を持ちて出づ。)

傳八郎　おゝ、遠藤の弟……。又こゝで逢つたな。さつきからは一時あまり……。どうだ。よつぽど釣れたか。

(惣左衞門はだまつてゐる。)

傳八郎　兄きはどうした。

惣左衞　(素氣なく。) 兄きは先へ歸つた。

傳八郎　(すゝみ寄る。) 雨あがりで鯉や鯰がしつかり釣れたらう。籠を見せろ。

惣左衞　見せるほどの獲物も無い。

傳八郎　(笑ひながら。) 意地の悪い奴だ隠すなよ。(魚籠に手をかけようとする。)

惣左衞　(じれて。) えゝ、見せるほどの物はないと云ふのに……。(魚籠を隠さうとする。)

傳八郎　まあ、見せろよ。(無理に魚籠を取つて。) やあ、馬鹿に輕い。一匹も釣れなかつたのか。はゝゝゝゝ。

惣左衞　兄きは鯉一匹と大鯰二匹を釣つた。

傳八郎　それでお前は一匹も釣れなかつたのか。はゝゝゝゝ。

惣左衞　(赫となつて。) 何がをかしい。なにを笑ふのだ。

傳八郎　い、むきになつて怒るなよ。お前があまり下手だから、つい笑ひたくなつたのだ。(魚籠を戻す。)

惣左衞　(魚籠を投げ捨てる。) 笑ひたければ勝手に笑へ。おれは今夜かぎりで釣をやめる。

(惣左衞門は生れつきの疳癪が募りて、釣竿を折つて投げ捨てる。傳八郎はやゝ呆れたやうに眺めてゐる。上のかたより常稱寺の住職良然出づ。そのあとより寺男勘作は灯を入れぬ提灯を持ちて出で、この體をみて立ちどまる。)

傳八郎　(しづかに。) 惣左。お前はおれへの面當てに、その釣竿を折つたのか。

惣左衞　おれは侍だ。釣などは下手でも上手でも構はない。(刀の柄をたゝく。) これさへ確に出來ればいゝのだ。

傳八郎　(やはり笑ひながら。) それは勿論だ。まつたく釣などは上手でも下手でも構はない。おれの笑つたのが悪ければ勘辨してくれ。

惣左衛　あやまるか。

傳八郎　むゝ、あやまるから勘辨しろ、勘辨しろ。

惣左衛　これからは氣をつけろ。

（惣左衛門は矢庭に傳八郎の傘を引つたくりて、その腰のあたりを一つ打つ、傘を地に投げ捨てる。良然も勘作もおどろい眺めてゐる。）

傳八郎　えゝ、なにをする。（一旦は屹となつたが、また思ひ直して。）これ、惣左。お前はふだんから我儘育ちの短氣者で、何かに付けて兄き達を困らせてゐるさうだが、悪あがきも好い加減にしなければならないぞ。若いと云つてももう十七だ。いつまでも子供だと思つてゐるな。

惣左衛　子供でなければどうしろと云ふのだ。

傳八郎　子供でなければ禮儀を知れ。傳八郎に對して今の仕業は何といふことだ。お前だから我慢するが、相手によつては唯は置かないぞ。

惣左衛　唯は置かないとは、どうするのだ。

傳八郎　（少し聲を強めて。）知れたこと。この場で斬つてしまふのだ。

惣左衛　では、おれも斬つてくれ。（詰めよる。）

傳八郎　馬鹿……。（惣左衛門を突き放す。）誰がお前を斬ると云つた。

良　然　（見かねて進み出る。）これ、これ、遠藤の弟御。先刻から聽いてゐるのに、どうもお前がおだやかで無いやうでござるぞ。生田どのは年も上、身分も上ぢや。それに對して喧嘩腰の挨拶はお愼みなされ。

惣左衛　（住職にも咎められて、惣左衛門の反抗心はいよ／＼募る。）

いや、愼むまい。年が上でも、身分が上でも、これがおとなしく濟まされるか。（簑をぬぐ。）さあ、斬れるなら斬つてみろ。今もいふ通り、釣は下手でも此の腕には覺えがあるぞ。（再び刀の柄に手をかける。）

傳八郎　（あざ笑ふ。）困つた奴だな。惣左、おまへは亂心したのか。

惣左衛　なにが亂心だ。武士に對して氣違ひ呼ばはりは、いよ／＼堪忍ならないぞ。さあ、傳八郎、拔け。

傳八郎　おまへを相手に刀を拔かれるか。

惣左衛　拔かれぬとは……。おのれ卑怯だぞ。

（惣左衛門は刀をぬいて不意に斬付ける。傳八郎は身をかはして飛び退く。）

傳八郎　もう赦さぬぞ。覺悟しろ。（足駄をぬぐ。）

惣左衛　なんの……。

（惣左衛門は又斬つてかゝる。傳八郎も拔き合せて鬪ひ、忽ちに相手を斬倒す。）

勘　作　やあ、惣左さまは……。飛んだことになりましたな。

良　然　（嘆息して。）惣左どのは我儘者、短氣者。瑣細のことを云ひ募つて、果はわが身をほろ

ぼすとは……。心柄とはいひながらお氣の毒な事ぢや。（珠數を爪繰る。）

（このあひだに、傳八郎は倒れたる死骸を一應あらため、更に血刀をぬぐひて鞘に納め、足袋をぬいで足駄をはき、落ちたる傘を拾ひ取る。）

傳八郎 （同じく嘆息して。）お住持の云はるゝ通り、女親に甘やかして育てられ、兄弟も持餘すやうな我儘者、それを承知してゐながらも、身に振りかゝる火の粉は拂はねばならず、狂人走つて不狂人倶に走るといふ世の譬へを其のまゝに、我ながら大人氣ない此の始末……。（良然に向つて頭を下げる。）無分別者とお笑ひ下され。

良然 いかに若年とは申しながら、惣左どのが重々の無禮狼藉、お手前でなくても堪忍の出來ぬ所でござる。まして相手が拔いてかゝつた以上、こちらも拔き合はせるは當然のことで、理非は明白。手前が證人に相立ちますれば、ありのまゝに此の次第をお屆けなされ。

傳八郎 お心添へ有難うござる。（考へる。）この次第を上へ屆け出で、たとひ惣左が非分に落ちて、拙者にお咎めが無いにしても、彼には治左衞門といひ、喜八郎といふ兄がござる。この兩人が一家中の手前、世間の手前、弟を討つたる傳八郎と肩をならべて、無事に御奉公が出來ませうか。理非を問はずに傳八郎を恐らく仇と狙ふでござらう。

良然 （考へる。）さあ、そんな事がないとも限りませぬな。

傳八郎 治左衞門喜八郎の兄弟が若し傳八郎を討取りましたら、非分の弟の肩を持つて逆恨みの仇討は、上を憚らぬ致し方とあつて、遠藤の家はお取潰しに相成りませう。若しまた兄弟が運拙く、返り討とならば勿論のことで、勝つたにせよ、負くるにせよ、いづれにしても遠藤の一家は所詮滅亡の外はござらぬ。小身ながら遠藤は由緒ある家筋、治左衞門兄弟も心掛けのよい侍、よしない弟を持つた爲に、家をほろぼし、身をあやまるは、餘りと申せば氣の毒でござる。

良然 成程それも御もつともでござるが……。（又かんがへながら死骸を見る。）もはや介抱はとゞきませぬか。

傳八郎 （頭をふる。）一刀なれども急所の深手、已に息は絶え果てました。就ては甚だ御迷惑ながらあとの始末はよろしくお願ひ申す。

良然 して、お手前は……。どうなさるな。

傳八郎 拙者は他國へ立退きます。相手がなければ仇討の術もなく、治左衞門も無事、遠藤の家も無事、すべてが隱便に相濟むでござらう。卑怯に身を隱すと思召すな。

良然 それにしても百八十石のお家を捨てゝ、このまゝ御浪人なさるのは、いかにも殘念に存じられますが……。

傳八郎 それも時の不祥で是非がござらぬ。拙者は昨年妻をうしなひ、唯今は獨り身の心安さ、わづかの家財は奉公人どもに分配して、今夜のうちに立退く所存。お住持とも久しいお馴染でござつたが、再びお目にかゝれるやら……。なにとぞお身を御大切に、いつまで

も堅固にお暮らしなされ。

良　然　お手前もどうぞお達者で……。なにかの傳手もございましたら、御無事のおたよりをお聽かせ下され。

傳八郎　承知いたした。勘作とも既うお別れだぞ。

勘　作　お名殘り惜しうございます。

（このあひだに、月は再び暗く、蛙の聲、薄く雨の音。）

良　然　おゝ、又ふり出したか。

傳八郎　降りみ降らずみは此頃の習、駈落者にはこの雨が却つて幸ひかも知れませぬ。

（傳八郎は傘をひらく。下のかたより傳八郎の中間佐助は赤合羽を着て笠をかぶり、提灯を持ちて出づ。）

佐　助　おゝ、旦那様……。

傳八郎　迎ひに來たのか。

佐　助　雨が又降つてまゐりました。（云ひながら惣左衞門の死骸を見つける。）や、こゝに人が……。（提灯の火に照らし見る。）おゝ、これは遠藤の……。

傳八郎　むゝ。惣左衞門だ。仔細はあとで話して聞かせる。まあ、默つて來い。

佐　助　はい。

（傳八郎は傘をさして下のかたへ行く。佐助は不安さうに續いてゆく。良然と勘作は名殘り惜げに見送る。蛙の聲。雨の音。）

——幕——

二

再び幕をあけると、もとの常稱寺の横手。

第一場より六日後の午前。けふは晴れて夏の日が輝いてゐる。寺内には木魚の音。蟬の聲。

（生田傳八郎に討たれる遠藤惣左衞門の初七日にて、長兄の治左衞門、廿四歳。次兄の喜八郎と共に、この常稱寺へ墓參に來りしと知るべく、今やその歸り道にて、上のかたより話しながら歩み出づ。兄弟ともに𧘕𧘔を着けてゐる。）

治左衞門　けふも住職から重ねて當夜の始末を話して聞かされたが、どう考へても惣左めが非分に決まつてゐる。一方が非分で討たれ、その相手が國遠したとあつては、今さら致し方もないのだ。

喜八郎　惣左はあの通りの我儘者、わたしと一緒に釣に出ながら、あいにく一匹の獲物もなく、むやみに苛々してゐる處へ、又あいにくに傳八郎が來合せたのだ……。

治左衞門　さうだ。（うなづく。）傳八郎は相當の分別もある侍、子供あがりの惣左などを相手にして、喧嘩口論をする男ではないが、あいにく其處へ來合せたのが不運、惣左めが例の八

つ中りで、遠慮も無しに喰つてかゝつたに相違ない。傳八郎に取つては全く不時の災難で、それがために身を隱すやうにもなつたかと思へば、おれは仇として恨むどころか、内心では氣の毒にも思つてゐる位だ。

喜八郎　家中の人たちも不斷から惣左の我儘を知つてゐるので、今度の一件に就ても惣左をあはれむ者はなく、所詮は自業自得だと蔭では噂してゐるやうでございます。

治左衛　それはおれも聞いてゐる。母者の前では云はれぬ事だが、惣左の最期は自業自得と諦めるほかはあるまいよ。

喜八郎　弟を討たれて、なんだか殘念のやうでもござるが……。（考へる。）

治左衛　恨むまじき人を恨んでは、却つて武士の道にはづれる。かうなつたら諦めが肝腎だぞ。（云ひながら上のかたを見かへる。）おゝ、母者がまゐられた。

（二人は俄に口をつぐむ。上のかたより遠藤兄弟の母おいの、四十二三歳。これも墓參に來りし體にて、手に珠數をかけて出づ。おいのは遠藤家の後妻にて、治左衛門と喜八郎には繼母、末子惣左衛門の實母と知るべく、最愛のわが子をうしなひて頗るヒステリックになつてゐる。）

おいの　私ひとりを置去りにして、おまへ方は大層早いことですね。

治左衛　こゝでお待ち申して居りました。

おいの　待つてゐるのは迷惑であらう。早く屋敷へ戻ればよいに……。けふは惣左の初七日ではあるが、おまへ方は義理一遍の墓まゐりで、逃げるやうに歸つて仕舞へばよいのです。

治左衛　（遮るやうに。）母上……。

おいの　（耳にもかけず。）こゝで非業の最期を遂げた惣左に、心から泣いてやるのは此の母だけです。親子といふ名は附いてゐても、おまへ方ふたりは先妻の子で、後添ひのわたしの腹から生れたのは惣左ひとり……。

喜八郎　母上……。

おいの　（やはり耳にもかけず。）腹ちがひの兄弟なれば、不斷から惣左を他人扱ひにしてゐた事は、わたしもよく知つてゐます。その惣左が斬られても、おまへ方に涙は無い筈……。

治左衛　（持體して。）母上、それはお前さまの僻みと申すものでござります。たとひ腹違ひであらうとも、惣左もわたくし共も同じ父上の血を分けた兄弟、なんで他人扱ひなどに致しませう。惣左が可愛いと思へばこそ、大抵の我儘も今まで見逃してゐたのでござります。

おいの　（いよ〳〵激しく。）それ、その通り、二口目には惣左を我儘といふではないか。おまへ達が世間へ出て、あること無いこと云ひ觸らせばこそ、遠藤惣左衛門は我儘者とか短氣者とか、兎角によくない噂も立つ。今度の一件が惣左の非分と決められたも、つまりはお前方の仕業です。

喜八郎　（いよ〳〵迷惑して。）左樣に申されてはわたくし共は甚だ迷惑いたします。たとひ世間

で如何やうの噂を立てませうとも、わたくし共は惣左をかばひこそすれ……。

おいの　(疊みかけて。)いや、違ひます、違ひます。現にあの晩も、おまへが惣左を一緒に連れて歸れば、何事もなく濟んだものを、途中で捨てゝ歸つたればこそ、あんな事にもなつたのではないか。

喜八郎　あのとき無理にも連れ歸ればよかつたと、わたくしも今では悔んで居ります。

おいの　悔んでゐると云ふからは、自分の罪を知つてゐるのであらうが……。

治左衞　(なだめるやうに。)それは喜八郎の不行屆きで、わたくしも共々にお詫び申上げます。但しその不行屆きは當夜かぎりの事で、不斷から惣左に對して分け隔てなどを致したこともなく、まして世間へ出て有ること無いこと云ひ觸らすなどとは……。

(云ひ譯をしながら進み寄る治左衞門を、おいのは珠數にて拂ひ退ける。)

おいの　えゝ、もう聞かぬ、聞きませぬ。繼子いぢめと云はれるが辛らさに、後添ひに來てから十八年、おまへ方兄弟を生みの子のやうに育てゝ遣つた、そのなさけを仇で返されるとは……。(聲をあげて泣く。)

(治左衞門兄弟は持餘して、たがひに顏をみあはせてゐる。上のかたより矢崎甚五郞、四十歲にて剛氣の男、やはり社袴姿にて出づ。甚五郞はおいのの弟にて、實家の相續者なり。そのあとより甚五郞の娘お菊、十七歲、おなじく墓參の姿にて附添ひ出づ。)

甚五郞　(この體を見咎めて。)姉上……。往來でその體たらくは見苦しうござるぞ。(治左衞門等に。)お身達もなぜ安閑と眺めてゐるのだ。よその見る眼も恥かしいではないか。

治左衞　先刻から色々になだめて居りますが……。母上が頻りにおむづかりなさるので、わたくし共も困つてゐるでござります。

甚五郞　(姉をみかへりて嘆息するやうに。)いや、それも無理はないか。わが子を他人に討たれて、唯そのまゝの殺され損では……。(意味ありげに。)傳八郞は運のいゝ男だな。

治左衞　(聞き咎めて。)運のいゝ男とおつしやるのは……。

甚五郞　(兄弟を睨むやうに見て。)運のいゝ男ではあるまいか。遠藤惣左衞門といふ侍一人を殺して、誰もそのかたきを討つ者がないのだ。

治左衞　併し今度の一件については、已に上のお捌きがござりました。

甚五郞　(あざ笑ふ。)惣左衞門は非分で殺され損、傳八郞は逐電した以上お構ひなしと云ふのか。おれは上のお捌きを彼れ是れ云ふのではない。

喜八郞　(進み出づ。)叔父上。では、我々に弟のかたき討をしろと仰しやりますか。

甚五郞　(罵るやうに。)そんなことを他人に相談する奴があるか。めい〳〵の料簡次第だ。

お　菊　(なだめるやうに。)もし、お父樣……。

甚五郞　むゝ、行かう。(おいのの袖をひく。)さあ、おまへもお出でなされ。

(甚五郞は無理におおいのを促して、下のかたへ立去る。お菊は氣の毒さうに治左衞

門兄弟を見返りつゝ、これも父につゞいて去る。兄弟は無言にて、繼母と叔父のうしろ姿を見送る。)

喜八郎　兄上、困つたものでござりますな。

治左衞　叔父上は平生から意地强いお人だ。かういふ時には理非を問はず、かたき討をしろと勵ますのであらうが……。これはよく考へなければならぬ事だ。

喜八郎　叔父上ばかりでなく、母者がけふ此頃の恨みも愚痴も、我々兄弟がかたき討を怠つてゐる爲でござりませう。

治左衞　おれもさう見てゐる。生みの我子を殺された恨みと、腹ちがひの我々兄弟に對する僻みと、それが一つになつて此頃の恨み辛らみだ。併し喜八郎。一旦お捌きが濟んだ後に、我々がかたき討を願ひ出ても、恐らくお取上げには相成るまい。達つて望みを遂げようとすれば、長のお暇を願ふの外はないが、さうなれば數代つゞいた遠藤の家は潰れる。もちろん時と場合にとつては、家の潰れるのも是非ないが、第一にこの治左衞門は傳八郎をかたきと恨む心が無い。さつきも云ふ通り、おれは却つて氣の毒に思つてゐる位だから、その傳八郎をさがし出して、かたき討の勝負をする氣にはなれないが、お前はどうだ。

喜八郎　さあ。(かんがへる。)では、いつそ私ひとりが仇討に出ませうか。私ならば部屋住みゆゑ、兄上に御迷惑はかかりますまい。

治左衞　いや、傳八郎はなか／＼手剛い。かたき討をすると決まれば、迂濶にお前ひとりを出しては遣られないが……。(これも考へる。)まあ、落付いて考へてみよう。

喜八郎　はい。(まだ考へてゐる。)

治左衞　お前もやつぱり仇討がしたいか。

喜八郎　さあ。

治左衞　こゝでいつまで論じてゐても仕樣がない。兎もかくも屋敷へ歸らう。

(治左衞門は先に立ち、喜八郎は思案に迷ひながら續いて行きかゝる時、下のかたより第一場の彌十、ほかに村の男女、子供など五六人が珠數、線香、樒を持ちて出で來り、治左衞門兄弟に默禮しながら上のかたへ去る。兄弟は摺れ違ひて下のかたへ去る。木魚の音。)

——幕——

第二幕

一

第一幕の翌年、十一月三日の午頃。

大坂の天滿。天滿宮の裏門外にて、上のかたへ寄せて家根附きの茶店。軒には

暖簾をかけ、茶釜その他の茶道具あり。店の内にも長床几を置き、店の外にも長床几二脚をならべてあり。下のかたは町家つゞきの遠見。

（參り下向の男、女、子供など五六人、思ひ〳〵のこしらへにて左右より出で、摺れちがひて行き過ぎる。觀世物の囃子の音など賑かに聞ゆ。茶店の娘二人が店さきに立つてゐる。）

娘甲　けふは御緣日でもないのに、天氣のよいせゐか、御參詣がなか〳〵多いやうぢやな。

娘乙　だん〳〵霜枯れになつて來るから、なるたけお天氣を續かせたいものぢや。（空を見る。）よう晴れたなあ。

娘甲　ほんに好う晴れたなあ。此頃にはめづらしい。

（甲乙は空をながめてゐる。下のかたより遠藤治左衞門は旅姿、あみ笠を深くして出づ。）

治左衞　（娘に。）こゝが天滿の天神だな。

娘甲　はい、はい。左樣でござります。

娘乙　どうぞお休み下さりませ。

治左衞　むゝ。（笠をかぶりしまゝにて、店さきの床几に腰をかける。）

（娘乙は店に入りて、茶の支度をする。上のかたより下向の男女二三人通り過ぎる。）

娘甲　あなたも御參詣でござりますか。

治左衞　初めて浪華見物にまゐつたので、取りあへず天滿宮に參詣する積りだ。京の祇園會、浪華の天滿祭と、諸國に聞え渡つてゐるだけに、平日も隨分繁昌のやうだな。（耳をかたむける。）あの鳴物は觀世物などの囃子か。

娘甲　はい。こゝは裏門で、御門の内には觀世物やら淨瑠璃やら、輕口噺やら、色々の店が賑かに列んで居ります。

治左衞　ほう、さうか。拙者のやうな田舍者には、見るもの聞くものが珍しい。（笑つてゐる。）

娘乙　（茶碗を盆にのせて出づ。）どうぞ召上つて下さりませ。けふはお天氣も好く、風もなく、まことに結構なお日和でござります。

治左衞　大坂の冬は寒いと聞いてゐたが、日中は案外に暖いな。

（治左衞門は茶をのんでゐる。上のかたより新町の揚屋の娘おみよ、十七八歲、天神參りの姿にて逃げ來り、店の前にてつまづきて倒れる。あとより堺の岩松、廿三四歲のならず者、少しく酒に醉ひたる體にて追つて出で、おみよを押へる。又そのあとより圓の銀次、三十四五歲のならず者、懷ろ手をして出ず。）

銀次　その女を逃しちやあいけねえぞ。

岩松　むゝ。しつかりと捉めえた。

銀次　（進みよる。）やい。貴樣はよくもおれの巾着を抜きやあがつたな。

（銀次は我が腰巾着を取りて、おみよの袂に押込む。おみよの乳母お六が追つて出

づ。）

お六　もし、おまへさん。内の娘はんをどうするのぢや。

銀次　どうするものか。この女は顏に似合はねえ太え奴だ。そこの裏門で、おれがうつかり淨瑠璃を聽いてゐる隙を狙つて、腰巾着を拔きやあがつた。

おみよ　なんでわたしがそんな事を……。

お六　こちらは新町の揚屋の娘はん、おまへ達の腰巾着を拔いたの何のと、途方もない云ひがかりをさつしやるな。

銀次　なにが云ひがかりだ。論より證據で、女の袂におれの巾着がこの通り這入つてゐるのだ。（巾着を出してみせる。）

おみよ　いゝえ、それは今、お前がわざと押込んだのぢや。

娘甲　ほんに見す〳〵知れた云ひがかり……。

岩松　えゝ、やかましい。引込んでゐろ。

（呶鳴り付けられて、娘甲乙はあとへ退る。）

お六　それでお前はどうしようと云ふのぢや。

銀次　どうするものか。云はずと知れた巾着切りだ。女でも容赦は出來ねえ。召連れ訴へをするからさう思へ。

岩松　さうだ、さうだ。このごろ天滿に女の巾着切りが出るといふのは、こいつ等の仕業に相違ねえ。

お六　出る所へ出てお捌きを願へば、白い黒いは直ぐに判るものゝ、假りにもそんな噂を立てられてはこちらが迷惑、そんな云ひがかりは止して下され。

銀次　まだ云ひがかりだと云やあがるのか。かうなりやあ猶さら料簡はならねえ。さあ、どいつも來やあがれ。

（銀次はおみよを引立て、岩松はお六を引立てる。）

おみよ　あれ、堪忍して……。

お六　お前達はまあ、そんな無法なことを……。

岩松　えゝ、泣ッ面をしやあがるな。貴樣も相摺りだらう。一緒に來い。

（銀次等は無理に二人を引立てようとする。二人は行くまいと爭ふ。茶店の娘もはら〳〵してゐる。治左衞門は見かねて進み出づ。）

治左衞　これ、これ、もう少しおだやかに掛合ひをしたら何うだ。女たちを捉へて、あまりに手暴い事をするな。

銀次　（治左衞門をぢろ〳〵視て田舍侍と侮る。）これがおだやかに出來るものか。お前さんもさつきから見てゐたらうが、女でこそあれ、こいつ等はみんな巾着切りだ。

治左衞　たとひ巾着切りであらうとも、取られた物を取返したら、勘辨して遣るがよいではないか。（おみよ等を見る。）第一、この女たちの風體が巾着切りなどを働く者とも見えな

い。大かた何かの間違ひであらう。

銀次　（せゝら笑ふ。）おまへさんのお國ぢやあ、身なりで人間の善悪が判るか知れねえが、繁華の土地ぢやあさうは行かねえ。立派な身なりをして綺麗な顔をして、それで悪い事をする奴が澤山ゐるのだ。おまへさんも油斷して、懷ろの物でも取られねえやうに用心おしなせえ。なにしろ、そつちに係り合ひはねえことだから、默つて引込んでゐておくんなせえ。

治左衞　もちろん係り合ひはないことだが、この女たちが氣の毒だから、見かねて拙者があつかひに出たのだ。

銀次　なにが氣の毒だ。それぢやあお前さんは巾着切りの加勢に出て來なすつたのか。

治左衞　加勢ではない、あつかひに出たと云つてゐるではないか。

銀次　（又笑ふ。）あつかひならば、あつかひのやうに口を利いて貰ひてえね。

治左衞　どういふ風に口を利けといふのだ。

銀次　悪いことをした奴を赦してやるには、内濟金といふものが要るのだ。

治左衞　内濟金を出せといふのか。（笑ふ。）大方そんな事であらうと思つた。貴様はやつぱり强請だな。

銀次　なんだと……。

治左衞　先刻からそれを察してゐたが、弱い女に云ひがかりを附けて、金をゆする下心に相違あるまい。

岩松　おい、おい、兄い。この侍は巾着切りの加勢をするばかりか、逆捻ぢにおれ達をゆすり騙りの罪に落さうとするのだぜ。

銀次　二本ざしだと思つて遠慮してゐりやあ、飛んでもねえことを云ひ出しやあがる。おれも圓の銀次と云やあ、些つとは世間に面も賣れてゐる男だ。ゆすり騙りの悪名を着せられて、そのまゝぢやあ濟まされねえ。あさ、どこへでも突き出してくれ。（治左衞門にわが身を摺付ける。）それとも其の刀でおれを斬るか。

治左衞　斬るは易いが、赦してやる。（銀次を突き退ける。）早く立去れ。

銀次　いや、赦して貰ふにやあ及ばねえ。さあ、斬るとも突き出すとも二つに一つだ。

岩松　さあ、おめえの料簡次第に始末をしてくれ。

（銀次と岩松は地にあぐらをかく。治左衞門はむつとしながら、大事をかゝへし身なれば、努めて我慢してゐる。この時、上のかたより生田傳八郎、今は大坂にて弓劍の道場を開いてゐる身の上、これも編笠をかぶりて出で、無言にて此の體を見物してゐる。）

銀次　おい、なにをぐづ〳〵してゐるのだ。おめえも侍のやうでもねえ、見かけ倒しの意氣地無しだな。それとも無事に納める氣で、註文通りの内濟金を出しなさるか。

治左衞　なにを馬鹿な。

銀　次　それなら何とかおれ達を始末してくれ。
治左衛　(思ひ切つて。)む丶。始末して遣るから覺悟しろ。(刀に手をかける。)
傳八郎　(聲をかける。)お侍、しばらく……。
　(治左衛門は躊躇する。)
傳八郎　こ丶は拙者にお任せ下され。(進み出づ。)銀次……。貴樣たちは相變らず惡い事をしてゐるな。
銀　次　(笠の内をのぞいて少し驚く。)やあ、御堂の先生か。
傳八郎　貴樣はおれとの約束をおぼえてゐるだらうな。たしか今年の八月のことだ。つまらぬ因縁を附けて、おれの道場へ呶鳴り込んで來た。そのとき居合せた門弟どもが貴樣を袋叩きにして、川へ投げ込まうとするところをおれがなだめて助けて遣つた。
銀　次　(困つて。)さあ、そんな事もありましたね。
傳八郎　かさねて惡いことをしたら、今度は屹と赦さぬぞと、おれが云ひ聞かせて置いた筈だ。それにも懲りずに、又こ丶で強請がましい事をする。此のお武家が手をおろさる丶までもなく、おれが成敗して遣るから、さう思へ。(進みよる。)
　(この問答のうちに、治左衛門は傳八郎に眼をつける。)
銀　次　まあ、先生。待つておくんなせえ。譯も聞かずに嚇かしちやあいけねえ。
傳八郎　いや、譯を聞くには及ばない。貴樣が惡いに決まつてゐるのだ。御靈の界隈では蝮のやうに嫌はれてゐる圓の銀次、貴樣のやうな奴をいつまでも助けて置くと、世間の煩ひになる。けふはもう勘辨しないぞ。

銀　次　(舌打ちし。)先生に逢つちやあ敵はねえ。まあ、大目に見ておくなせえ。
傳八郎　では、おとなしく歸るのか。
銀　次　惡い人が來たので仕樣がねえ。
岩　松　ぢやあ、兄い。このま丶手ぶらで歸るのか。
銀　次　災難とあきらめて歸らうよ。
傳八郎　なにが災難だ。
銀　次　まあい丶から、歸りますよ、歸りますよ。どうもけふは暦がよくねえと思つた。
岩　松　やれ、やれ、つまらねえ事になつたな。
　(二人は着物の泥を拂つて、澁々ながら行きか丶る。)
傳八郎　これ、待て、待て。
銀　次　うるせえな。なんですよ。
傳八郎　このお武家にあやまつて行け。
銀　次　あやまるのかえ。
傳八郎　不承知か。
銀　次　(又もや舌打ちして。)どうも意地が惡く出來てゐるな。(治左衛門に向つて。)もし、失

禮を致しました。

岩　松　まつぴら御免なせえ。

銀　次　（傳八郎に。）先生。もうこれで文句はありますめえ。さあ、大手を振つて、行かうぜ。

（銀次と岩松は面をふくらせて、早々に下のかたへ立去る。おみよとお六はほつとして前へ出る。）

お　六　よい所へ先生がお出で下さいましたので、さすがの銀次も小さくなつて、早々に逃げて行きました。

おみよ　惡い奴に見こまれて、どうなることかと案じて居りましたが、おかげ樣で無事に濟みました。

お　六　とんでもない云ひがかりをして、幾らか強請る積りであつたか、それとも娘はんをかどはかす積りか、あんな奴のことですから何をするか判りません。その災難を逃れまして、まことに有難うござりました。

おみよ　店へ歸りましたら兩親にも委細を話しまして、いづれ改めてお禮にうかゞひます。

傳八郎　いや、禮などに來られては迷惑だ。けふは天滿宮へ參詣かな。

お　六　はい。先月の御縁日には差支へがござりましたので、今日御參詣にまゐりますと、その歸り道で飛んだ奴に出逢ひました。（おみよに。）あんな奴はまだ其處らにうろ／＼してゐるかも知れませぬから、道をかへて表門からまゐりませう。

おみよ　では、先生

傳八郎　氣をつけて歸るがよい。

お　六　御めん下さりませ。（上のかたへ急いで行かうとして心づく。）ほんにわたしは慌て者、心がせくのでこちらへ御挨拶も致さず……。（治左衞門に。）あなたにも御迷惑をかけまして重々恐れ入りました。

おみよ　まことに有難うござりました。

（治左衞門は笠の内にて首肯く。おみよとお六は再び傳八郎にも會釋して、足早に上のかたへ引返して去る。治左衞門は先刻より傳八郎に眼を附けてゐたるが、このとき無言にて茶代の錢を置く。傳八郎も不圖それに眼をつけて、はつとする。）

娘甲乙　ありがたうござります。

（治左衞門は始終無言、笠をかたむけて下のかたへ去る。傳八郎は笠をぬいで見送る。上のかたより下向の男女三四人通り過ぎる。そのあとより中間佐助出づ。）

佐　助　旦那樣。これにおいでゞござりましたか。

傳八郎　おゝ、佐助……。これへ來い。

（佐助進みよれば、傳八郎は下のかたを指してさゝやく。）

佐　助　（おどろく。）え、では、あの編笠の侍が……。

傳八郎　たしかに遠藤の兄治左衞門と見た。覺られぬやうに跡をつけて、その宿所を突きとめて

來い。

佐助　かしこまりました。（急いで行きかゝる。）

傳八郎　これ、これ、顏をつゝんで行け。

佐助　はい、はい。

（佐助は手拭にて頰包りをして、下のかたへ走り去る。傳八郎は思案しながら床几に腰をかける。）

娘甲乙　いらつしやいまし。

（娘甲乙は茶の支度をする。觀世物の囃子の音。）

——暗轉——

二

おなじ日の夕刻。

大坂の御堂筋、生田傳八郎の家。傳八郎は郡山を昨年立退いより、こゝに來りて弓劍の道場を開いてゐると知るべく、舞臺は傳八郎の居間にて、二重體の上のかたに床の間、つゞいて出入りの襖。上のかたに丸窓、好き所に机を置き、硯箱、書物などが載せてあり。庭の下のかたは建仁寺垣にて散り殘りたる紅葉の立木などあり。垣根の裾には寒菊なども咲いてゐる。舞臺に人なく、下のかたにて竹刀の音きこゆ。

（やがて下のかたの庭づたひに、内弟子の大原軍藏は稽古着に劍術の胴をつけ、袴をはきて出づ。）

軍藏　先生、先生……。

（奧の襖をあけて若き女中出づ。）

女中　旦那様は奧でお書き物をしてゐるでな、御用の濟むまでは誰も通すなとの事でございます。

軍藏　佐助が息を切つて歸つて來て、旦那様に直ぐにお目にかゝりたいと急いでゐるのだ。兎もかくも先生に申上げてくれ。

女中　はい、はい。（引返して奧に入る。）

（下のかたより佐助が急ぎ出づ。）

佐助　（せいて。）旦那様は……。

軍藏　女中に取次ぎを頼んだが、一體お前は何でそんなに慌てゝゐるのだ。

佐助　（躊躇して。）いや、お前さん達には判らないことだ。（云ひながら汗を拭いてゐる。）

軍藏　おまへは先生のお供をして、朝から天滿へ參詣に行つた筈だが、先生だけが先へ戻られて、お前は今ごろになつて汗を拭きながら歸つて來る……。見れば顏の色もおだやかでない。なにか仔細がありさうだな。

佐助　その仔細は……。お前へさん達には判らないと云ふのに……。（奥をのぞいて。）え丶、旦那様は何をしてゐるのだな。旦那様、旦那様……。（つゞけて呼ぶ。）

傳八郎　さう〳〵しい奴だな。（云ひながら奥より出づ。）お丶、佐助。戻つたか。

佐助　大急ぎで戻りました。

軍藏　なにか知りませぬが、佐助が眼の色を變へて騒いで居ります。

佐助　（じれる。）そんな事はどうでもいい。お前さんは邪魔だ、邪魔だ。早くあつちへ行つてくれ。

傳八郎　（軍藏に。）佐助の話はおれが訊くから、お前は遠慮してくれ。

軍藏　はあ。

佐助　さあ、さあ、早く、早く……。

（佐助は無理に軍藏を追ひ遣れば、軍藏は不審ながら下のかたへ立去る。）

傳八郎　（坐る。）お前もそこへかけろ。

佐助　はい、はい。（又もや汗をふいてゐる。）

傳八郎　おちついて靜に話せ。

佐助　はい、はい。（緣に腰をかける。）

傳八郎　先刻の侍は遠藤の兄であらうな。

佐助　はい。（云ひかけて左右をみかへる。）たしかに遠藤治左衛門でござりました。

傳八郎　して、その宿所は……。

佐助　八軒屋の近所に大和屋といふ舊い旅籠屋がござりまして、遠藤兄弟は三日前からそこに宿を取つてゐるのでござります。

傳八郎　弟の喜八郎も一緒か。

佐助　兄は遠藤勝右衛門、弟は山口武兵衛と變名いたしまして、中國筋の侍が大坂見物に出て來たと申し、毎日分れ〳〵に出歩いてゐるさうでござります。（摺寄つて聲をひそめる。）もし、旦那様。決して御油斷はなりませぬぞ。

傳八郎　（騒がず。）兄弟揃つて大坂へ出て、市中を毎日徘徊するからは、傳八郎のありかを尋ねてゐるに相違あるまい。就ては佐助。たび〳〵氣の毒だが、もう一度その大和屋といふ宿屋へ行つて來てくれ。

佐助　その宿屋へ……。なにしに參るのでござります。

傳八郎　（懐中より封書を出す。）この手紙を持參して、遠藤兄弟にとゞけてくれ。

佐助　え、この御手紙を……。

傳八郎　もし兄弟が留守ならば、宿へ戻るのを待つてゐて、たしかに返事を受取つて來るのだぞ。

佐助　（不安らしく。）はい、はい。

傳八郎　早く行け。

佐助　（躊躇して。）旦那樣。失禮でございますが、この御手紙には……。何とお書きなされたのでございませうか。

傳八郎　まあ、いゝから行け、行け。

（云ひすてゝ傳八郎は奧に入る。佐助はいよ／＼不安さうに手紙をながめてゐる。下のかたの垣のかげより軍藏出づ。）

軍藏　これ、佐助。

佐助　（びつくりして。）お、軍藏さん……。（あわてゝ手紙を隱す。）

軍藏　なんだか樣子がをかしいので、實はそつと窺つてゐたのだが、その手紙をとゞけに行く遠藤兄弟といふのは何者だ。

佐助　かうなつたら隱してゐられさうもない。その遠藤兄弟といふのは……。

軍藏　むゝ。

（軍藏が進み寄る時、傳八郎は奧の襖をあける。）

傳八郎　佐助。まだ行かないのか。

佐助　はい、はい。唯今まゐります。

（佐助と軍藏はうなづき合ひて、二人は早々に下のかたへ立去る。傳八郎は出で來りて見送る。夕鴉の聲。）

傳八郎　おゝ、もう暮れるか。冬の日は短いな。

（傳八郎は緣に立ちて空を仰ぐ。奧より女中出づ。）

女中　旦那樣。新町のお玉樣がお見えになりました。

傳八郎　お玉が來たか。これへ通せ。

女中　かしこまりました。（引返して去る。）

傳八郎　（ひとり言。）呼びに遣らうと思つてゐたところへ、丁度來たか。

（傳八郎は机の前に坐りて、火鉢の炭を積み直してゐる。奧よりお玉、二十歲。新町の茶屋の娘の姿にて先に立ち、あとより第一場のおみよとお六出づ。）

お六　先生。先刻はお世話樣に相成りまして、重々有難うございました。

おみよ　兩親からもくれ／＼も宜しくと申しました。（お六と共に手をつく。）

お玉　今朝ほど天滿で色々御厄介になりましたさうで、その御挨拶にあがりたいと申されますので、一緒に連れ立つてまゐりました。お禮のおしるしだと云ふことで、見事なお肴を澤山頂きましたから、お臺所へまはして置きました。

傳八郎　先刻も申した通り、あらためて挨拶に來られては却つて迷惑。その上に叮嚀なみやげ物などを持つて來られてはいよ／＼迷惑だが、折角だから貰つて置く。（會釋する。）おまへ達もひどく義理が堅いな。（笑ふ。）

お六　あんな惡い奴に云ひがかりを附けられて、どんな災難に逢ふかも知れない所へ、先生が折好くお出で下されましたのは、まつたく地獄で佛と申すのでございます。現にあの茶

おみよ　店に居合せたお侍さまが、見かねておあつかひに出て下されましたが、お國の方と侮つて、銀次めは喧嘩腰の挨拶、ほんに〳〵憎い奴でございます。今思へばあのお侍様にも、もつと叮嚀にお禮を申上げる筈でございましたが、一刻も早く逃げて歸りたいので、碌々御挨拶も致さずにお別れ申しましたのは、相濟まぬ事ぢやと存じて居ります。

傳八郎　銀次めが餘り圖に乘るので、あの侍も腹に据ゑかねて、たうとう刀に手をかけたが、斬りたくもあり、斬りたくも無し、少々困つてゐたやうであつたな。（又笑ふ。）いや、おまへ達の志は、わたしからもよく傳へて置くぞ。

お六　え。では、あなたはあの侍樣を御存じでございますか。

傳八郎　（少し詰まる。）いや、侍は侍同志で、又どこぞで出逢ふことが無いとも限らぬ。その時にはお前達が大そう禮を云つてゐたと話して遣らうよ。

おみよ　なにぶん宜しくお願ひ申上げます。

お六　（おみよに。）日暮れ方に長居はお邪魔、もうお暇申しませう。

お玉　まあ、宜しいではありませんか。

おみえ　いえ、わたし達はこれでお暇……。

お六　お前はゆつくりお話しなされませ。

傳八郎　もう歸るか。

おみよ　御めん下さりませ。

（おみよとお六は會釋して立上る。）

お玉　では、そこまでお見送りを……。

お六　どうぞお構ひ下さりますな。

（二人はお玉に送られて奥に入る。時の鐘。女中は行燈をとぼして出で、好きところに置きて去る。やがて奥よりお玉が引返して出づ。）

お玉　あの二人は繰返してお禮を申して歸りました。

傳八郎　銀次を叱つて追ひ拂つたまでの事だ。そんなに恩に着られては困るな。そこでお玉。實はおまへを呼びに遣らうと思つてゐた所だ。

お玉　なんぞ御用でございますか。

傳八郎　實は佐助を八軒屋の大和屋といふ宿屋まで使に出したが、その返事次第で……。あるひは今夜限りで、お前とも別れなければなるまい。

お玉　（おどろいて。）え。それは又なぜでございます。

傳八郎　まあ、騷ぐな。これからその仔細を云ひ聞かせる。おれが大坂に落付いて、町道場を開いたのは去年の七月、それからやがて一年半ばかりの間に、どうにか門弟の數も殖えて、御堂筋の道場とか、生田の先生とか云はれるやうにもなつた。又そのあひだには色里の酒の味もおぼえて、新町の茶屋遊びなどをする中に、近江屋のひとり娘のお前とも

縁が繋がるやうになつて仕舞つた。それがいつか世間にも洩れて、生田の先生は近江屋のむすめを妾にしてゐるなどと云ひ觸らす者もある。おまへの店でも定めて迷惑してゐるだらうと察してゐると、又こゝに迷惑をかけるやうな一件が出來したのだ。

お玉　その一件とおつしやるのは……。（すり寄る。）

傳八郎　（言葉をあらためて。）この傳八郎、退引ならぬ破目になつて、眞劍勝負をしなければならない。

お玉　（いよ〳〵驚く。）あの、おまへ樣が……。眞劍勝負を……。

傳八郎　おれは去年の五月、大和郡山の城下で人をあやめて立退いたのだ。それを知つてゐるのは佐助ひとりで、お前をはじめ門弟共にも祕してゐたが、もう隱し切れない時節が來た。けふの午まへに天滿で出逢つた旅の侍……。今もあの娘たちが噂をしてゐた旅の侍……。それがこの傳八郎をかたきと附け狙ふ遠藤治左衞門といふ者だ。弟の喜八郎も一緒であると云へば、傳八郎が大坂に住むことを聞き知つて、わざ〳〵尋ねて來たのであらう。

お玉　それでも若しや藏屋敷への御用でもあつて……。

傳八郎　藏屋敷の用向きならば、兄も弟も姓名をかへて、八軒屋あたりに宿を取つてゐる筈がない。奉公の身の上で大坂見物でもあるまい。必定かたき討と推察して、佐助を使に出して遣つた。

お玉　して、なんと云つてお遣りなされました。

傳八郎　生田傳八郎、決して逃げも隱れも致さぬ。尋常にかたきと名乘つて勝負いたせば、明四日の明六つまでに兄弟揃つて北中嶋の崇禪寺馬場へお出向き下されと……。

お玉　（泣聲になつて。）もし、旦那樣……。

傳八郎　兄弟の手なみは知れてゐる。大かたは返り討と多寡をくゝつてゐるが、勝負は時の運でどんな手違ひがないとも限らない。もし傳八郎が討たれたならば、これまでの縁と諦めてくれ。

（お玉はわつと泣き伏す。下のかたの庭口より軍藏出づ。）

軍藏　先生。

傳八郎　なんだ。

軍藏　猪飼どのを始めとして、六七人の門弟衆が先生のお目にかゝりたいと申して、打揃つてこれへ參ります。

傳八郎　門弟どもが揃つて來る……。（扨はと覺つて。）これ、軍藏。おまへは佐助と云ひあはせて、方々へ何か觸れ廻つたな。

軍藏　（躊躇して。）いえ、さういふ次第ではございません。門弟衆はまだ道場に殘つてゐたのでございます。

傳八郎　（すこし考へて。）いづれにしても逢ひたいといふ以上、逢はないわけにも行くまい。兎

も角もこれへ通せ。

軍藏　はあ。（引返して去る。）

傳八郎　（お玉に。）今聞く通りで、門弟共がこゝへ押掛けて來るといふから、お前はまあ奥へ行つてゐろ。

お玉　はい。（立ちかけて躊躇する。）

傳八郎　（催促するやうに。）なにかの事はあとで相談するから、早く行け。

お玉　はい。

（お玉は涙をぬぐひて奥に入る。下のかたより生田の門弟猪飼孫七、山本大吉、杉野勝彌、中川五郎次、福田新太郎、淺井伴吾、米津三平の七人出づ。その中には稽古着に袴をつけたるもあり。いづれも町奉行所附の與力同心等の子弟にて、血氣に燥る若者どもと知るべし。）

孫七　先生。

傳八郎　（おだやかに。）お手前達七人が打揃つて、何の用でござるな。

孫七　先生にお願ひ申したい儀がござりまして……。

傳八郎　どんな願ひか知らぬが、先づこれへお上りなされ。

孫七　では、御免を蒙ります。

（孫七は一同をみかへり、先に立つて縁にあがる。大吉、勝彌、五郎次もつゞいて

上る。新太郎、伴吾、三平は左右に分れて縁に腰をかける。軍藏は下のかたに立つてゐる。）

孫七　早速ながら、總代としてわたくしから先づ申上げます。先刻あの佐助を使として、八軒屋の大和屋へ書狀を持たせてお遣りなされましたが、あれは如何なる御用件でござります。

傳八郎　（微笑する。）その用件も軍藏や佐助から聞かされて、大かたは察してゐられるであらうが……。

孫七　大和郡山の遠藤治左衞門、遠藤喜八郎の兄弟が先生を弟のかたきと附け狙つてゐるさうでござりますな。

大吉　その兄弟の宿所へ御手紙をおつかはしなされたからは、尋常に御勝負をなさる思召しと察して居りますが……。

傳八郎　いかにも。（うなづく。）相手は非分で殺され損、殺した傳八郎にはお構ひ無く、無事に落着の噂を聞いて、拙者も安心して居つたる處へ、思ひがけなく遠藤兄弟がかたき討に出てまゐつた。武士の意地とは申しながら、彼等兄弟が理非をわきまへず、逆恨みに拙者を恨んで、飽くまでも仇討と云ひ張る上は、傳八郎もまた武士の意地、今更未練に逃げ隱れは致さぬ。兄弟二人を相手にして一々返り討にいたす所存でござる。

勝彌　就ては平生お世話に相成る御恩報じに、未熟ながら我々七人が、先生のお手傳ひにまか

り出でたく存じます。

五郎次　差出がましい奴等とのお叱りもござりませうが、先生の一大事をたゞ安閑と眺めては居られませぬ。

孫七　なにとぞ此の儀お聽き濟みを偏へにお願ひ申上げます。

七人　（口々に。）お願ひ申します、お願ひ申します。

傳八郎　師匠といふも名ばかりで、碌々にお世話もいたさぬ傳八郎を、かたき持と知つても見限らず、師弟の義によつて助力しようといふ、お志は重々忝なうござるが、その儀は必ず御無用になされ。

（門弟等は顏をみあはせる。）

傳八郎　この一年半の間にどれほどの修業を積んだか知らぬが、彼等兄弟は左のみ恐るゝ敵でもござらぬ。兄の治左衞門は相當の腕前でござるが、弟の喜八郎は年も若し……。（笑ふ。）生田傳八郎、どなたの助力を頼まずとも、どうにか互角の太刀撃は出來さうでござる。憚りながら御安心下され。

孫七　では、お許しはござりませぬか。

大吉　お供はかなひませぬか。

傳八郎　（斷乎として。）お斷り申す。およそ仇討の作法として、討手が助太刀をたのむ法はあれ、かたきが助太刀を頼む法はござらぬ。不束ながら生田傳八郎も武士の端くれ、殊に

大勢の門弟を取立てゝ、弓の引き樣、竹刀の持ち樣をも指南してゐる身の上で、左樣な卑怯な眞似が出來ると思はるゝか。

新八郎　先生の御氣性としては、さう仰せらるゝも御もつともでござります。

伴吾　また先生のお腕前ならば、相手の二人や三人、恐るゝ事もござりますまい。

三平　われ〳〵決して御加勢などと申すのではござりませぬ。たゞ何かのお手傳ひに……。

傳八郎　（打消すやうに。）いや、そのお手傳ひも無用でござる。傳八郎一人が行き向つて、尋常の立合ひを致せばよいので、別にお手傳ひを頼むやうな事もござらぬ。相手が二人と知れてゐるに、こちらが大勢の味方を連れて行くは、卑怯のやうにも思はれて、世間への聞えも恥かしうござる。

孫七　それゆゑ大勢の門弟には沙汰いたさず、これにある者だけが內密に……。

傳八郎　（屹となつて。）ならぬ、ならぬ。これほどに申しても肯き入れなく、お手前たちが無用の邪魔をして、この傳八郎に卑怯者の名を取らせたら、七生までもお恨み申すぞ。

（かく云ひ放されて、門弟等は取付く嶋もなく、無言にて頭を垂れる。下のかたより佐助は急ぎ出づ。）

佐助　唯今戻りました。

傳八郎　おゝ、佐助……。思ひのほか早かつたな。して、返事を受取つて來たか。

佐助　たしかに受取つてまゐりました。

（佐助は懷中より封書をさし出せば、傳八郎は直ぐに開封して、行燈の下にて讀む。門弟等は息をのんで窺つてゐる。）

傳八郎　（讀み終つて首肯く。）よい、よい。（佐助に。）同じところを往きつ戻りつ、定めて草臥れたであらう。部屋へ戻つてゆつくり休め。

佐助　もう御用はございませんか。

傳八郎　むゝ。ほかに用はない。

軍藏　（進み出づ。）その返事には何とございました。

傳八郎　もちろん承知と云つて來たのだ。（門弟等に。）かうして返事を受取つたからは、拙者もいさゝか支度を致さねばならぬ。お手前達にもお引取り下され。

（傳八郎は手紙を懷中して立上る。軍藏と佐助は顏をみあはせる。）

軍藏　先生……。

佐助　旦那様……。

傳八郎　なんだ。

軍藏　門弟衆が折角に願つてゐるのでございますから……。

孫七　われ〳〵七人の中から、せめて二三人をお供させて……。

傳八郎　えゝ、くどい事を……。お手前達はそれでも侍か。恥を知れ、恥を知れ。

（再び激しく叱り付けられ、門弟等は恐れ入つて沈默す。軍藏と佐助も頭を垂れる。）

奥の襖をあけて、お玉が窺ひゐる。薄く風の音。夜廻りの太鼓の音。）

――幕――

第三幕

一

第二幕の翌日、即ち十一月四日の曉。冬の夜の明けやらぬ頃。大坂、北中嶋村の崇禪寺馬場。正面には松の大樹が並木のやうに續いてゐる。あたりの枯草は霜を置いて白く、上のかたと下のかたには枯尾花が高く生ひ茂る。並木のうしろは一面の黑幕。

（薄く風の音。梟の聲。上のかたより崇禪寺と記せる灯を持ちたる僧一人出づ。）

僧　（ひとり言。）おゝ、今朝はえらい霜だ。

（下のかたより圓の銀次は手拭を首に卷きて、疲れたやうにふら〳〵と歩み出づ。）

銀次　もし、もし、坊さん。こゝはどこですね。

僧　崇禪寺の馬場でござる。

銀次　はゝあ、崇禪寺馬場か。（あたりを見まはす。）不思議なところへ來たものだな。

僧　道にお迷ひなされたか。

銀次　まあ、そんな事かも知れねえ。どうも不思議だな。

僧　夜の明け切らぬうちに、一體どこへお出でなさるのだ。

銀次　どこと云つて……。實はゆうべ此の北中嶋に小さい賭場が開けるので、宵からそこへ出張つて行くと、運が惡くてすつかり取られた。

僧　やれ、やれ、お氣の毒な。

銀次　あんまり癪に障るから、夜なかに其處を飛び出したが……。さあそれからが判らねえ。なんだか同じやうな所をぐる〳〵廻つて、たうとうこんな所へ來てしまつたのだが……。（考へる。）もし、坊さん。おまへさんは唯つた今こゝらで、若い女を見かけませんでしたかえ。

僧　若い女……。（笑ふ。）若い女が今頃こんな所へ來る筈がない。はゝあ、おまへは狐に化かされたな。

銀次　こゝらへ狐が出るかえ。

僧　この頃は惡い狐が出るといふ噂だ。

銀次　やあ、扨は畜生め。おれを化かしやがつたな。（眉に唾をつける。）そんな話を聞かされたら、なんだか急に寒くなつて來た。（銀次は襟をかき合せる。梟の聲。）

銀次　あの聲はなんだね。

僧　梟が鳴くのだ。

銀次　むゝ。梟か。忌な聲をしやあがるな。（梟の聲。薄く風の音。上のかたの枯尾花をかき分けて、お玉が手拭をかぶりて窺ひゐる。）

銀次　（すかし視て。）やあ、さつきの女がそこにゐるぞ。

僧　え。（これも提灯に透し視て。）わあ、狐だ、狐だ。（僧は一目散に下のかたへ逃げ去る。お玉も隱れる。）

銀次　（弱味を見せじと呶鳴る。）えゝ、狐が何だ。こののら狐め。よくも銀次さまを化かしやあがつたな。うぬ、おぼえてゐろ。（銀次はそこらに落ちたる松の枯枝を拾ひ取りて、お玉の隱れたるあたりを叩き立てれば、お玉は逃げ出る。銀次は捨臺詞にて追ひまはせば、お玉は掻いくゞりて、下のかたの尾花のかげに再び隱れる。）

銀次　（ぼんやりして。）はてな。畜生め、どこへ隱れて仕舞やあがつたか。（そこらを見まはす。）何しろ薄暗いので、よく判らねえ。博奕に負けて、その揚句に狐に化かされりやあ世話はねえ。あゝ、詰らねえ。あゝ、寒い、寒い。（銀次はいよ〳〵ぼんやりして、上のかたへふら〳〵と立去る。風の音。梟の聲。下のかたより遠藤治左衛門、遠藤喜八郎の二人、鎖帷子の上に紋附の小袖をかさ

ね、大小、裁附、草足袋、武者草鞋のこしらへにて出づ。年の若き喜八郎はやゝ落付かぬ體なり。）

喜八郎　兄上。まだ薄暗うございますな。

治左衞　宿を出るのが少し早かつたので、夜がまだ明け切らないやうだ。兎も角もそこらで待合せるとしよう。

（二人はあたりを見まはし、治左衞門は松の根に腰をかける。喜八郎は立つてゐる。）

治左衞　（空を仰ぐ。）空は晴れてゐるな。

喜八郎　その代りに、ひどい霜でございます。

治左衞　むゝ。ひどい霜だ。そこらの枯草が雪のやうに白く見える。おまへは寒くないか。

喜八郎　氣が張つてゐるせゐか、別に寒いとも思ひません。

治左衞　まさかに焚火も出來まいから、少しぐらゐ寒くとも我慢しろ。そこで、喜八郎。けさの勝負を濟ませる前に、おまへに云ひ聞かせて置きたい事があるので、わざと時刻を早めて出て來たのだ。

喜八郎　今となつて、どんなお話があるのでございます。

治左衞　まあ、掛けろよ。

喜八郎　はい。（やはり立つてゐる。）

治左衞　まあ、おちついて掛けろと云ふのに……。

（風の音。枯尾花がざわ〳〵と鳴る。喜八郎は俄に上のかたへ進み行きて窺ふ。）

治左衞　風の音だ。

喜八郎　それでも油斷は出來ませぬ。

治左衞　こゝで勝負をすると約束した以上、不意討やだまし討をするやうな傳八郎ではない。安心してこゝへ掛けろ。

喜八郎　はい。（まだ立つてゐる。）

治左衞　おまへは何だか落付かないやうだな。そんな事では、いざと云ふ時に不覺を取るぞ。まあ、こゝへ來て、おれの云ふことを聽け。

（喜八郎はよんどころなく立戻りて、兄のそばに腰をかける。梟の聲。）

治左衞　これから傳八郎と立合つて、どつちが討つか討たれるか、神樣でなければ知らない事だが、もしも首尾よく本意を遂げたらば、おまへは町奉行所へ訴へ出て、かたき討の次第を申立てろ。

喜八郎　（不審さうに。）して、あなたはどうなされます。

治左衞　運拙くして返り討に逢へば勿論だが、たとひ傳八郎を討留めても、おれは再び歸國しない覺悟だ。

喜八郎　（おどろく。）そ、それはどう云ふわけで……。

治左衛　おまへも知つてゐる通り、おれは生田傳八郎をかたきと恨む心になれない。相手は城下を立退いて仕舞ひ、そのお捌きも一旦相濟んで、そのまゝ無事であれかしと、心ひそかに祈つてゐたが、何分にも母上が承知なされない。腹違ひの弟であるから、惣左のかたきを捨てゝ置くのだと、兎角に僻んでおれ達を恨む。叔父の甚五郎どのも例の氣性から、理非を問はずに仇討を催促する。義理の母と叔父とに責められて、この一年餘りおれも苦しい月日を送つて來たのだ。（嘆息する。）その辛抱はおたがひに辛らかつたな。

喜八郎　母上には每日のやうに泣いて恨まれ、叔父上には顔を見るたびに叱り付けられ、いつそ私ひとりで仇討に出ようかと、あなたに相談した事も、二度や三度ではございませんでした。

治左衛　それをおれが無理におさへてゐる中に、生田傳八郎は大坂で劍術指南の道場を開いてゐると云ふが噂が國許までも洩れ聞えた。そのありかの知れない中は格別、已にありかが知れた以上は、どうしても捨てゝは置かれず、止むに止まれぬ破目になつて、かたき討の願ひを差出してみた處、恐らく叔父上なども内々手を廻したのであらう、思ひのほかにお許しが出た。さうなると、いよ〳〵猶豫は出來ず、直ぐに大坂へ出て來ると、きのふ天滿で傳八郎にめぐり逢つた。

喜八郎　相手もそれを察したと見えて、わたし達の宿へ果し狀を送つてまゐりました。

（又もや風の音。枯尾花のさわぐ音。喜八郎は俄に立上りて屹と左右に眼を配る。）

治左衛　風だ。風の音だ。傳八郎は不意討をするやうな卑怯者では無いといふのに……。お前はなぜ落付かないのだ。

喜八郎　はあ。（引返して、土に片膝つく。）

治左衛　おれたちに見付け出されても、今さら逃げも隱れもせず、みづから進んで勝負をしようといふのは、流石に生田傳八郎、立派な侍だ。（又もや嘆息する。）どう考へても、おれ達のかたき討は間違つてゐるやうだ。

喜八郎　（不安を感じて。）では、兄上……。あなたはかたき討をお止めになりますか。

治左衛　はゝ、何を云ふ。（苦笑ひする。）今さら止めようと云つても止められる事か。おれは唯これだけのことを云つて置きたいのだ。よんどころない義理づめで、たとひ傳八郎を討取つても、それを手柄に大手を振つて、再び故鄕へ歸らうとは思はない。傳八郎への申譯に、おれはどこへか立退いて、一生浪人する積りだ。

喜八郎　（又おどろく。）して、遠藤の家はどうなされます。

治左衛　遠藤の家は次男のおまへが繼いでくれ。かたき討をして歸れば、母の機嫌も直る。叔父上も褒めてくれる。いひなづけのお菊と夫婦になつて、無事に御奉公を勤めてくれ。

喜八郎　（爭ふやうに。）それはお言葉が違ひます。首尾よくかたき討を濟ませたら、あなたも立派に御歸國なさるが當然ではございませぬか。

治左衛　なにが當然だ。恨むまじき人を恨んで、無用のかたき討をする。それが正しい武士の道

であらうか。世間の人になんと云はれても、たとひ何と褒められても、おれは決して嬉しくない。心の底では恥かしい位だ。

喜八郎　(泣かぬばかりに。)もし、兄上……。かたき討を眼の前に控へて、唯さへ心の落付かない所へ、不意にそんなお話を聞かされては……。わたしの心は暗やみで、何がなんだか判らなくなりました。

治左衛　(諭すやうに。)判らない事はない。今にもこゝへ傳八郎が出て來たらば、兄弟進んで鬪へばいゝのだ。

喜八郎　でも、兄上は傳八郎を討つ氣になれないと……。

治左衛　それはおれの心持を云つたまでの事で、今のおれ達は鬪ふの外はないのだ。

喜八郎　はい。

治左衛　必ず臆してはならないぞ。(云ひかけて下のかたを見る。)おゝ、提灯の火が見える……。誰か來たぞ……。

(喜八郎はあわたゞしく立つて二三歩進み出で、これも下のかたを透し視る。)

喜八郎　(小聲に力をこめて。)傳八郎のやうでございます。

治左衛　むゝ。(これも立上る。)

(薄く風の音。下のかたより佐助が手丸の提灯を持ちて先に立ち、生田傳八郎は小袖、鎖帷子、割羽織、野袴、大小、武者草鞋にて出づ。あとより大原軍藏も附添ひて出づ。治左衛門兄弟は少しくあとへ退りて窺ひゐる。)

傳八郎　まだ明るくならないかな。提灯を出せ。

佐助　はい。(提灯を出す。)

傳八郎　(提灯を取る。)こゝまで送つて來れば、もう用はない。おまへ達は歸れ。

軍藏　はい。(佐助と共に躊躇してゐる。)

傳八郎　さあ、早く歸れ。

二人　はい。

(軍藏と佐助は顏をみあはせて、下のかたへ引返して去る。傳八郎は提灯を持ちて上のかたへ行きかゝる。)

治左衛　(進み出づ。)傳八郎か。

傳八郎　(みかへる。)おゝ、治左衛門……。喜八郎もそこにゐたか。おれも早い積りでゐたが、お手前達は猶早かつたな。かうして三人が揃つた以上は、急ぐこともあるまい。もう少し明るくなるまで待たうではないか。

(傳八郎は悠々と立戻り、手丸の提灯を地に置きて、松の根に腰をおろせば、治左衛門兄弟もおなじく腰をかける。梟の聲。)

傳八郎　傳八郎が郡山を立退いたのは去年の五月、やがて一年半にもなる。思へば月日は早いものだ。おふくろ殿は達者かな。

治左衞　母は幸ひに達者だが、持病の疳性が募つて困る。

傳八郎　む、おふくろ殿は疳が强い。その親讓りで惣左も疳が强かつた。おれがどうして惣左を斬つたか、お手前達も知つてゐるのであらうな。

治左衞　常稱寺の住職から詳しく聽いた。

傳八郎　それならば別に云ふこともない。あの晩は常稱寺へ行つて、住職を相手に碁を打つて、その歸り道に惣左に出逢つて……。今になつて考へると、おれももう少し我慢をすれば好かつたのだ。それにしてもお手前達はなぜ今までに出て來なかつたのだ。

治左衞　(少し躊躇して。)それは……。お手前のありかが知れなかつたからだ。

傳八郎　此頃になつて知れたのか。(うなづく。)そこで今度出て來たのは、お手前たちの思ひ立ちか。

治左衞　(再び躊躇して。)さうだ。勿論のことだ。

傳八郎　確にさうか。おふくろや叔父に押出されて來たのではないか。

治左衞　(又もや躊躇して。)いや、そんなことは無い。

傳八郎　(まだ疑ふやうに。)さうか。では、先づそれとして……。きのふ天滿で出逢つた時に、なぜ直ぐに名乘り掛けなかつたのだ。

治左衞　一緒に來てゐる此の弟を出し拔いて、おれひとりで勝負をするわけにも行かないので、その場は無事に別れたのだ。早々に宿へ歸つて、弟の歸るのを待つてゐると、お手前の方から使が來て……。いさゝか先手を打たれた形であつたよ。(笑ふ。)

傳八郎　(おなじく笑ふ。)先手を打つと云ふでもないが、かうなつたら未練無しに、早く埒を明けてしまつた方が、さつぱりして好からうと思つたからだ。まあ、そんなものでは無いか。

治左衞　さすがは生田傳八郎、よくそこに氣が附いてくれたと蔭ながら褒めてゐたのだ。

傳八郎　お手前達にはまだ云ひたい事もあるが、今となつては何も云ふまい。討つか討たれるか、二つに一つ。(刀の柄を叩く。)おたがひの運はこの刀に任せるのだ。

喜八郎　(催促する。)兄上。そろ〱支度いたしませう。

治左衞　まあ、急ぐな。慌てると傳八郎に笑はれるぞ。

傳八郎　若い者が急ぐのも無理はない。空もだん〱に明るくなつた。こゝで直ぐに勝負をするかな。

治左衞　(あたりを見まはす。)こゝらは足場が惡いやうだ。もう少し廣い所へ出ようではないか。

(時の鐘きこゆ。)

喜八郎　(また催促する。)あれ、六つが鳴りました。

治平衞　六つを相圖に斬合はねばならぬと云ふ法もない。まあ、急ぐな。(上のかたを指さして。)あの邊に廣場があるらしいぞ。

傳八郎　（みかへる。）成程、あの邊がよからう。
喜八郎　（待ちかねて立上る。）さあ、參りませう。
傳八郎　むゝ、行かう。（提灯を吹き消して捨てる。）草の霜が深いから、足を滑らせないやうに氣をつけろよ。

（傳八郎は先に立ち、治左衞門兄弟はつゞいて上のかたへ去る。雞の聲。空は明るくなる。下のかたの尾花のかげよりお玉が忍び出で三人のあとを見送る。下のかたより軍藏と佐助が引返して出づ。）

軍藏　おゝ、お玉さん。
佐助　お前もこゝへ來てゐたのか。
お玉　女の來る所ではないと知りながら、あんまり氣になつてならないので、夜の明けない中から忍んで來ました。
軍藏　さぞ寒かつたでせうな。
お玉　寒いも怖いも忘れてしまつて、さつきから隱れてゐましたが、いよ〳〵勝負が始まるやうで……。（不安らしく上のかたを見る。）
佐助　旦那樣は早く歸れと仰しやつたが、こゝまで附いて來てゐながら、そのまゝ歸られるものではない。
軍藏　おれも案じられてならないのだ。もう少し先へ行つてみようではないか。

お玉　さあ、さあ、行きませう。

（お玉は先に立つて行きかゝる時、上のかたより銀次が足早に出で來り、お玉に突き當る。）

銀次　やあ、おめえはさつきの狐ぢやあねえか。
佐助　なにを云やあがる。おゝ、貴樣は銀次か。どうしてこゝらにうろ〳〵してゐるのだ。
銀次　大變だ、大へんだ。おめえの所の先生がこれから眞劍の勝負をするらしいぜ。
軍藏　えゝ、そんなことは知つてゐるのだ。仰山さうに騷ぐな、騷ぐな。
銀次　だつて、お前。大變ぢやあねえか。一體こりやあ何うしたのだ。
お玉　（じれて。）そんな人に構はずに、早く行きませうよ。

（お玉は上のかたへ急ぎ去る。軍藏と佐助もつゞいて去る。銀次は呆氣に取られたやうに見送つてゐると、下のかたより堺の岩松出づ。）

岩松　おゝ、兄い。こゝにゐたか。大變だ、大へんだ。
銀次　そつちにも何か大變があるのか。
岩松　おめえのからだが危ねえのだ。町方の手が廻つたらしい。
銀次　（舌打ちして。）そりやあ野暮な事になつたな。
岩松　色々の惡い噂が高くなつたので、いよ〳〵御用の聲がかゝるらしい。もううか〳〵しちやあゐられねえぜ。

銀　次　まつたく油斷はならねえ。（上のかたを見かへる。）人の勝負を眺めてゐるどころか、こつちが眞劍勝負になつて來たぞ。

岩　松　何かそつちに勝負があるのかえ。

銀　次　まあい丶から、來い、來い。

（銀次は急いで下のかたへ去る。岩松もつゞいて去る。雞の聲。）

――暗轉――

三

おなじく馬場。第一場につゞける草原にて、正面には矢はり松の立木、そのうしろには冬枯れの田畑が見ゆ。夜はまつたく白みて、あたりは明るく、崇禪寺（曹洞宗）の朝の勤めの音きこゆ。

（舞臺のまん中には生田傳八郎、白のうしろ鉢卷、羽織をぬいで襷をかけ、拔刀をたづさへて立つてゐる。下のかたには遠藤治左衛門、白の鉢卷、襷がけにて、身には二筋の矢を負ひて倒れてゐる。そのうしろには遠藤喜八郎、これも同じ拵へにて三筋の矢を負ひて横はる。兄は深手、弟は已に息絶えてゐる。あたりには四五本の矢が落ちてゐる。）

治左衛　おのれ、卑怯者……。

（治左衛門は刀を杖に起き上らうとして又倒れる。傳八郎は無言、たゞ悼ましげに眺めてゐる。）

治左衛　（苦痛の聲を振り絞る。）武士と武士とが立派に勝負すると約束しながら、大勢の助太刀をかたらひ、しかも遠矢を射させるとは……。卑怯の上にも卑怯だぞ。

傳八郎　（これも悲痛の嘆息。）治左衛門……。お手前も定めて殘念であらう。おれも實に殘念だ。

治左衛　え丶、殘念とは……。おのれ、どの口で云はれるのだ。あざむいて我々兄弟をこ丶へ釣り出し、返り討にするおのれの計略……。その罠にか丶つたは一生の不覺であつた。（這ひ寄つて睨む。）やい、傳八郎。今の今までまことの侍と、おのれを見損じたが口惜(くちを)しいぞ。

傳八郎　（しづかに。）いや、見損じでない。生田傳八郎はまことの侍だ。

治左衛　これが尋常の勝負ならば、兄弟揃つて返り討にならうとも我々は決しておのれを恨まぬが、手だてをめぐらしてだまし討も同樣……。それがまことの侍のする事か。恥を知れ、恥を知れ。

傳八郎　（又もや嘆息する。）今となつては何事もお手前の耳には入るまい。傳八郎を卑怯者と恨むのも尤もだ。恨んでくれ、憎んでくれ。弟は三筋の矢を負つて、そこに死んでゐる。お手前も急所に二筋の矢を受けて、所詮助かる術(すべ)はあるまい。人間に魂があるならば、

生用傳八郎がまことの侍であるか無いか、草葉の蔭で見物してくれ。

治左衞　なんの、おのれが……。(這ひ起きようとして又倒れる。)

傳八郎　介錯をして遣りたいが、かたきのおれに首を撃たれては、お前もいよ〳〵無念であらう。わが手で潔よく生害しろ。(刀を鞘に納める。)

治左衞　むゝ。もうこれまでだ。

(治左衞門は刀を取直して、わが喉を突かうとしながら、力盡きて二三度突き損じ、そのまゝ倒れて息絶ゆ。祟禪寺の勤めの音。傳八郎は悲痛の眉をひそめながら、死骸をながめて無言。やがて鉢卷と襷をはづし、そこらの松の枝にかけてある羽織を取つて着る。上のかたより猪飼孫七、山本大吉、杉野勝彌、中川五郎次の四人は弓矢を持ち、つゞいて福田新太郎、淺井伴吾、米津三平は手槍を持ち、いづれも身輕にいでたちて出づ。)

七　人　先生……。

(傳八郎は無言にて見かへる。門弟等はその顏色を窺ひながら進み寄る。)

孫　七　兄弟ともに息は絶えましたか。

傳八郎　(冷かに。)この通りだ。

(門弟等は兄弟の死骸をのぞいて、いづれも首尾よく仕留めたと囁き合ふ。)

傳八郎　弓を持つてゐる者はこれへお進みなさい。

四　人　はあ。(更に進みよる。)

傳八郎　(孫七に。)その弓を……。

孫　七　はあ。

(孫七は何心なく我が弓を渡せば、傳八郎はその弓を取つて孫七の足を拂ふ。不意におどろいて孫七は小膝を突くところを傳八郎はつゞけ打ちに打ち据ゑる。大吉、勝彌、五郎次の三人はあわてゝ支へんとすれば、傳八郎は突き退けて、更に大吉等三人をも打ち据ゑる。新太郎、伴吾、三平は恐れてあとへ退る。)

傳八郎　(憤怒の聲をふるはせ。)お手前等はよくも〳〵拙者の武士を廢らせたな。ゆうべもあれほど云ひ聞かせて置いたに、無用の加勢を致すばかりか、遠矢を射かけるとは何事でござる。恥を知る傳八郎が、今もこの治左衞門に恥を知れと罵られて、返す言葉もない始末、それもみなお手前等の仕業でないか。傳八郎が一生の恨み、この場に於てお手前等を打ち殺すから覺悟めされ。

(傳八郎は弦の切れたる弓を振上げる。その勢の激しきに、門弟等はます〳〵恐れて地にひざまづく。)

孫　七　先生。恐れ入りました。

大　吉　お言葉にそむいて加勢に出ましたは。

勝　浦　我々の不心得でござりました。

五郎次　幾重にもお詫びを申上げます。

孫　七　なにとぞ御勘辨をねがひます。

七　人　（口をそろへて。）御勘辨を願ひます。

傳八郎　いや、勘辨は相成らぬ。詫びて赦さるゝことでは無いのだ。さあ、一人ひとりにこれへ出られい。

（傳八郎は弓を捨てゝ、刀に手をかける。門弟等は進退に窮していたづらに平伏してゐる。下のかたよりお玉が走り出で、傳八郎の袂に縋る。）

お　玉　もし、旦那様……。

傳八郎　お玉……。おまへもこゝへ來たのか。

お　玉　門弟衆を御成敗はしばらくお待ち下さりませ。

傳八郎　えゝ、止めるな。おまへの知つたことではない。

お　玉　いえ、門弟に罪はござりませぬ。みんなわたくしの罪でござります。

傳八郎　なに……。

お　玉　どう考へましても、今朝の勝負が案じられてなりませぬので、ゆうべ道場からの歸り道に、猪飼さまのお屋敷をおたづね申して……。

傳八郎　（意外の告白におどろく。）え。では、お前が猪飼の屋敷をたづねて……。孫七、確にさうか。

孫　七　はあ、實はお玉どのが見えましたので、一旦は思ひとまつた我々も、再び相談いたしまして……。

傳八郎　むゝ。（お玉の襟髮を取つて引き据ゑる。）やい、お玉。女賢しうして牛賣り損ふと、世のたとへにも云ふ通り、いらぬ女の小才覺で、この傳八郎に恥辱を與ふるとは、言語道斷の憎い奴め。おのれから先づ成敗するぞ。

（傳八郎はお玉を突き倒して、再び刀に手をかくれば、下のかたに窺ひゐたる軍藏と佐助が走り出づ。）

軍　藏　先生……。

佐　助　旦那様……。

軍　藏　門弟衆に加勢を頼みましたのは、お玉殿ばかりではござりませぬ。

佐　助　わたくし達も共々に、お願ひ申したのでござります。

傳八郎　では、揃ひも揃つて貴様等までが……。（左右をみまはして嘆息する。）おれの心を知る者はひとりも無いのか。

お　玉　あなたを大切に思へばこそ、みんなが苦勞いたしました。（泣く。）それが惡いことならば、皆さま方の總代に、わたくしを御成敗くださりませ。さあ、お手にかけて下さりませ。

（お玉は泣きながら身をすり寄せる。傳八郎はぢつと思案し、やがて軍藏と佐助を

みかへる。）

傳八郎　（しづかに。）もう朝日が出た。兄弟の死骸をそちらの松のかげへ運んで置け。

二　人　はあ。

（軍藏と佐助は治左衛門と喜八郎の死骸をかきあげ、下のかたの松の木蔭へ運ぶ。朝日のひかり明るく、雞の聲。）

軍　藏　（傳八郎の顔色を窺ひながら。）して、これからどうなされます。

佐　助　奉行所へ屆けて參りませうか。

傳八郎　あとはお前達によろしく頼む。兄弟の死骸はこの崇禪寺に埋葬して、ねんごろに弔つてくれ。（云ひすてゝ行きかゝる。）

お　玉　（袂にすがる。）もし、あなたはどこへ……。

傳八郎　邪魔の多い世の中だ。おれの行く先は迂濶に云はれぬ。

（傳八郎は袂を拂つてゆく。軍藏、佐助、門弟等は遮りかねて躊躇する間に、傳八郎は足早に向うへ立去る。人々は茫然と見送る。雞の聲。）

――幕――

第四幕

一

大和國、生駒郡、生駒の村はづれ。

下のかたへ寄せて、茅葺きの古き辻堂。その正面は木連格子にて、軒に鰐口が掛けてあり。堂にならびて上のかたに椎の大樹、その下に腰をかけるほどの捨石あり。正面は田畑、農家などを隔てゝ山々の遠見。

第三幕より十日ほどの後、曇りし日の午後。をり／＼に時雨ふる。

（遠藤の母おいの、矢崎の娘お菊、いづれも旅姿にて笠と杖とをたづさへ、辻堂の縁に腰をかけてゐる。中間千六もおなじく旅姿にて、荷物と笠を下に置き、椎の木の下の捨石に腰をおろしてゐる。時雨の音。上のかたより村の男二人は頬被り、鋤鍬をかついで足早に出で、下のかたへ行き過ぎる。やがて下のかたより旅僧一人が笠をかたむけて出で、これも時雨に追はれるやうに上のかたへ行き過ぎる。）

お　菊　（空をみる。）時雨はまだ晴れませぬな。

千　六　（おなじく空をみあげて。）それでも西の空に雲切れがして居りますから、もうやがて晴れませう。この頃の道中は、とき〴〵に時雨に逢ふのが難儀でござります。